しにがみつみこ

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しにがみつみこ

【Ｎコード】
Ｎ５８２９Ｓ

【作者名】
朋次郎

【あらすじ】
◎これも仮題です◎◎これは一種の犯罪小説になりますのでご理解のある方のみお読みください。当たり前のことですがこれは犯罪を助長並びに奨励するものではありません。また文中に出てくる団体、個人名は全く架空のものですのでご了承ください。実際に模倣されうることも考慮して薬品名や術式はぼかしてあります。」」」」簡単なあらすじ・医師免許と薬剤師免許をダブルで持つ女、志神積子。普段はごく普通の真面目な精神科医だが場合によっては依頼を受けて殺人を請け負う。通称、しにがみつみこ。日本国内、と

きには海外にまで出張いたします。（この時点で「何だこれは！反社会的だ！」とお怒りな方はどうか読まないでください。）

第1話

ここは大阪ミナミ某橋の近く。ここ、実はある広域暴力団幹部の事務所がある。

みんなが知っている表の顔はごみごみとしたアーケード街だ。良くも悪くも大阪の印象がこの町に集約される。曰く食い倒れの街、大阪。こてこての町大阪。たこ焼き屋が一番林立しているあたり、夜になるとキャバクラのお兄ちゃんが呼び込みをしたりする。ごてごてした町、大阪。そういう観光客の絶えない道沿いから1つそれたところ。知る人ぞ知る場所。

そこの1階が焼き鳥屋さんだ。2階と3階が当の事務所。麻雀屋あり、1円パチンコあり、ポーカー屋あり、表通りよりは静かだが表通りよりはごちゃごちゃしたところ。

だが、焼鳥屋がおいしいのでグルメ雑誌に載ったりしているらしい。何も知らない観光客がマップ片手に昼前に並んだりしている。

そこへ1人の女がやってきた。大きな紙封筒を手に持っている。それ以外は小さなトートバッグを肩から提げている。残念ながらどちらかというと不美人に見える。冴えない容姿の部類になるだろう。年の頃はよくはわからない。２０代にも見えるが角度によっては４０代後半にも見える。

また容姿にも頓着はないようでかつ本人自身がそれを残念だとはおもっていないふしがある。

一応スーツは着てはいるもののノンブランドだ。もう何年も着用しているのか、裾が擦り切れている。茶色か紫色かよくはわからない色をしている。

どこでこんな古い昭和を思わせるデザインの服を買うのだろう。アパレル業界にいる女ならばきっと軽蔑をこめて考えるはずだ。でもそれは一瞬。すぐに忘れて次に食べるおいしいものや買い物に脳内のリストアップにいそしむ。そういう印象の女だった。

その女は髪もぼさぼさだった。靴もぺたんこ靴だ。合皮だろう、どうせ。これもすりきれている。要は身なりに構わない女。
ただ不美人だと言い切っても人によっては目と目が離れている印象が変わっていてインパクトのある容姿だという人もいるかもしれない。そして目。彼女の目はなんというか印象深かった。切れ長の瞳でまつ毛がない。男っぽい目ともいえるが、その目に知性を感じる人もいるだろう。
そんな女が焼鳥屋の列をしり目に傍にある外付けの階段を上がって行く。

階段を上がるごとに敏い人は女が履いているストッキングが上等でおろしたてだということに気づくはず。足が綺麗に手入れされていて無駄毛もないということ。ちらちらと見えるスリップのレースが繊細で上等のお品だということに気付くはず。
そして階段を上がるときに見えるふくらはぎの筋肉がやせすぎもせず肥りすぎでもなく、スポーツか何かで鍛え上げた肉体のそれだとわかるはず。
２階にあがると女は躊躇なくドアを開けて入った。それで焼鳥屋にならぶ客の列はもう見えない。でも焼鳥屋の出す香ばしい良い匂いは屋内に入ってもなおまといつく。
女は１つのドアの前に立つ。
「大阪興業カンパニー大阪本部」
何の変哲もないいやに金色のぴかぴかしたプレートの下にインターホンがある。そしてすぐ上にどんなに鈍感なヤツでもそれとわかるこれ見よがしの防犯ビデオが２つついている。
女はビデオに一瞥もくれずインターホンを押した。
間髪も入れずドアが開く。大柄の若い男が出てきて「はい？」と言う。ぶわっという感じで煙草のにおいが焼鳥屋のにおいを押さえて圧倒した。男はこの女を見て驚きを隠さない。この場所にはどう見ても堅気の女は１人でやってくることはまずないのだ。女は少し

会釈するとにこりともせず「この封筒をお返しにあがりました。絵図さんに渡してください。しじん、からといえばわかります。よろしく」と言った。
落ち着いた声だ。上ずりもせずまたさっさと片付けようともしていない。ゆっくりとしゃべる。
そして封筒を渡すとさっさと帰ろうとした。
「あ、ちょっと待ってくださいッス。頭いますんで。待ってくださいッス」
若い男も只者ではない。すぐに女が持ってきた封筒が若頭の絵図直筆だということに気付いたのだ。しじんが死人か何かはしらんが、封筒の口は開いてはいない。厳重に閉じ込まれている。イヤに重いが何かはわからん。しかしハイ、そうですか、とこのまま女を返せば雷が落ちるだろう。この俺に。

第2話

若い男はそこで少し待っているようにと言い置いて奥に引っ込んだ。それから彼は急ぎ足でフロアを横切り最奥の部屋へノックする。「おう」という低い声に応じて若い男は恭しく「しじん、という女性が来ています。封筒を返す、と。会われますか、それとも受け取るだけでいいでしょうか」とお伺いをたてた。

しばらく無言だったがいきなりドアが開き肥った男が顔を出した。そして声と眉ををひそめ「・・美人か？」と聞いた。若い男はつっかえて「どちらかというと好みじゃないッス」と正直に答える。若頭は苦笑して「お前のお好みを聞いてんやねえよ。でもまあ、おばさんなんやろ。・・・通せ」

バタン、ドアが閉まった。

頭も知らない女らしい、だが若者は急いで入口に突進してドアを開け女に会釈した。

「どうぞ、お入りください」

女は「いいえ、こちらで・・」と言う。

「いや、でも頭が入れと言いますんで」

「封筒さえ渡せばいいのです。確かに渡していただけましたね？では」

女はくるりと踵をかえして帰ろうとする。そこへ「しじんさん、待ってください」と渋い声がした。頭の声だ。若者はぴょこんととびあがり後ろに下がって頭を通した。

新来の客に頭がこうして入口まで出てくることはまずない。頭は堅気の人向けのにこにこ顔で「しじんさんお会いできてうれしいですよ、」とお愛想を言った。

女は頭の元まで戻り顔をみてはっきり言った。

「絵図さんですね。はじめまして、志神（しじん）です。でもいきなり面会もなしにこういうことをされると困るんですよ」

目で封筒を指示してこう言ったので若者は息をのむ。
「これは依頼でしょうか、何にしてもお受けできません、わかりましたね」
絵図は顔を手で撫でた。怒るかと思ったが怒りはしない。
「いや、失礼しました。話は実は加納から聞いたんです。封筒が届けられてよかった。それは開けてもらえばわかりますが依頼ではないでんす。・・私どもにも一応、というか人材はそろってますんでね・・ただ今後のつきあいもあろうかと思いまして」
「そうですか。加納さんから聞かれましたか。とりあえず返した返していないの口論にもなってもいけませんし、近くに来たついでに届けにきたのです。私は極道の方々とはおつきあいなどはしませんのでね。すみませんがご理解ください」
本当にはっきり物を言う女だ。絵図が怖くないのだろうか、この女はおとなしい顔をして阿呆なのか。若者は頭がいっ怒りだすかはらはらしていた。中にいる数人の若いものもシーンとして成り行きを見守っている。
頭のすぐ後ろにはいつのまにかボディガードの李が立っている。彼は真剣な顔をして2人を見つめていた。絵図は構わず女の顔を柔和な笑顔で見つめたまま「おいお茶をお入れしろ」と言った。そしてドア越しに女に顔を近づけて「お互い変わった商売だが俺たちは敵同士ではない。だが加納から聞いたと思うが先日のあんたの仕事は首尾を遂げたがあれは俺たちにも依頼が来ていてね・・顔をつぶしたとは言わねえがちょっと挨拶していくぐらいは今後のお互いのためになるのじゃないかと思いませんかねえ」
女はちょっと笑った。
「いえいえ・・あれは依頼者はお互い別々でしたがターゲットは確かに同じ人物でした。まれなことだと思うし、以後そういうことはないと考えています」
若者は大急ぎでお茶を入れたのかそれでも丁重に茶卓ものせてきちんとした仕草でお盆を持ってきた。絵図は玄関に置いてある小さ

な靴箱の上にお茶を置かせた。それから女に続けて言った。
「あの封筒には5本が入っている、わかりますな」
「お金なんかいりませんよ」
「うんうん。でも受け取ってほしかったねえ」
李がいつの間にかもう1つの部屋の出口から廊下にまわっている。女のすぐ背後に立っている。
李は手練の拳士だ。頭の合図1つ、目線1つで、女をどうにでもできる位置にいる。
そしてこの絵図は思ったことは絶対にやりとげる男だ。若者はお茶を靴箱の上にそっと載せお盆を両手でそっと持ってどうなるか息の詰めて話を聞いた。そしてこの女がどうなるか固唾をのんだ。

第3話

女の方も絵図をじっと見て考えていたようだ。やがて絵図に軽くうなづくと「じゃあ、こうしましょう。すみませんがライターを貸してください。あ、とそのお盆も貸してください」と言った。

絵図は若者の方へぐいっとあごをしゃくり、言う通りにしろと合図する。

若者が茶卓ごとお茶をのけて盆をカラにした。すると女が丁寧に封筒のセロテープをはがして裸のままの１００万円の札束を5個これまた丁寧に乗っける。事務所の玄関先での話だ。

いつのまにか絵図の後ろには事務所全員が固唾をのんで狭い玄関を凝視している。

女は李からライターを受け取るとそのまま火をつけた。

札束はあっけなく燃える。みんな無言で燃える札束を見ていた。絵図もじっと見ている。女だけは事務所のメンバーの顔を見回してじっとしていた。まるで俺達が生徒で何かの監視役でここに来た、という感じだ。にっこり笑うわけでもないしコビもうらない。すっぴんの堅気の女のはずだ。

だが絵図の女に対するこの態度といい、この札束をあっけなく燃やしてしまうという発想といい、堅気の女と片づけてしまえない何と言うか迫力があった。

李も女との間合いをつめたまま女を凝視している。女は平気な様子で知らん顔だった。やがて火の勢いが弱まると玄関のわきに置かれた茶卓を取ったと思うとやおらざっと盆にお茶をかけた。

火は何も言わずに消えた。

５００万円・・・あっけなく灰になる。少し残っているところもあるがこれでは日銀も交換には応じないだろう。

事務所にいた若いもの全員がそっと溜息をついた。

絵図はじっと女を見ている。彼は恰幅が良くまた明るい性格のよ

うに見られるしまたちょっと短気なようにみられるが実は違う。陰湿で冷酷で残酷だ。相手のすることをじっと最後まで見つめてから急きょ自分のしたい行動を突っ走るところがある。そして自分の決めたことは必ず自分で決めたようにする。いわゆる吐いたツバはのめない。いったん言い出したら必ずそれを実行するし実行できる男だ。だから極道の世界でも一目おかれているのだ。それを知っている若者はそして事務所にいる人間全員が、絵図がどういうか怖かった。女がどうなるか怖かった。

だが絵図は何も言わない。

女はこう言った。

「これでなしにしましょうね。あなたは私に渡した。私は一度は受け取った。そしてそれは消滅した。ね、これで終わり」

絵図は「そうはいかないだろう。さっきの金はあんたのものでどう扱おうがこれは自由だ。だがこれで、志神さん、あんたはうちとかかわりができた。今後何か会うこともあろう」

女は少し唇のはしを緩めた。微笑むというよりも苦笑という感じか。

「それでは、失礼します」

絵図も応じる。「あー、今日のところはな、」

女は軽く会釈した。そしてくるりときびすを回して廊下の端にある階段を下りる。絵図はじめ事務所全員がそれをだまって見送った。李は絵図に付けましょうか、というふうに首をかしげたが絵図は答えなかった。それで李も動かなかった。

ただ絵図は女の仕事ぶりを加納から聞いて知っていたので今日のところはこれでいいと考えていた。

一方この女の背後にずっといた李はこの女のことが忘れられなかった。何物かは知らないが、自分とは無縁の人物どころかいつか自分と一緒に仕事するような、そう考えてしまう自分に自分でややあきれていた。あの女はどうみても恋愛の対象になりえないし、まし

てや組織の人間もなんでもない。一体どこからそういう考えがわくのだろうか。李は自分で自分にいぶかった。だが考えても仕方がない。自分は今絵図のボディガードでそれ以外の何物でもないのだから。

最初に応対に出た若者も女の正体を知りたかったが絵図に聞けるような身分でもなんでもない、だからああみえてもきっとバックになにか政治的な大物が夫か父親で、大金持ちなんだろう、だから５００万円と言う大金をあっさり燃やしてしまえたのだと想像していた。

第４話

積子は最寄りの地下鉄の駅につくとすぐに関空をめざして乗り継いだ。関空に到着すると便名を告げてチケットレスで搭乗手続きに入る。

機上の人になるとほっと一息ついた。

志神積子・・しじんせきこ、は本名だ。

しかし通称名は本名から連想される「しにがみ、つみこ」と呼ばれている。

自分がそうよんでくれ、と頼んだわけではない。それはあまりにバカバカしいことだ。

死神罪子・・・

そうだ、確かに私は殺し屋だ。

死神罪子。ふさわしいこの私の、通り名。

しかし積子は用心深い。この通り名が有名になりすぎても困るのだ。また殺し屋という名前が先走ってもいけない。積子は確かに殺し屋で非合法の仕事をしてはいるが仕事は慎重に選んでいるつもりだ。

しかしこう通り名が有名になっていいことなんかないだろう。これはあくまでも裏の仕事だ。表の仕事に支障がでるのは困るだけだ。

さっきの絵図は積子はいわゆる暴力団の幹部ということぐらいは知ってはいたが、つきあいなどするつもりはないし、今後もないであろう。ただああいう人種の金は受け取りたくなかったことと、しかし受け取らねば今後の活動に妨害するようになっても困る、いわば金を燃やしたのは苦渋の選択といってもよい。ああするよりも良い方法があるかといえばあの状況ではなかっただろうともいえる。へたをうてば積子がつぶされるか、もしくは消されるかだ。

ただ積子は寝ようかと考えていたが寝れず結局起きていた。

週刊誌もフライトアテンダントが貸してくれたが読まなかった。た

だ加納が自分のことをどういったか、また絵図とは本日はじめて対面したがこれだけではすまないことがわかっている。
　彼がまた何か言ってきたらどう対応するかシュミレーションと言うか対策を練っていないといけない。積子は極道とはつきあう意思はまったくなかった。あちらは通常のいわゆる大多数の人間がもっているもしくは守っている社会的通念というかルールが通じない世界の人間だ。

　積子はアンダーワールドというか非合法のこういう仕事には応じているが、理由がある。しかしああいう極道の世界の人間に自分のことを知られたくもなかったし、それで有名になっても非常に困る。だが絵図は日本を代表する暴力団組織の重鎮と言われている組織の人間だし、素顔をさらして今後のあいさつと称したお金をわざわざ返金しに行ったのはそれなりの礼儀を示したつもりなのだ。
　また絵図のお金の処分はああするしかなかったと考える。こちらは受け取りたくもないし、あちらもいったんどうぞ、と差し出したお金を、というメンツもあるだろう。積子はああいった組織の人間とはつきあいはないが、顔をつぶされるのを一番嫌う人種だというのはわかるので燃やしたのだ。
　自分はいったんうけとったがそれでもつきあいは避けますと、とやんわりと伝えたつもりだ。それで今のところは大丈夫だろう、と考える。
　もし彼から何らかのアクションがまたおこしてきたらそのときはそのとき、ということで考えよう・・・。

␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣
␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣
␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣␣

一方、事務所の中の奥の一室にタバコをくゆらしている絵図はソ

ファに寝っ転がったまま、今の気に入りの出張マッサージ嬢に背中をもませている。部屋にいるのはその嬢とボディガードの李だけだ。
絵図の背中には見事な九龍の彫り物がある。四肢全部に彫らず背中全面のみだがそれでも迫力がある。絵図はこの彫り物が内心大変な自慢で誇らしく思っている。１０代後半に真面目に彫り師のもとに通いつめて３年がかりの芸術品だ。この龍に恥じない極道としてのふるまいを心がけている、いわば真面目？な性格なのだ。
一方、絵図のボディーガードの李も非常にきまじめかつ寡黙な青年で、いつも身辺を警護すべく影のごとくつきそっている。ただそれが仕事と割り切っているのであって、自分を尊敬するが故の行動とは思っていない。人望がないのは絵図自身が一番わかっていた。それでも事務所に常時詰めている人間をはじめ、組織の人間が自分をたててくれるのはその冷酷な所業と資金調達力にあると考えている。
かれはお金は豊富に持っているが、お金には執着してはいない。女に背中とゆっくりと揉ませたまま。頭を回転させた。それは午後に来た女だ。今自分の背中を揉んでいる女と人種は同じだが中身はまるで違う。
「しにがみ・つみこ」
その名をはじめて聞いたときは半年ほど前に入っていた留置場の中だった。加納と言うその男に、そして不謹慎にも「なんだ、その名前は、わあっはっはっは！」と笑い出して監視のお犬様（けいさつかん）に睨まれたっけ。
凄腕の殺し屋。銃を使うでもない、ナイフを使うでもない。でもいったん引き受けると確実に殺してくれるという・・・。
加納は実に２０年ぶりに会った男である。大学で一緒にサッカーをしていた。（絵図はこれでも大卒だ）社会に出てから一度も会ったことがない。２０年ぶりの邂逅ということになるが、まさか留置場で会うとは思わなかった。が、お互い様だろう。
「殺し屋ねえ・・しかも女だろ？小説やドラマじゃないのか？そり

ゃ誰でも一人や二人、殺してやりたい人間はいるだろうが。依頼者は堅気、というか一般の人間かね？どういった需要があるのかね」
加納は言った。この男は経済学部で大変優秀な成績を収め、○○省に入っていたはずだが、収賄で逮捕されたのだ。新聞にも出た。実は逮捕は3度目だが以前2回とも証拠不十分で釈放されている。
「俺は今回も大丈夫さ。それよりも絵図、お前こういう仕事だろ。変わった女がいるから教えてやる、」と打ち明けられたのが「しにがみ・つみこ」

第5話

絵図は背中を揉ませながら顔を少し上げた。
「李・・・さっきの、あの女、どう思った」
李は絵図を見て言う。
「あの女は用心深いです。ものすごい注意深いです」
「そうか？」
「頭(かしら)から目を離しませんでした」
「そうだな」
「頭の目を見ながら封筒を受け取って封筒を封切りました」
「そうだったかな」
「そうです。私は後ろから見ていました。女は武器も何も持っていません。だけど知恵がありました」
「目をみながら、か。俺が何か封筒に細工していたとしたら、見破る気があったのかな」
「それはわかりません」
絵図は背中の上の女を脇に座らせ自分も座る。女は絵図にしなだれかかり、自分の乳房を揉ませた。だが絵図は李に向かい反応しない。
「李、あの女はな、しにがみつみとと言われている、殺し屋だ。・・・・はははは、・・殺し屋に見えたか？」
「いいえ、全然」
李は驚かなかった。
「・・・」
絵図は考えていた。本当に変わった女だ。今どうこうしようとは考えてはいないが、しかし考える余地はありそうだ・・・。
女殺し屋。加納は教えてはくれてもよくは知らないようだった。この状態で情報提供とは片腹いたい。だがおもしろいと思った。殺し屋とはめったにない職業じゃないか、そうだろう？ヒットマンは

やれるやつならこの事務所にも何人かいる。しかし女でプロというのは・・・。
「李、さっきの女、洗っといてくれないか、ま、急ぎではない、ゆっくりでいいや」
「承知しました。・・今から動いてきていいですか」
絵図は軽くうなづき目をつぶった。あの変な女・・年は自分とそう変わらないように思えるが・・。それきり女のことは考えるのはやめた。考えるのは重要だが今現在では必要ではない。
顔をあげるとすでに李の姿は消えていた。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」

絵図が再びその「しにがみつみこ」と出会ったのは2年後である。その間の彼女の行動は誰も知らないが、これを読んでいる読者だけは当然知りえる権利がある。

・・それではまずは彼女のやり方を見てみようか・・

（プロローグ完）

第1話

場所変わって、積子、九州某空港に到着。
そこで虹子と落ち合い、コインロッカーのカギを受け取る。虹子はこれから情報収集に忙しいのだ。夕方、もしくは夜に落ち合うことになっている。双方の今夜だけ使用する双方の携帯電話の番号を確認後に虹子はさっさと積子から離れて他人のふり。
積子はロッカーに入っていたトートバッグを受け取りトイレでくたびれたぼろぼろのださいスーツからぱりっとしたキャリアウーマンらしきブランドスーツに着替える。そして髪を整える。ハードタイプのヘアムースをつけて前髪を後ろに撫でつける。ヘアスタイルは女医らしく、きりっとした印象を与えたいのだ。
スーツとヘアを綺麗に整え、化粧もすませると気分も落ち着いてきた。虹子は言いつけていた通り最後に大事な役目をもつ大きなマスクも数点入れておいてくれている。
身支度を整えてトイレから出てくると1人の男性が目の前に立った。
それはつい2，3時間前に大阪の絵図の事務所で会った男性のうちの1人だ。男性はやせて背が高く一見みただけではごく普通の大学生のように見えた。
「李、と申します。すみませんがこれから僕も仕事にしばらくの間同行させてください。お邪魔になるようなことはしません。ご迷惑もかけませんのでどうぞよろしくお願いします」
「・・・・」
積子は黙り込んだ。この男は自分と同じ飛行機に搭乗し、自分の後を付け、虹子とのロッカーのカギの受け取りをし、直後にトイレに入って別の服に着替えたことを知っているのだ。
今更ながら絵図に対して、こういう男を雇い、かつ自分の後を付けさせ仕事に同行させようとするその手腕に舌を巻く。事務所には

いろいろな人間がいる。積子があの事務所を去った後に誰かが付けていたとは思えないが進行方向から検討をつけて飛行場に搭乗の予定を聞くことは可能だろうと思う。
今の時点で飛行場の顧客データ管理部に絵図の関係者もしくは協力者がいても彼の勢力なら不思議ではない。だが今日という日にいきなり初対面の李と名乗る男性と一緒に仕事をしろとは・・・。

自分には時間があまりない。積子は頭をフル回転させたが一歩も動いてはいない。李も動かない。積子がどう答えるかじっと黙って突っ立っている。その目は挑戦的でもなく、ただ平静さを装っている目でもない。まるで今日はいい天気ですねと言った後じっと反応を見ているような感じだ。
「・・・何か自分にできることがあれば協力します」
「ツイッターとかなさる？彼に仕事中継などされても困りますけどね」
「そんなことは誓っていたしません。邪魔しないし、こうしてくれと言われたら言う通りにします」
「・・・」
多分どうあってもこの青年は動かないだろう。絵図から言われてきたのならきっとそれなりの何らかの力はあるのかもしれないが本当に「今は」時間がない。
積子は時計を見た。うかうかしていると面接の時間に遅刻してしまう。積子は腹をくくった。
「じゃあね、今から言う女性、さっきの女はね、虹子さんと言うの。彼女と待機してくれる？彼女とは今から携帯で連絡するからすぐ行ってきて！あとのことは全部終了してからお話ししましょうね」
李はうなづいた。そして積子に言われた場所に向かって走って行った。積子はすぐに携帯で手短に協力者が1人出現したこと、そのものと連絡するまで待機しておくように申しつけおいた。
虹子ならば大丈夫、彼女もアクシデントに非常に強い女だ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

積子はそれから空港から出てすぐにタクシーを拾った。そこからタクシーで2時間弱。

目的地は鎮静会鎮静病院。精神科オンリーの中規模の病院だ。ベッド数は約１００ほど。この地方にしては規模が大きいとはいえる。

積子はタクシーの中でもいろいろと情報を仕入れた。相手はタクシーの運転手さんだ。その運転手さんは気さくな人で「実は看護師でこれから面接に受けに行く」と打ち明けるといろいろと教えてくれた。

評判自体はあまりよくないようだ。昔から精神科のある病院は郊外にあるか、不便な場所にあるかと相場が決まっている。結核全盛期の時代と同じく社会から脱しているとみられる風潮が今なお生きている現れかもしれない。キチガイ病院と言われるのは精神病院の宿命みたいなものだが鎮静病院には、一度入院したら二度と出られないという風聞がある。

「・・へえ、怖いじゃないですかあ」

「まあ、ここは田舎だからね。精神病にはまだまだ偏見もあるしね。鎮静病院は鎮静一族が仕切っていたけど、今前の院長も副院長も失踪してしまって後妻の嫁さんが仕切っているらしいですよ」

「失踪・・・院長も副院長も？」

「そうです。もう5年にもなりますかねえ。当時はいろいろとうわさが飛び交ったけれど、結局何もなかったです。親子で経営していたけどね。今は院長の奥さんも医者なんでその人が仕切っているらしいですよ？」

「そーなんですか。ところで、ここの看護師の仕事は大変そうかなあー」

「お客さん、求人誌、私もちょくちょく見ますが鎮静病院っていつ

も人材募集してますよ。ハローワークでもいつも見かけるし。人手不足なんだろうと思いますよ」
「お給料はよくも悪くもなかったですけどね」
「まあ、看護師さんならね、仕事は選べますよね。私みたいに運転するしかないのと違って、」
　タクシーの運転手はにこっと笑った。積子はあたりさわりのない話をした。院長親子の失踪はそんなに話題になっていないようだ。失踪に関しては東京などの大都市では報道されてはいない。事件性はないと見られているのか・・・？
　タクシーに下りるや否や積子は大きなマスクを取り出して、顔の下半分を隠した。これから花粉症を装うのだ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」

　鎮静病院は本当に山の中に建っている。植林で成り立っている山で杉の木ばかり。これでは本物の花粉症の人はたまらないだろうと推測できる。どこかで鳥が鳴いていてのどかな光景だ。小さいがバスのロータリーもあり、駐車場も広い。もう夕暮れ近いので外来はもう閉まっているだろう。患者の姿は見当たらない。
　バス待合の1角に喫煙場があり、数人のパジャマ姿の入院患者らしき人々がタバコを吸っている。
　病院自体は、結構繁昌しているようだ。

　今や積子は大きなマスクをしてこの病院の玄関に立っていた。タクシーの中では求人の応募に応じて来た看護師だったが今度は積子はここでは重篤な「花粉症の医師」になるのだ。これなら大きなマスクをしていてもあやしまれないだろう。
　ずずっ、ずずっと水鼻をわざとらしくすするふりをしながら、玄関を入る。すぐそこにいた受付兼警備員に医師採用面接に伺った旨

を伝える。話は伝わっていたらしく丁重な挨拶をうけて、階上の病院長の部屋に案内された。
この病院の設立は昭和はじめでかなり古い。建て増しを重ねたのか、入りくんだ構造になっている。外来はさすがに綺麗にしつらえていて、見た目は古くとも居心地良いように待合室も座り心地のよさそうなソファを置いている。時刻は午後の４時。外来診療も終わり、待合室は閑散としている。廊下を何度か曲がる。曲がるごとに廊下はみずぼらしく古くなっていく。壁はしみだらけ。窓は小さくひびわれている。そして鉄格子ががっちりとはめられている。
いかにも古い時代を担っていた歴史ある精神科の病院と言った風情だ。最後に廊下つきあたりの小さなエレベーターに乗る。
エレベータも古い。が、最上階の４階に着くとそこの廊下はこれがあの建物かと思うぐらいに急に都内の高級ホテルのような雰囲気になった。
ふかふかの壁、絵のことはわからないが高級そうな直筆の油絵、アールデコの燭台にシャンデリア。
積子はあきれて口もきけない。こりゃあ、大儲けしているだろうなあ・・。失踪した院長親子に変わり、後妻の新院長が仕切っているのはデータ通りだ。
女性好みのぜいたくな装飾といい、病院の利益は自分の趣味に使いこむ、と・・。そういう病院長だろうなあ・・。
警備員は慣れた様子でどうぞ、という。分厚いそして背の高いドアの前にたつと一体ここは精神病院なのか、それとも海外旅行に来た高級ホテルなのか、・・・積子は楽しくなってきた。

本日の積子のみなりは。
きちんとした知性を感じさせるスーツ。地味な灰茶色だが上品な紋様の地模様が入っている。そして黒を基調としたエルメスのスカーフを巻く。ヒールは中くらいでノンブランド。靴は履きやすいのが一番だ。バッグはイヴ・サンローランの地味目のブラック。イヤ

リングやネックレスの装飾品はなし。
　化粧も地味めにしている。ほとんどノーメークといってもよい。年は３５歳の設定になっている。案内の警備員が部屋から去ると積子は「田中あき」と名乗り、大きなマスクをはずして丁寧にあいさつした。そして院長に履歴書を差し出して再度お辞儀をしてソファに座る。
　同時に花粉症であることを断ってまたマスクを手早くつけた。それからさりげない様子でそっと部屋を見回す。

　この病院長の部屋は。
　部屋は２００ｍぐらいで大き目だが、贅沢品でうずもれている。精神科医を思わせる学術誌や製薬会社の物品は全く見当たらない。かわりに少しは名のしれた画家の油絵やアールデコの調度品が所狭しとおいてある。

病院の規模は約１００ベッド。うち７０床は閉鎖病棟で重症の精神疾患の患者を収容しているらしい。いつも満床だという。中堅規模にあたるが個人経営でこういう規模を１人でやっているのはその手腕は大したものだろう。
　積子はそこの院長に就職の面接を受けにきたのである。院長は女性だ。名前は鎮静鐘美。６３歳。関西出身の精神科の女医。ここの病院の女ボス。そして積子の今度のターゲットに「なるかもしれない」女性だ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」

　ターゲットに「なるかもしれない」とは、どういうことか。
　積子は実はただの殺し屋ではない。自分がこの手であの世に見送るにあたってそれに足る人間であるかチェックを必ず入れるように

している。裁きというわけではない。いわば自分との知恵比べに足る人間であるか、かつ依頼者の願いに応えうる仕事であるか、それをチェックするわけだ。

そして身辺調査を執拗にする。安く早くをモットーに仕事はしない。年単位での仕事になる。そしてその対価はもちろん安くはない・・。

鎮静病院の院長、鎮静鐘美はとりあえず美しく見えるように努力している初老の女性だ。医師なので当然白衣を着ている。ただその白衣の下は上質な生地でできたスーツだ。そして強烈な香水のにおいがした。髪も染めているのか真っ黒で艶のあるセミロングヘア。それをくるっとまいている。

年は６３歳のはずだがどうみても４０代前半にしか見えない。化粧にもお金をかけているようだ。厚化粧にみえないように努力しているがそれはかろうじて報われているようだ。

しわはほとんどないが首に年齢を感じさせる横筋のしわが何本もある。が、金とルビーの豪華なデザインのネックレスに目を奪われ、老いを感じさせるものはほとんど気にならない。

またしわのないことからアンチエイジングにお金を出しているのだろう。今の美容外科の進歩には目を見張るべきものがあるから。

美人かというえばまあ美人であろう。老醜というものはない。そんなもの外見上お金さえあればいくらでも若返ることができる。ただ彼女から何となくにじみでてくる心の卑しさが何となく匂ってくる・・。そういう類の醜さ・・。

このあたり読者はわかるだろうか？理解できるだろうか？

ほかの普通の人間にはわからないだろう。ただ積子にはわかる。積子は闇にうごめく側の人間で、闇でしか通用しない仕事をしているからだ。ただし、積子の本来の表の仕事は医者である。

積子はここでは「田中あき」と名乗っている。きちんとした本物

の医師免許は持ってはいるがこの名前の免許証はもちろん偽造である。しかしここには長く働くつもりはないのでこれで十分だ。
積子は適度に緊張した表情を「わざと」持たせつつ、鐘美院長に申し出た。
「このとおり履歴書と医師免許証をお持ちしました」
鐘美院長はざっと形式的に目をとおす。
「あら、田中先生、精神科の臨床オンリーだったの？それならうちも好都合よ。それですぐに働けるのなら即決で雇わせていただくわ。知ってると思うけどうちは精神科外来と病棟しかないからね。仕事自体は楽なものだと思うけど、当直などはできるでしょ・・・年棒制で２０００万円ほどでよかったわね。あなたは前借が即時で必要だとおっしゃっていたでしょ？これで、いかがかしら」
「えええ、その条件でかまいません」
鐘美院長はにっこりとした。積子・・ここでは田中あきも微笑む。ただし、ぎこちなさを（演技で）こめて。それから鐘美はややくだけた調子で多分最初から不思議に思っていた疑問を口にした。
「・・田中先生、東京の大学付属病院にずっと長年いて、いきなり九州の田舎の病院に来たのはなぜ？うちが気にいったわけではないでしょう？うちの立地としては、僻地になるし常勤の医師のきてがなかなかないので実践を積んだ熟練した医師は大歓迎よ。ただ・・・こんな立派な経歴なのに、うちにくるなんて・・ありがたいけれど、どうしてなの？やっぱりお金？本籍地も住所は愛知県になっているし、訳があるなら教えてちょうだい」
積子あらため田中あきもにっこりした。
「ええ、私は実は訳ありなのです。亡くなった主人は事業をしていましたが、去年動脈瘤破裂で急死しまして・・。彼が残したものに、巨額の借金がありまして。それで、前借のきく病院を探していたのです」
「それで半年先払い希望といってきたのね・・まあここにくるのは大抵訳ありの医師も多いから。驚きはしないわよ。それにしてもご

主人若かったのでしょうが」
鐘美は形式的に気の毒そうな顔をした。まあ礼儀にはかなっている。積子は礼儀正しくお辞儀し鐘美もそれに応じてうなづいた。鐘美はもうこの「田中先生」の雇い主になったのだ。

第1話（後書き）

追記・作中に出てくる虹子ちゃんは「結婚詐欺」に出てくる女性と同一人物の設定です。

第2話

積子は適度にでっちあげの話を続ける。相手は精神科の臨床の腕は不明だが、医師を名乗っている限りは素人相手の演技ではいけない。積子は慎重に話を続ける。

亡き夫の借金の金額は2億ほどだが、こちらに迷惑をかけることはない。だが借金取りからのがれたい。しかし自己破産はしたくない。そしてなるべく遠くの病院で住居も用意してくれて高給の病院に勤めたい。

初対面だからこういう感じでいいだろうと思う。鐘美はどういう性格かはわかっている。しかし実際に会ってみないと事前の情報だけでは分からないことも多い。この人は多分この話のウラ、つまり積子なる田中あき先生とやらの借金の内容を調べ上げるかもしれない。

いや、この人はするだろうな、と思った。しかし今の時刻はもうすぐ5時。明日どこかの探偵に身元調査されても大丈夫。早ければ今晩この鐘美の命を処理するのだから。・・・調べ上げて田中あきなる医師の存在も、某大学付属病院にそういう医師の在籍もないことも。でっちあげの履歴も判明する以前にこの仕事を片付けるつもりだ。

だが実行する前に積子だけの儀式がある。かつ依頼人からはできることなら「生かさず殺さずの状態にしてくれ」との注文もうけている・・・。もちろん殺してもいいがあっさり殺すならなにも積子に依頼してきたりはいないだろう。積子はできるだけ依頼人の希望にこたえようと努力はする。が、その前に鐘美をもう少し観察したい。

鐘美はやはり経営者だけあって決断が早い。そして半年分の前借を支払うことになったので当然態度も横柄になった。
「田中先生、じゃあ、きっちり働いてよね。半年分の給料をさくっと支払います。これは１０００万円を無利子で信用貸しするのと一緒よ。銀行ではなかなかできないことでしょ。私はあなたを信用して出すのだし、それなりのことはしていただくわよ。いいわね？
それでは病棟を案内するわ。早速明日から・・、いえ今晩から。勤務していただきますのでね、それから住居はもちろん用意していますがここの敷地内の看護師用の住居で一緒でいいですね。あ、ちゃんと個室にしてあるからそれは大丈夫だからね」
「ええ、わかっています。助かります」
今日就職面接にきて、今晩から働け、とはあんまりな。半年前から鐘美のことは調べていたがやはり金銭的には儲かっているが、医師や看護師が酷使されるのでいつかないらしい、という調査は本当だったな・・・。積子は鐘美に「わかりました」と言った。それから大げさ目に水鼻をすすりあげた。
この仕草はかなり貧乏くさくみえたらしい。鐘美はふっふ・・、と笑った。積子のことをもう完全に信用し、完全に下目にみている。
「・・・あんた、田中先生、花粉症はひどいようね。診察で患者さんに嫌がられないようにね。精神科だからやっぱりホラ神経質な患者も多いから・・・言っていることはわかるよね。うちはアレルギーは診ないけど薬ならあるわ。いろいろ試してみたら」
「院長、ありがとうございます。薬局で試させていただきますわ」
鐘美は言葉は横柄だが根は親切なようだ。それから自分から先に立って病棟を案内すべくドアを開けた。
積子改め「新任の田中先生」は自分の履歴書がそのまま豪華な机の上に置いたまま、そしてアールデコの美しい装飾をされたドアがオートマチックではなく鍵もアンティークだがかけないまま解放した状態であることをさりげなく確認したうえで院長の後についていった。

・・・用心深くないところってありがたいわね、ふふふ・・・

第3話

廊下を歩きながら積子こと、田中先生と鎮静鐘美院長は並んで歩く。もうすでに夕暮れで夕焼けが窓越しに廊下を照らす。鉄格子がはめられているが、古めかしい壁と向かい側に見える建て増しらしきまだ新しい外来の棟が見えてちょっとシュールな光景だった。

「あの、ここの医師は何名ですか？」

あらかじめ調べ上げた情報では常勤医師は４名、非常勤医師は３名とはなっていたが・・・

鎮静鐘美はこともなげにいった。

「ああ・・、それね。一応総勢７人とはなっているけれど、いつもいるのはそうね、私と外来だけ診療に来る通いの医師が２名かな。だからあなたがきてもらうのは大変に助かるわ」

「そうですか、では病棟に詰めているのは」

「閉鎖病棟も、準閉鎖病棟もうちで長期入院しているのはほとんど慢性的な状態なのでね、みんな看護師たちがしているわよ」

「みんな、というのは？」

「ああ、処方のことは全部任せているわ」

「・・はあ、」

「あなたも精神科勤務が長ければわかると思うけど、病棟とか全部おまかせできるかしら。前借もしていることだし、きっちり働いてよね」

前借が「錦の御旗」となるらしい。完全に優位にたったと思いこんでいる鐘美に積子は「勝った」と思った。

病棟をひととおり見て回る。おおまかにわけて全部で４つの病棟がある。それぞれ看護師が１，２名詰めている。男性看護師が多い。どういうわけか薄汚れた白衣を着たものが多い。くわえ煙草をしたまま鐘美院長に会釈したりするのもいる。また大きなマスクをした「田中先生」を鐘美から紹介されるとろこつにじろじろ見たりする

のもいた。
積子は素知らぬ顔をしていたが内心大いに驚いていた。看護師の何人かに振戦を起こしているのがいる。手が勝手に震えたりしているのだ。白衣を着てはいても、どうみても患者ではないか。
ここでは「入院患者」に「入院患者」を「看護させている」のか？
プロの看護師はいないのか。かつまだ準夜勤の時刻でもないはずなのに、かなり少ない人数で看護しているのか・・？
疑問はふくらむ。やはりここはハイリスクの経営本位の病院だ。査察や監査が入らないのか？積子は疑問に感じた。
鐘美の顔を見たが鐘美は何も言わない。平気な顔をして匂いのきつい香水をぷんぷんさせて廊下を睥睨してかつ詰め所を見て「ここが軽症患者の病棟、３０名収容」、「ここは男性患者用、今いるのは２０名かな」と最低限の説明しかしない。
カルテも何も診ない。鐘美を認めて何人かの入院患者が詰所の窓越しにものいいたげにやってくるが一言も声をかけてやらなかった。
積子はもしここで勤務することになったらするべき仕事がさぞ山積みになるだろうと思った。１人では絶対に無理だ。
なんということだろう。治療は？心理療法は？行動療法は？ここでみんなは何をする？医療従事者の仕事は何をする？患者は何をする？
鐘美は一言だけ言った。
「慢性的で緩解も望めない患者をずっと収容しておくのは家族の希望でもある。患者も社会に出ていくことを望まないものも多い。私は彼らの希望にこたえてやっているの。姥捨て山みたいなものね。これでも大変よ」
積子は「そうですか・・」というのがやっとだった。
そしてそれが人手不足の言い訳になるのか？患者に患者を看護させる言い訳になるのか、と問いたかった。
鐘美は積子のターゲットになりうる人物だ。十分にその資格はある。積子は心の中で断定した。そして自分の前を歩いて行く鐘美の

太い首をじっと見つめる・・・。太い首、若く見せても首の年齢は裏切らない。しわのよった猪首。針は太い方が刺しやすいだろう。ゲージはいくらあたりがいいだろうか。ここは外科がないからそんなに針の種類はないかもしれないが・・・。

それともう1つ積子には確認しておくべきことがある・・・。前院長とその息子の副院長の存在確認だ。

最後に閉鎖病棟を見せてもらった。患者は男女別の部屋があるが、閉鎖病棟へ行くとさすがにいくつかの個室があった。積子はすばやく見取り図を見て「この部屋だけ名前が空白になっていますね。ほぼ満床で空きベッドもないように聞いていましたが・・」

鐘美は顔をしかめた。そしてそういった瞬間2名の男性看護師が目配せをした。積子は素知らぬ無邪気な顔できょろきょろと眺めている。

「田中先生、閉鎖病棟はもう何年もここに入院している人ばかりなの。社会に出せない発作のある疾患を持っている人が大半でね。ほとんど何もしなくてもいいわ。処方薬も全部同じものでいいから。何も新しいことをしなくても結構よ。治らないことは本人も知っているし、家族も退院されると困るって言う人がここに入れられますのでね、わかりますよね？」

鐘美はやけに饒舌だった。

「・・・やはり、ここなのか？」

積子は心中、確信しながら素知らぬ顔で新人らしくぎこちなくナースセンターを見回してきょろきょろしている。ここは電子カルテも入っていず、カルテはすべて手書きだ。

院長の部屋にはお金がすごくかかっていてもここは10年間ぐらい遅れているようだ。

体温計、圧力計、心電図モニター、すべて古臭く、買い替えなど

はここ最低でも１０年間はしていないに違いない。驚いたことに注射用具もガラス製で使い捨てではない。しかもあまり使っていないらしくほこりがうっすらと積もっているのをみてあきれると同時にぞっとした。・・・いくら精神科単科の病院でも機器類をケチってどうする？

積子はナースセンターで看護師がすわっている椅子も木製でしかもこわれかけていてビニールテープで補強しているのをあきれて見ていた。机ももちろん木製で心なしが歪んでいる。保管しているカルテ庫も木製で角の方がささくれていて、危ないな・へたすると怪我するぞ、とこれにもあきれていた。とにかく全部、貧乏くさいのだ。院長室の華美さとなんという違いだろう。

この鎮静鐘美院長は病院経営者でも医師でもなく、この病院から湧き出るお金を全部自分の趣味の家具調度品などに費やしているのか・・？

ちょうど夕食の時間らしく、患者が食堂に集まってご飯をたべていた。１人で食べているのもいるが、介助が必要な患者らしきものはひと塊りになって１列にならび、看護師が１人で順番にツバメのコのえさやりのごとくスプーンで口の中にご飯を押し込んでやった。もしくは軽症らしき患者も手伝わされているのか、パジャマ姿のままで慣れた手つきで介助してやる。

食堂なのに、部屋にはどういうわけか便臭や尿臭、異臭が漂い、とても衛生的とは言い難かった。花粉症といつわって大きなマスクをしているのに、におうのだ。せめて消臭剤でもまけばましなのに、積子は閉口したが鐘美も看護師も慣れているのか平気な顔をしている。

鐘美が看護師に呼びとめられて何か話をしているのをきっかけに見学するふりをして空白になっていた例の個室を素早く見に行った。

ドアには鍵がついているが、これは開いていた。小窓があり、様子が診れる。ベッドが２つあるのを確認し、２つとも男性が仰臥、

頭に包帯が巻かれているのを確認する。点滴などの医療処置はなし。
尿管あり、鼻注あり、2人とも上半身は裸で大人用のぶかぶかの紙パンツをはかされているのみ。シーツなし。年取った方には背面に大きな褥創（床ずれ）が見える。
積子は部屋の中にそっと入った。男性二人とも仰臥して目は開眼するも、こちらには目を向けない。死んだ目をしている。死んだ魚の目。自発呼吸あるも、手足の動きは全くなし。
2人とも依頼者が提出した鎮静里氏元院長並びに息子の鎮静竜彦とは似ても似つかない風貌だ。だが依頼者の指摘通り、2人が失踪ではなく、鐘美が院長の座欲しさに「失踪と見せかけて必要のない形成手術とロボトミーを施行し、生きながらの廃人としてこの病院に収容していたとしたら」
多分「目的地はここだろう」と積子は判断し、今晩中に再度様態を確認することにする。その上で鐘美を「処理」するのだ。
・・・ここでいうロボトミーはロベクトミーのことで戦前に開発された一種の精神科外科手術に当たる。前頭葉の一部を切除することで精神神経症状を緩和させる目的で施行されるが現在では廃止されている。理由は明確で副作用の大きさと人為的な脳への外科手術で人格が変化する人権的な面等からである。実際に事件もおき社会的な影響もあったと考えられている。
鐘美はそれをしたのだ。多分精神衛生学的には何ら障害もない、現役の精神科医でしかも自分の夫であった院長とその息子に。脳の手術を。自分の手で、夫とその息子を廃人にしたのだ。そして何食わぬ顔で病院の実権を握りその収益を全部自分の趣味につぎこんで贅沢な生活を謳歌する・・・。
・・病室にいるのは「多分」失踪したという鐘美院長の前の院長とその長男だ。名前は「鎮静里氏」長男が「鎮静竜彦」

依頼者が今多分この個室で入院している「鎮静竜彦」の嫁の「鎮静姫香」だ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

ターゲットはこの鎮静鐘美。彼女は夫である前院長とその後継ぎの長男を何らかの方法でここに押し込めて院長に就任した。ただ鎮静姫香は鐘美を前院長の妻とは認めてはいない。不正な手段で婚姻届を勝手に出したと彼女は主張している。

鎮静鐘美。それをしたその動機はもちろんこの鎮静病院の院長の座である。

かなり強引な手法で陰湿な手で座を奪い取ったので長男の嫁の恨みをかったわけだ。

それで積子の出番がきたのである。

積子は1年ほど前に依頼者にあったときの話をざっと回想し、事実であることを確認しかつ証拠がないので司直の手にはかからないことも了解し、その上で話にのったのだ。

第４話

依頼者・・・鎮静姫香に出会ったのはエージェントの紹介だったが姫香も実は医者だ。
初対面は東京の積子の診療所だ。
積子は３つの診療所を持っている。移動診療所だ。東京、大阪、博多、この３つをぐるぐる不定期に回っている。顧客が安定し新規開拓をしなくてもいいというのと、主に電話診療も可能な精神科がメインでやっているから体力的には楽なものだ。
一応ＥＲ（救急救命）や外科もひと通りの技術はあるが理由があって今はメスを持つのをやめている。積子もこういう非合法の仕事にかかわりがあるにはやはりきっかけがあるがそれはおいおいとわかると思う。
鎮静姫香は前・院長、鎮静里氏の一人っ子、竜彦の嫁にあたる。現院長の鐘美は里氏の後妻だった。なさぬ仲の竜彦は当然鐘美の実の息子ではない。この親子は数年前に親子共々失踪して行方不明だ。前院長鎮静里氏、後妻でかつ現院長の鐘美、一人っ子で次期院長になるであろう竜彦、その妻姫香。すべてが精神科医という顔ぶれだ。
そしてこの一家がこの鎮静病院をしきっていたが・・・。

姫香曰く、
「私の姑、義母は欲の深い人間です。自分の欲を満たすために私の義父に近づき、再婚したに違いありません。そして鎮静病院を奪取すべく義父と私達夫婦を排除しようと動きました。そもそもあの病院は義父のものではなく亡くなった義母、竜彦の生母の持ち物です。義母の曽祖父が明治の時代に救貧院として設立したのが鎮静会なのです・・・だから鐘美はまったく関係のない人なのです」

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」

積子は「殺し屋」を受け取っているというのを知った姫香から自分の姑かつ夫の継母であり、現院長の鐘美を始末してほしいと依頼があったのはちょうど1年前だった。

姫香言う。

「志神先生、鐘美は私の夫と、義父里氏を閉鎖病棟に幽閉しています。私はやっとのことで動かぬ証拠を見つけたのです。大金を投じて閉鎖病棟の看護師の一人を買収しました。そして法的制裁は加えない条件で必要性の全くないロボトミーの手術を下したことを確認しました。

・・・いいえ、警察には言っていません。言えば鐘美は最低限刑務所生きでしょうが、死刑にはならないでしょう、だってこれは殺人ではないから。

でも私から決して許せない所業です。病院を、義父を、そして私の夫を奪いました。警察などに引き渡したら最低限の衣食住の保証があって鐘美は生き延びてしまいます。それに私は耐えられません。

鐘美は医師らしからぬ極悪非道の女です。どうか義父や夫に与えたのと同等の苦痛もしくはそれ以上のものを与えてやってくださいませ！

彼女の動機はわかっています。鎮静病院を我がものにしたかったのです。なんてひどい。人間とも思えないこの所業。同じ医者としても許せない。失踪宣告を受けたとたん私をも鎮静姓から排除しようとしました。

・・彼女は、彼女だけは生かせておけません。いいえ、私は何度でも繰り返し申し上げます。

彼女には、これ以上ないほどの屈辱を思い切り味わせた上で生かさず殺さずの状態で私に引き渡してください。不可なれば思い切り苦しませてから殺してください。

金額は志神先生のおっしゃるとおりの額を即金で支払えます。どうか、請け負ってください。お願いします」

積子は最初はとりあわなかった。

姫香は積子よりもずっと若い２７歳だというがやはり精神科の医師らしく積子の思いを読み取ったのか最初から話だけでも聞いてください。話は１０分ほどで全部話せますから、と言ったのだ。

「うまいわね・・」と積子は思いつつ話を聞いたのだ。

鐘美がこの鎮静会鎮静病院を乗っ取った方法は、実に大したやり方だった。

鐘美が前院長鎮静里氏と出会ったのはもともと医学部の学生時代だったという。長い付き合いだがその間恋愛感情もあったのではないだろうか。だが結婚にはいたらず、里氏とその妻との結婚式でも夫側の学生時代からの友人として出席もしている。

２度目に会ったのが里氏の前の妻の葬儀だったという。

姫香言う。

「鐘美は結婚歴がなかったようです。そして義父との未練もあったようで何度か前の妻と三角関係のようになってトラブルになったと夫から聞いています。おそらく性的な関係もあったのでしょう。義母にガンが発見され入退院を繰り返すようになった頃、どういうわけか義父は鐘美を病院のスタッフに加えました。

この鎮静病院の立地の悪さから常勤医師の確保には苦労していましたが、鐘美はこのときに自ら働かせてほしいと行ったようです。

当時は私と夫の竜彦と結婚して2年でした。私も常勤医師として働いていたので鐘美を知っています。私は鐘美が鎮静病院に常勤として働いていることを、何気なく洩らした時の義母の狂態に驚きました。

義母に対して鐘美の話はタブーであることを私は全く知らなかったのです。義母はガン末期のベッドから起き上がり鐘美を絶対に私

の病院で働かせないでとあれほど頼んでいたのに、鐘美は病院を欲しがっている、私が死んだあと、夫と結婚するつもりだ。あれは私を死ぬのを待って病院と夫を狙ってやってきた・・それはひどい状態でした。

そして義母の臨終の際・・。家族だけで看取るつもりで緩和ケアの病床に揃っていたのに、どういうわけか鐘美はその場にいたのです。

義父は呼んでいないのに帰れ、勤務に戻れと当然言いました。鐘美はうすら笑いを浮かべて寝ている義母に今から帰りますとも、とささやきました。・・続いて・・、そして、信じられないことに病人に向かって、どうか安心してください、里氏さんも病院も私がいるし大丈夫ですから・・、この一言だけを言うとさっさと病室を出ました。

義母はベッドの中にいて呼吸も荒かったのですが鐘美のあんまりな言葉にぐわっと目を開けました。

「あなた・・私が死んだあとあの女と結婚するの？」

虫の息の状態で彼女はささやきました。里氏は首を振りました。

「いや・・、家に入れない。もう関係もしていない。だから君が心配することは誓ってなにもない」

「そうよ、あなた」

義母の目から涙が出ました。

「そうよ、あなた。あれはもともと私の曽祖父、祖父、父、そして私の病院です。あなたは婿になったのだから。そして後継ぎはこの子、竜彦です。姫香という嫁もいます。いずれは子供を産んでくれるでしょう。もし私の死後鐘美を家庭や病院に入れたら絶対に許さない・・・」

こういうことを切れ切れに言うわけです。義父はうんうんとうなづきました。そして義母は恨みのこもった顔で亡くなりました・・・」

当時からどういうわけか病院には常勤医師がいつかず、いつも鐘美がいました。彼女が何らかの意思をもって常勤医師がいつかないように、かつ追い詰めやめるように圧迫していたことは間違いありません。　葬式でバタバタしている間は仕方なく鐘美を病院で雇い続けていました。もちろん落ち着いたら解雇するつもりでしたし、本人にもその旨申しつけていたはずです。

義母の４９日。義父里氏、夫、竜彦。弁護士に依頼して財産目録を作成しました。ところが・・。

その日一族が集まるという日、鐘美がどうしてその日を知っていたのはは不明です。義父の携帯メールでも盗み見たのではないかとは思いますが。ええ、どうせその程度の女なんです、あいつは。

病棟にいた鐘美から電話があり、患者が患者を殺したというものでした。警察に知らせる前に院長とその息子に直に電話したといっていました。義父と夫はもちろん他の人には内密に、また事情を把握するまで警察に言うなといいおいて病棟に出かけました。私はその2日前に偶然ですが妊娠が判明したので万一のことがあってはいけないというので家で待機するように言いつけられ、その通りにしていました。

・・・そして二人はそれきり帰ってきませんでした。

第5話

患者が患者を刺したというのは今となっては事実かどうかは判明しません。ただ電話連絡を受けたときもしこの事件が警察沙汰になってしまっては、やはり病院が患者をきちんと診れなかったという管理責任が問われます。事情を親戚に話し財産と形見分けは後日にしてもらい、義父と夫はあわてて病棟に出かけました。

2人は夜になっても帰宅しません。私は病棟にいるはずの義父や夫に電話しました。鐘美が出てきて「患者は大した怪我ではありませんでした。2人は大事な話があるとすぐ帰宅されたはずですが」と言います。

携帯電話にも出ません。私は車で5分ほどの病院の病棟に上がりました。鐘美が1人で病棟にいました。私は鐘美を医局の控室に呼びだし2人きりで話しました。どうしてあの時すぐに警察を呼ばなかったのか今でも後悔しています。

「警察は？」

「結局、入院患者同士のいさかいは鎮静病院の管理ミスになるし、病院の名前に傷がつくということで公表はしないことになりました」

「2人が帰ったのは何時頃なの？」

「5時ぐらいでしょうか・・・」

「鐘美先生、2人とも携帯電話がつながらないの、何かあったのかしら」

「さあ・・、私も事後処理で忙しかったし、今日は当直だから外出もしていないから知りません」

鐘美はその時私ににっこり微笑みました。

「本当に心配ねえ・・・でもすぐに帰宅されると思いますけどね～。一晩だけでも待ってみれば？」

「はあ・・じゃあ一晩待ってみましょうか・・警察に話しておおげさになってもいけないしね」

「そうしなさいよ、ね・・・。ところで話しは変わるけど、姫香先生、院長からつい昨日聞きました。妊娠なさったとか・・・。院長がうれしそうに私にも孫ができたよって・・、本当におめでとうございます」

鐘美は私にお茶を出してくれました。

「葬儀もあったしいろいろとお忙しいでしょう。妊娠初期が一番大事なのだから、本当に身体に気を付けてくださいね」

そういって丁寧に心のこもった動作でお茶を出してくれました。・・確かに私は疲れていました。そして「疑いもせず」そのお茶を飲んでしまいました。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」

鎮静姫香はこのときだけ涙をこぼした。悔し涙である。結論から言うとその時すでに2人は鐘美の手で形成術と不必要なロボトミーの手術を受けて閉鎖病棟の1室に閉じ込められ強制的に眠らされていた。

一方姫香がうっかり飲んだその茶は5時間後に腹痛を起こし、彼女は流産した・・・。

「子宮収縮薬のPGでも入っていたのではないかと思います。それはもう苦しい痛みでした。私は家で倒れそのまま救急病院で子宮の手術を受け2週間入院しました。

この大事な2週間を私はふいにしてしまいました・・・。この間鐘美は義父里氏院長の婚姻届を提出し事実上病院の実権を握りました。彼女は用意周到にこの機会を狙っていたのです。

いいえ、積子先生、完全犯罪ではありません。何か穴があるはずです。

でも私は病棟へ1人では怖くて上がれません。また事件があり病院が落ち着くまで中に入らないようにと看護師たちが入れてくれないのです。

こういうことが・・・こんなことが、まかりとおるなんて！

ええ、あの時は警察にも行きました。取り調べもあったようです。ああ、私の赤ちゃんは証拠がないので警察には被害届も受理されませんでした。事件性はないと・・。でも彼女が私の赤ちゃんを殺したのは間違いありません。絶対許せません。

私は大層苦しみました。実家に身をよせていろいろと考えました。でも、でも・・。

姫香は顔をぐしゃぐしゃにしたが泣いたりはしなかった。理性がある分、感情にはとらわれないがその分、怨念がこもっている。

積子は同情をもって姫香の話を聞いた。鐘美がしたのは鎮静病院前院長とその息子の竜彦氏。後継ぎになるはずだった竜彦と姫香のお腹の中の子供の障害並びに殺害。不正な手段で病院を乗っ取った。

積子は、それでは・・・、と。

「請け負った」

鐘美を依頼通りに処理するのは1年。それが今日だ。

第6話

「ちょっと、田中先生、何しているの？そこは重症患者が寝ているだけよ」
　積子は振り返った。鐘美が戸口で仁王立ちになっている。気分を害したのだろうか？ま、今夜限りのつきあいだから何をどう思われようが平気だが。積子は鼻水をすすりつつ頭をひょこっと下げる。
「すみません、何か音がしたような気がして、部屋に入りました。ほんと私が入室しても2人とも反応しませんね～どういった患者さんかしら？」
「過剰薬物反応による昏睡（コーマ）よ。もう元には戻らないから、ま、廃人ね。薬もないからほっておいていいから」
　鐘美はやや乱暴に田中アキなる積子の腕をとり、廊下に出した。
「お気を悪くされたらすみません」
「いえ、いいのよ。カルテもちゃんとあるから診ても結構よ」
　「ところでトイレをお借りしたいのですが・・・ずずずっ」
「ああ、患者用でもよかったら、つきあたりいって。職員用トイレは1階と2階にしかないから」
「患者用でも十分ですよ、ずずっ」
「・・・鼻水がおひどいようね、患者になめられないようにしてよね」
「はい・・・ずずっ」
　積子なる「田中先生」は悪臭漂う患者用トイレに立つ。男女兼用だった。患者がなぜか2，3人たむろしていたが私服姿の「先生」らしき姿を見るとあわててトイレから出て行った。マスクをしていても煙草と糞尿のにおいがしていた。小さいがトイレの小窓から見える景色はもう真っ暗だ。
　頃あいよし、と見て、一番奥のトイレに入る。
　用を足しながら携帯電話を取り出し虹子にメールを打つ。

「ＯＫ。身元不明の老婆」
メールの内容はこれだけだがこれで十分。
「田中先生」はトイレの個室から出るとひび割れた鏡で前髪を後ろに撫でつけ、マスクの中でくぐもった小さな声で「・・・仕事開始、完了は２時間後、かな」とつぶやいた。
あとは３０分後に、虹子の到着を待つだけだ。

詰め所に戻るとまだ鐘美がいる。看護師と何やら話しをしている。積子は丁寧に会釈する。
「あのう～すみません、それではもう少し病棟を見学させてください」
「どこを見られても結構よ、あ、白衣を用意させたからその服の上から羽織って。筆記用具とかはそこらへんのものを使っていいわ。それとわかってると思うけど、うちは人材不足でね、当直の看護師も本当に少ないので、夜中に起きだしたり面倒を起こしそうな患者は全員多めの睡眠薬を飲ませて寝かせておくの。
そこらへんわかってるわね？死なない程度ならいくらでも安定剤を注射してもＯＫだから。じゃあ、私もうそろそろ」
「あら、院長先生、どちらへ・・？」
「えっと、まあ、私もいろいろと忙しいからね」
すると隣にいた男性看護師が下卑た声で「・・ホストクラブに忙しいんじゃろ、よかよか」と茶化した。
鐘美はくるりと振り返るとドスのきいた低い声で「お黙り、ちゃんと仕事しなさいよ」と言った。看護師はあわててカルテを棚にしまい、病棟の廊下にひっこんだ。
折よく詰め所を出ようとする鐘美の白衣のポケットから携帯電話の呼び出し音が鳴った。鐘美は乱暴にポケットに手をつっこみ電話を取り出す。同時に積子の目がきらっと光った。
鐘美は、「やーね。当直事務からよ」と舌打ちして、電話を取った。積子は耳をダンボにして電話の会話に耳をすませた。

「ハイ、ハイ・・。じゃそのご家族は私を知っているのね？診てもらったことがあるというのね？じゃあ・・・仕方ないわねー、１階に下りて診察するから灯りをつけておいて！」
「院長先生、どうされたのですか？」
「急患だって。以前ここで私に診てもらったそうで、私じゃないとイヤだっていうそうよ。面倒だけどちょっと診てから、仕事を上がらせてもらうわ」
「あの～、私も一緒でもいいでしょうか？何分、外来もここでは初めての夜ですし」
「めったに夜の診察はうけてないのですけどね、どうでも診てほしいというから仕方ないわね。適当に安定剤でも処方しておけば何とかなるからね。まあ、田中先生は初めてでもあるし、じゃあ、ご一緒に」

（やった・・・）
積子はほくそ笑みながら一緒に１階の外来に下りた。廊下ももう非常灯しかついてなくて真っ暗だ。
玄関近くになって灯りがまぶしいくらいになった。誰かが立っている。病院に一番最初に会った受付兼警備員である。それと待ちあいに座りこんでいるのが２人。
１人は男性・・・李だ！飛行場で会った李だった。
積子はマスクの下の唇をぎゅっとひきしめた。
李も大きなマスクをしている。そして隣にいるのは全身毛布でぐるぐるまきにした人間が１人。男性か女性かは外見では不明だが中身は虹子だ。ぐったりとしてぴくりとも動かない。
受付の男性は４０代だろうか、こういうことには慣れているらしく鐘美の姿を認めると会釈して「診察希望者です。オオタカヤコと名乗っておられますが、診察記録が見当たらないです」
どうしますか？というように首をかしげた。鐘美は横柄な様子でつきそいの李に話しかけた。

「この人、動いてないけど・・」
李は言った。「先生、これはぼくの母です。ぼくの車で来たのですが直前に失神したんです。でも毛布をとけばまた暴れるかもしれないし・・診てください。お願いします、お願いします、」
鐘美にむかって彼はぺこぺこ頭を下げた。母親を思う必死な様子に鐘美も心を動かせたようだ。
（意外と演技できるのね・・この子・・）
鐘美も受け付けも信じ込んでいる。鐘美は横柄にあごっとくいっとしゃくった。
「じゃあ、診察室に運んで。私が診るから」
警備員は一番手前の部屋に入り電気をつけた。そして毛布の中の人間を運ぶのを手伝おうとすると李はそれをさえぎり、自分でひょいとかついで軽々と部屋の中に入れた。その時に尋常でない腕の筋肉が盛り上がり、彼も極道の一員であり絵図のボディーガードであったことを積子はいやおうなく思い出した。
（見かけと違って力持ちだな・・）
鐘美は李の横顔と腕の筋肉に見とれている。毛布の塊になっている患者には一瞥もくれない。問診もしようとしない。白衣を着ていなかったらただの成金の老婆が若い男に見とれている図だ。積子はもはや鐘美を軽蔑している。

（・・・あんたは医師ではない、精神疾患の患者を金もうけの道具としかみていないあんたは、また院長と副院長を陥れ、その後継ぎになれるであろう胎児をも殺したあんたには助命の余地もない・・・）

ターゲットは自分の軽蔑に値する人間か・・・それを見極めるのが積子の殺しの儀式だ。鐘美はそれに合格した・・・。

「・・・じゃ、私はこれで。病棟に上がっています」

受付兼警備が言った。鐘美は外来のドアを閉めながら
「そう？私はこの診察がすんだら帰るから。あとはこの田中先生にまかせているわ。今晩から早速当直してもらうから」
「わかりました」
この場から1人でも人間が減るのはありがたい。殺人はちまちまするより、おおまかに、が積子の鉄則だ。積子も鐘美に続いて診察室に入り、鐘美がベッドにおろされた毛布の中身を見ようとしたその時。積子は小さなバッグの中に隠し持っていた注射器に針をすばやくセットして鐘美の首筋にワンショットで注射する。
鐘美はものも言わずにくずれおちた。
同時に積子は毛布の塊に手で5回たたく。それを合図に塊がほどけて白衣姿の虹子が出てきた。
ずいぶんと窮屈だったらしく虹子は大きく背伸びした。虹子の髪は乱れてはいたが、顔は若さとこれからの期待に輝いている。
さあ、仕事開始だ。病院内の見取り図がすでに頭に入っている積子は「じゃあ、処置室に。ここは防犯をけちっているからね、防犯ビデオとかはまったくないから多少のことは大丈夫よ」
鐘美の白衣を脱がして白衣ののポケットをまさぐって、車のキーを取りだす。キーには跳ね馬のロゴマークがある。事前の調べ通り彼女はフェラーリをもっている。これに乗って鐘美は、ほぼ毎晩仕事が上がるとホストクラブに豪遊していたのだ。
院長と副院長を廃人にしたのは若い男性達と遊ぶためか、病院を自分だけの所有物にし私利私欲のみに使う道具と見下す彼女の性格に断罪を下す。
下したのは彼女にとってもふさわしい「しにがみつみこ」
積子は李の方に振り返った。
「李、これから私の言うことをよく聞いて。まず4階のつきあたりにある院長の部屋の机には私の履歴書と医師免許証がある、名義は田中あきになっている。これを取ってくる。
次にこのキーで、フェラーリを探して山を下りて。そしてその車

を処分して。彼女はもう二度と運転もできないし、歩けなくなるから。そして2時間後に私達も車で下りる。携帯を持っていて。連絡後に動いて」

李は快諾してキーをもって廊下に出て階段を探した。フェラーリは目立つ。やすやすと見つけられるはずだ。それから玄関を出る。すでに照明が落とされ真っ暗だ。李は夜目がきくので楽々と目的のものをさがした。

積子と虹子は外来の移動ベッドに鐘美をのせ処置室に移動させた。そして部屋の目的通りに「処置」をはじめた。

第7話

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」

　鎮静鐘美は身体全体の違和感を覚えて目を覚ました。
「・・・私はどうしたのだろうか？なぜか寒い。ここはどこだろうか・・。全身が痛い。ぴりぴりする。・・私はどうしたのだろうか？・・・私はどうしたのだろうか・・・」
　鐘美は声を出そうとしたが、全く声が出ないので愕然とした。
（私はどうかしたのだろうか・・・、私はどうかしたのだろうか・・・・）
　起き上がろうとしたが肩関節と股関節に尋常ではない疼痛がでて、全く起き上がることができない。また力もでない。
（何かの事故か？何かの発作か・・・？あ、誰か・・・誰か・・・）
　関節の痛みのほかに身体全体と顔全体がなにかピリピリするので悲鳴をあげようとしたが、本当に全く声がでないのだ。
　思わずパニックになりかけたが、身体が動かせない。指すらも動かずただ呼吸をするだけだった。その呼吸すらも空気が鼻や口から入ってこないのに気付いて、やっと自分が容易ならざる事態に落ち込んだことに気がついた。
「・・・気がついたのね・・・？」
　誰かが自分の顔を覗き込んだ。ただでさえ薄暗い照明がその誰かが顔でふさがれもっと暗くなった。その誰かの顔も良く見えない。ぴりぴりする痛みが目を開閉するたびに引き起こされる。まぶたがひきつれて目がよく動かせない。でもその声は・・・マスクをしているその声は
「・・田中先生・・・？」
　声が出ない、身体が動かせない分、鐘美は目を一生懸命に開けて、一生懸命視線でこの非常事態を訴えようとした。田中先生は大きな

マスクをしたまま目をほそめた。・・・彼女の目は嗤っていた。
「おほほほ、鐘美先生、私、実は田中あき、という名前じゃないんです。ウソをついたりしてごめんなさいね」
「・・・・・」
鐘美は混乱して田中のいうことがよくわからない。
「私はどうなったの？私の体はどうなっているの・・・」
声が出せない分、鐘美は瞬きする都度、まぶたがひきつれる激痛に耐えながら視線で訴える。足元にもう一人誰かがいるのはわかった。白衣姿？見たことのない女、看護師か？歪んでみえるのでよくわからない。でも自分の身体にさわって自分に何か処置をしている。
・・・足元にいる女は私に、何かの治療をしてくれているのか・・・？
彼女は鐘美の足元にいて脚に何かを塗っているようだ。しかし起き上がれないのでそれが何をしているのか、行動がよくわからない。ただ脚にずー、ずーと塗るたびにぴりぴりする痛みが脳を刺激する。
自分ののど元に何かはさまっているようだ。
「・・意識がはっきりと戻ったようなので、ご説明させていただきますね。貴女はここでは身体が自由に動きません。また自発呼吸もできない状態に陥っています。
鐘美先生、あなたはもう一生しゃべれないでしょう。だって今気管切開して声帯に細工させていただきましたの。それと・・人工呼吸器もね、入れましたし。
手足は関節に細工させていただいたのでもう動かせないと思いますよ。皮膚も外側の部分は赤むけですね。皮膚腐食剤を塗布中です。外皮の方はもうだいぶ皮がむけてしまっていますのでね、・・・痛いでしょ？
髪の方もお邪魔かと思って丸坊主なんですがね、でももう美容院とか行く必要もないし、もういいでしょ？
あ、大丈夫よ、外部の人があなたを見かけても、あなただとはわからないから恥ずかしい思いをしなくていいし。病棟の人たちにも

自殺未遂の患者といっておくし」

鐘美は言葉もでない、思考も混乱してしまっている。この人は、この人たちは自分に治療をしているのではないのだ・・。この人は、この人たちは、一体に自分をどうしようとするのか？

「・・・鐘美先生、あなたは人の恨みをかったのです。私は依頼を受けましてね、このたびは殺人ではなく、生かさず殺さずの状態で引き渡してくれ、そう頼まれましたね」

鐘美は悲鳴をあげたかった。しかしながら声がでない。そして全身をさいなむこの激痛・・・。気が狂いそうだ。

「ああ、そろそろ麻酔が切れてきたころかなあ・・・、この痛みには早く慣れることね、さもなければさっさと気を狂わすことね」

鐘美は確かに気が狂いそうだった。足元にいる女が長いピンセットを持っている。ピンセットの先には綿花がついている。ずーっ、ずーっ・・・。この音は私の皮膚を溶かすべく綿花に薬品をなすりつけている音なのだ。そして私の声を、声帯を奪った。

確かに人生最大の絶体絶命の危機だ。鐘美は首を振ろうとしたが首も動かせない。足元にいた女が顔の方に来た。顔は薄暗くて見えないが、看護師の姿だ。助けてくれ・・・助けてください・・・助けて！！

（・・・助けて、・・助けてっ！）

鐘美は声を出そうにも出せない。気管から漏れ出てくる空気の音がしゅうしゅういうだけだった。

看護師が綿花を自分のまぶたにもう一度なすりつけた。手をふってさえぎろうにも、首をふって避けようにも避けられない。右の眼球に直接なすりつけられ、そのしみるような目が押しつぶされそうな激痛に鐘美は悲鳴をあげた。いや、悲鳴もあげられなかった。まさに地獄だった。

「さ、もう時間もないし、人体改造もこのくらいでいいかな？じゃあ、鐘美先生、病棟へ行きましょうか？あ、そうそう、虹子ちゃん、そこに鏡ないかなあ、鐘美先生に自分の顔を見せてあげて」
照明に光をうけて何か光るものが顔の前に出された。鐘美は左目だけがかろうじて開けられたがよく見えない。田中先生が、いや、自分をこんな目にあわせた女が開けられない右目をもぐいっとひいた。
鏡にうつっているのはまるで化け物だ。見慣れた自分の顔ではなかった。
髪がない、顔の皮膚もない・・・頬部分は陥没して脂肪組織どころか筋肉まで見えている。まぶたもほとんど溶けている。これでは誰も鎮静鐘美がここにいるとはわからないだろう。
虹子ちゃんと呼ばれた看護師がずいっと鏡を斜め下に向けた。首になにかささっている。呼吸器のチューブだ。肩から下は見えないが全部肌が赤むけになっていた。
「・・・私の人体改造はいかがですか？ちょっとアンチエイジングではなく、正反対のことをしてみましたのよ。短時間で別人間に改造するにはこういう方法しかなくってねえ、手が込んでいなくてすみませんねえ・・・ほほほ・・。
おほほほ、ほほほほ・・・。
でも貴女の心は人間の心ではないのでね、欲望むき出しで好きなことを今までしていらしたのだし、人の恨みをいっぱいに買ったのだし、それがその報いと思ってこれからの人生を生きていってくださいねえ。
大丈夫、殺しはしませんのでね。生かしている状態で引き渡すことになっています。引き渡し場所もどうかご心配なく。貴女が不正な手段で入手したまさにこの鎮静病院ですし。そう、鎮静病院の閉鎖病棟ですの。
ね、安心でしょ。
だって正規の看護師ではなく、患者に看護をさせる方が安心なさ

る経営方式ですもの。だからあなたも患者に看護してもらいましょうね。尿管もちゃんと入れてますし、紙おむつをしておきましたので大便を出しても大丈夫。
　あなたが失踪したらあとはあなたの義理の息子、ご長男の嫁の鎮静姫香さんしか相続権を持つものがいません。大丈夫、私もあの方と直接お話ししましたからね、あの方なら、あなたよりもずっとお若いかもしれませんが、正当な相続者になりますし、あの方ならばあなたのように、この病院を私物化せずちゃんと病院としての機能ももたせられるでしょう。
　本来あるべき病院に戻させることもできるでしょう。
　さあ、鐘美先生・・・閉鎖病棟へ行きましょうね。あなたはさきほど急患でいらした老婆です。自殺をはかられて鐘美院長と今日来たばかりの田中あき先生が２人がかりで、やっと救命できたというところ。
　鐘美先生はさっさとホストクラブに行ったし、今日面接にきたばかりなのに、いろいろとまかせられて嫌気がさした田中先生はこんな病院に勤務したくないと今宵限りの勤務で逃げ出す・・。
　明日になったら鐘美院長と連絡が取れず病院は騒ぐでしょ。警察にも届けられるでしょ？でも事件性はないから捜索もできないはず。
　誰も鐘美院長が別人の姿にされて閉鎖病棟に入れられた老婆になったとは思わない・・・」

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

　地獄だった・・・。移動ベッドに乗せられがらがらと音をたてて(音がたてられるたびに身体が痛む、なのに悲鳴もあげられない、身体も動かない・・・）長い長い廊下に運ばれ、薄暗いエレベーターに乗せられる。
　親しんだ私のコレクションがあるうるわしい私のお部屋にはもう

行けない。
汚らしい汚物だらけの不衛生な閉鎖病棟の一室に入院させられるのだ。
私はもう声も出せないし、皮膚もない。誰も私が鎮静鐘美院長とわからないように細工された・・・。
究極の、最悪の老化(エイジング)、最悪の人体改造、人体改悪・・・・・
私はもう元には戻れないのか・・・・

「あらまた失神したわ・・・だめねえ、もう少しはりあってこっちを罵倒でもしてくれなきゃ、やりがいがないわねえ」
虹子がせせら笑った。虹子はすでに白衣を脱いでいる。
積子は時計を見て、「さっさと片付けましょう。正門前に車を止めたままよね。待機していてちょうだい」
虹子の姿が消える。積子は例の大きなマスクをつけたまま堂々と満床の閉鎖病棟へ行き、ただ一人当直をしていた軽症患者兼看護師に簡易ベッドを持ってこさせ、鎮静元院長とその息子と同じ部屋に入れた。
男性看護師はとまどったように「あの、先生・・・これも院長の指示ですか？この人女性ですよね？なのに男性の部屋に・・・・」
積子がじっとその看護師を見ると看護師は目をそらした。
「尿管をいれているし、意識がはっきりしないので手間のかかる病室にひとまとめにしておいてくれって鐘美先生が言ったの～」
積子はしれっとそう返答すると、鐘美院長の普段からの横柄さに納得している看護師は何も言わなかった。積子は鐘美のために栄養剤と感染症予防の薬剤を点滴してあげた。多目に注射の指示箋(しじせん)を出してやる。カルテも新しく架空名義で作成してやった。・・これで当分大丈夫。
積子はあとは明日の朝鐘美院長が出勤したら指示をきくようにと言い残して病棟を堂々と立ち去った。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」

その後落ち着いた場所で鎮静姫香に携帯電話を使用して依頼任務完了の旨を報告、ついでに自分から絶対に動かないことを注意する。
「相続権のある人は貴女だけのようですしね、果報は寝て待てを実践なさってね。くれぐれも自分で勝手に病棟へ行かないこと。また鐘美をしばらくそのままにしておくように。身元不明のはずの老婆がもし鐘美だとわかれば、どうなるか。それをするとすぐに貴女に嫌疑がかかるわよ」
姫香ははずんだ声で「了解しました、お疲れさまでした」と返答。
携帯電話を切ると積子は反対方向に折りたたんで処分した。
そして虹子と無事を確認しあい、虹子先に帰宅。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

それから積子は李を伴って東京の診療所に帰宅した。李は言った。
「志神先生、ぼく、もう少し付き添わせてもらっていいですか」
「・・・・・現場見せなかったからご不満なの？」
「いえ・・・、また違った世界を見れて、インパクトがあったので」
「そんなの、理由にならないわ。それも絵図さんのご指示なの？極道はお金をかせぐことをシノギというそうだけど、それ、いつでも見学ＯＫなの？」
積子は九州からずっと大きなマスクをつけたままだったがぱっとはずして李をにらみつけた。李は伏し目がちにしてかつ遠慮がちだ。まるで怒れる女教師と赤点を取ってしまった生徒の図ではないか？
「・・・実はぼくはもう少し違った世界に身を置きたいと思っていました。できたら今後も付き添いというか手伝わせて欲しいです」
「そんな甘ったれた要求がとおると思っているの？私と一緒に仕事

をしたかったら最低限医師免許を持っていらっしゃい！」
「・・・ぼく高校も出ていないです。特技は空手とテコンドーだけ。これだけは他人に負けないです」
「あら、そう？中卒だけじゃ全然話しにならないわ。じゃあ大検から受けて医学部を受験することね。それと絵図さんとのこともあるでしょう。ちゃんと計画性をもってから他人に言うことね。私はあなたを勧誘したりしたと思われたら非常に困る、困るわよ」
李ははっとしたように顔をあげた。顔が紅潮している。
「・・志神先生のおっしゃるとおりでした・・・。すみませんでした」

李は悄然として一礼し積子のもとを去った。
だが、李は再び後日積子の前に出ることになる・・・。
・・・「鎮静病院」の項、これにて完結。

第1話

通称しにがみつみこ、こと志神積子（しじんせきこ）にはあるジンクスがある。物事にはすべて意味があり、シンクロニシティというものが働くとそれはもう動かざるをえない、せざるをえないということだ。シンクロニシティ、精神医学では共時性という。単なる偶然の一致ではすまされないことが生きていくうえで往々にしておこる。今回の仕事にもそれがあった。

最初は東京の診療所にいたときのある日、好自党（こうじ）の大物代議士・好自時緒（こうじときお）氏からの1本の電話がその始まりだった。もちろん内密の話だ。彼とはすでに何度かの面識も有、声も覚えている。積子は電話に出てどういうことか聞いた。

「志神先生、この電話は盗聴防止を施されていますね？まずそれを確認したい」

「一応は定期的に点検はしています。ただし。ここはただの診療所ですし、たいした設備はありませんよ」

心療内科と精神科の看板を挙げていなくとも、医師である限り、患者の守秘義務は当然のことだ。しかも相手が大物代議士の家族ならばなおさらだろう。しかし相手がだれであれ、特別扱いはしない、というのが積子のスタンスだ。

この電話からはいつもの元気な陽気さは全く感じられなかった。好自代議士は沈んだ声で要点だけの会話を続けた。

「私には時間がない。すぐに本題に入ろう。志神先生は、ヒイロ・ヨカナン教というカルト宗教の名前をご存じか？」

「いいえ・・・寡聞ながら存じません」

「実はそいつに私の娘が狙われまして、そして・・４日前に死んだのです。昨日家族葬をすませました。もちろん表向きは心筋梗塞で

急死ということにはしてあるが・・・、まだ２４歳だった。
娘の名前は好自満（こうじみつる）と申しました。私の大事な一人娘で、人生これから、という時に亡くなったのです。彼女を死にいたらしめたヒイロ・ヨカナン教とやらの教祖を消していただきたい」
「娘さんを亡くされて本当にお気の毒です。ご冥福を祈ります。が、このご依頼の件、・・・即時に返答を求められるならば、残念ながらノー、と言わせてください」
「うむ・・、このカルトはまだほとんどマスコミには知られていない。この宗教は良家の子女しか狙わない。娘は狙われると確実に信仰、出家するらしいのだ。相当うさんくさいし、事実死人も出ている。だが家柄や世間体の体面を重んじる娘の家族は表ざたにはしないのだ。被害者は私の娘だけはない。私の話を聞く余裕は今、先生にはあるか」
「いえ、残念ながら・・・警察に相談された方がよいかと思われます」
話しが込み入ってきそうになったので積子は断った。好自時緒氏にはいろいろなうわさがある。政治的なものに絡んで家族が狙われることも十分ありうる話だ。健康上や、精神衛生上の相談には快く乗れるが、こういう話には正直かかわりたくはなかった。
断っても好自氏なら他の手段は知っているだろう。この話はこれで終わったつもりだった。

好自氏との会話はそれだけだった。電話を切ると積子は今は患者がいないのを見澄ましてパソコンに向かい、ヒイロ・ヨカナン教という宗教を検索してみたがヒット数はゼロだったので首をかしげた。
「マスコミにはまだ知られていないというのは本当のようね。しかし狙われた娘は必ず入信して出家するとはまたすごい宗教だな・・」
積子は部屋の隅にある小さなキッチンでポットにカモミールティーを入れて葉を蒸らした。紅茶にはこだわりがあって、こうしてゆっくりと蒸らすとティーバックでも本当においしくなる。

ウェッジウッドのワイルドベリーの定番のカップにティーを入れてすすろうとしたその時・・。

インターホンが鳴る。楽しいお茶の時間は４分の１の確率で仕事が入る。商売繁盛とはこういうことかもしれないが、積子はちょっぴり残念になる。だけど基本的に仕事は好き、精神科医としての仕事は天職だと思っているので気分を切り替えて、さあ、誰だろうとセキュリティ画面を見る。

だが画面に映っていたのは患者ではなかった。先日に出会ったばかりの李が映っている。積子は顔をしかめた。

彼の真意がわからなかったからだ。彼の家はあの大阪の絵図の事務所か、もしくはそれに近いところだろう。東京の積子の診療所まで一体、何をしにきたのだろうか。

入れてやるべきか、追い返すべきか、積子は一瞬迷った。しかし李は「会ってぼくの話しを聞いてほしい」とだけ訴える。画面で見る限り、先日出会ったように大学生に見えるごく普通の服装だ。カジュアルな単色のシャツ。下の服装は画面ではわからないがこれもジーンズか何かだろう。だが彼の視線に何か追い詰めたものがあるのを見て少しだけという約束で入れてやった。

李は積子に丁寧に挨拶した。診療所や調度品などきょろきょろ見回したり、下品な態度はとらない。丁寧な動作に積子はやや安堵したが彼のバックには広域指定暴力団幹部の絵図が控えているのでもちろん油断はしなかった。

「志神先生、先日言ったことは本気です」

「医者になって、私の手伝いをする・・・？」

「そうです。今、ぼくのいる世界とはまた違った世界に身を置くことです」

「単なる変身願望なら迷惑です。それに絵図さんは何と？ああいう組織は親と目される相手の命令にはそむけないとは聞くが、絵図さ

んは貴方の親ではないのか？」
「杯はいただいていないのです。ですから厳密には親ではありません。それに彼にはきちんとぼくの考えを伝えました」
「それで？」
「ぼくは中卒です。医師になるには、まず高校卒業の資格がないと大学受験すらできません。高卒の資格と同等の大学卒業検定、つまり大検から受けないと話しが進まないのは先生のおっしゃったとおりなんですが、もう１つ重大なことがわかりました」
　積子はなんとなく興味をそそられ、先をうながした。この青年は中卒とはいうが、話し方に無駄がなくまたどことなく上品だった。
（彼はどういった育ちなのだろうか・・？）李は続けた。
「つい昨日知ったことです。実はぼくには戸籍がありませんでした。戸籍がないまま大きくなったのです。ぼくには両親はないが、ぼくは施設育ちでもありません。その結果、現時点では大検も受けられません」
「どういう経緯か知らないけれど、それなら今からでも戸籍を取ればいいだけの話しではないの。私には関係のない話だわ」
　そういいながら積子は李の顔を見守っている。李は積子にどうしてほしい、とか言うことではなくただ相談しにきたのだとはわかる。しかも彼はバカではない。
　まわりに相談にのってやれる大人はいないのだろうか。それで私の元にやってきたのだろうか。戸籍がないままでどうやって小学校や中学校に行けたのかは知らない。小学校、中学校は義務教育のはずだ。
　それから今までの育ての親というのが彼にもいるはずだ。李という名字からして在日の韓国人と所縁（ゆかり）があるとは思われるが、こういうのは育ての親のやること、もしくは行政側のすることではないか。
　積子は李にお茶も入れてやらなかった。そして彼がどういうふうに話しを終えるかじっと待った。持久戦でだんまりを決め込むか、それとも積子に同情を買おうと泣き落しをかけるか、なんとかして

くれと怒りだすか？
彼がどういう性格の人間か、バカかりこうかそれでわかる。ただどうこうしてやろうという気には全くならなかった。積子はそこまでお人よしの親切な人ではない。またそんな時間に余裕が取れる人間でもない。

そこへまた来客を告げるインターホンが鳴った。以前診た覚えのある患者、いやその母親が画面に映っている。予約はない。患者の名字は京極だ。これはすぐ思い出せたが確かこの人の娘を診たはず。だが娘の名前がとっさに思い返せない。
予約なしでいきなり積子の面談を望む元患者の母親はせっぱつまった様子だった。
「娘のことで相談がある。どうか会ってください。今から私の話しを聞いてください」と言う。
積子は承知した。なぜならば、その人の名字は忘れるはずがない。この東京の積子の診療所が入っているビルの所有者の妻、京極仁井（きょうごくにい）だからだ。
いつもは人気がない積子の診療所なのに、今、立て続けに好自時緒からの電話、李の来訪と自身の状況説明、それと元患者の母親兼ここの大家のの京極仁井だ。用事がいくつも重なるのはよくあることだ。
積子は李に向かい「患者が来たから即時退室するように」と告げる。李はまだ何か言いたいことがあるようだ。だが積子は李にかかわるつもりは全くなかった。
鎮静病院で別れてからもうこれで縁はないだろうと思っていた。そのはずだった。
李の顔はこわばっていた。緊張と積子との会話で糸口をつかみたいという必死な面持ちだ。かれの今までの生育状況はまったく不明だし、彼の人生に介入する気はなかった。ほかに相談する人もいないのか、とも思い少々気の毒にも思うが、今、頼られても困る。

李は退室を要求しても「ご迷惑をかけませんから」の一点張りだ。前回は九州、ここは東京。大阪からわざわざ来ていることを踏まえて、仕方なくもう少し話しを聞いてやることにする。またここで言い争っても仕方がないことだ。

診察待合でずっと待っているように告げると、李は喜んでうなづいた。

「志神先生、ありがとうございます。ぼく何時間でも待てます」

積子は心の中でため息をついて元患者の家族、京極仁井の来室を待った。

第2話

積子は今、自分の診療所内で患者待合に李を待たせている。そして待合を通過して自分の診察室の中で、京極仁井（きょうごくにい）と対面した。

彼女は娘の診察券を持参していたのですぐに机の上の電子カルテで前回の診療の検索ができた。

元患者である娘の名前は、京極沙世未（きょうごくさよみ）。初診時17歳。今年で20歳、3年ぶりだが診察したのは一度きりだ。大家の家族なので名字はさすがに覚えてはいたが内容までは思い出せなかったのも当然だ。

京極家は東京都内では屈指の資産家である。今積子がいるこの診療所が入っているマンションだって、この京極家の持ち物だ。いわば大家さんの家族の来訪と言うことになる。だから名字だけは忘れるはずがないのだ。

京極沙世未（さよみ）。一度きりの診察で終わっている。娘は初診時はまだ高校生だったが、クラスメートとの感情のこじれが元で登校拒否をして、心配した母親が積子のところに連れて来たのである。

特に精神医学上問題になる症状などはなく、まわりの環境を変えるか、自分のものの考え方を変えることで状況が変化する話を本人にするだけで終わった。当然投薬などはなし。

外見も性格も初見でも特記すべきことはなく、ただ大人しくまた自分に自信がなく終始おどおどしていたのが印象深い。

積子は沙世未と二人きりで面談した時に、自分に自信を持つようにアドバイスしただけで笑顔を見せた素直な娘だ。そしてそれで親子とも納得したのか、それきり顔をみなかった患者だ

だからいきなりの診察依頼を受けたときも誰かは大家なのでわかるが、どういった内容の患者だったかまでは思い出せなかった。

積子は診療所を3ヶ所もっているがどこも一人でやっている。基

本的に電話かメールで診察予約を受け、もしくは患者の自宅を訪問することも多い。また精神的な相談を電話で受けることもあるのでそれが可能なのだ。

そして患者は、どちらかというと社会的地位が高い、もしくは裕福な家庭が多い。だから本当に内密で人目を憚る相談と言うか、診察依頼が多い。今日のいきなりの来訪もそうだった。しかもそうとうせっぱつまっている。

母親曰く「今度は娘は聞いたことのない新興宗教にはまり、変になってしまった・・。京極家にとっては大事な1人娘。なんとかしてやってほしい」

聞けば「ヒイロ・ヨカナン教」という宗教で反対すると娘、が家に帰ってこなくなったという。母親にとっても、教祖がヒイロ・ヨカナンという国籍不明の名前も聞いたことのない男だ。お金をせびるようになって困っているという。

積子は当惑した。理由は2つある。1つは患者の母親が娘の精神的な症状を訴えるのではなく、宗教を信仰しなくなるようにしてほしい、というからだ。

もう1つは、つい30分ほど前の好自時緒代議士からの電話にヒイロ・ヨカナン教の存在を聞いたばかりだったからだ。彼の娘、好(こう)自満(じみつる)はヒイロ・ヨカナン教にかかわり死亡した。

繰り返すが電話があったのはつい30分ほど前だ。

そして李の来訪、ついでヒイロ・ヨカナン教にのめりこんだ娘をもつ家族からの来訪。

何かが重なっている。これは自分の仕事になるのか・・・こういうことは偶然におこるものだはない。積子は偶然にこそ、必然というものが存在すると信じている。これは自分にとっての真実なのだ。

」」」」」」」」」」」」」」」」

これは私の仕事で、私がヒイロ・ヨカナン教に対峙しないといけないかもしれない・・。

」」」」」」」」」」」」」」」」」

とにかく、京極仁井の話しをよく聞いてやらねばならない。積子は母親に向かった。

「・・まず親子でよく話し合われた方がいいのではないですか？」

「志神先生、今はそういう段階を通り越しているのです。教祖が我が家のお金の問題に介入し、京極家を乗っ取ろうとまでしているのです。どうか、娘の心を弄（もてあそ）んだ教祖のヒイロ・ヨカナンという男を殺してほしい」

今度は積子は気を悪くした。

「どういうつもりでいらしたか知りませんが、ここは心療内科です。娘さんの心理的治療ならいたしますよ」

「・・・はあ、じゃあ先生は殺しを引き受けないのですね」

母親は直截な物言いであけすけにいった。いくら大家の家族だからってそういうものの言い方はよくない。殺人依頼は相応のことがないと動けないし、引き受けはしない。だから積子は怒った。

ただ顔には出さずとにかく本人を連れてこないとどうにもならないことを伝えてお引き取りを願う。

ところが積子がそう言ったとたん京極仁井の持っている携帯電話が鳴った。仁井はすぐ電話を見て「娘の沙世未からです」と告げた。当の娘からだ。これも偶然＝必然か。積子は慄然としたが、仁井にすぐに電話を取るようにすすめた。そして娘さんに今いる場所を聞いて近ければこちらに来るように言ってくださいと伝える。

仁井の電話を聞いていると果たして娘の沙世未は都内のこの診療所の入っているビルの近くにいた！

娘は近くにいるということと、お金の無心の電話だったが母親が

こっちにくれば今すぐにお金を渡すというとすぐにくるという。ずっと以前連れて来たことのある志神先生の診療所だと告げると、あのお医者さんのことならよく覚えているから１０分ほどで来れると言う。

これで役者は揃った！と積子は感じた。仕事は突然にくる。

まだ何も知らないヒイロ・ヨカナン教を今度は積子の仕事になるようなのだ。宇宙か何かは知らないが「偶然＝必然の法則」によって。

こうして積子の診療所に京極沙世未が診察室に来た。李はどうしているのかそっと診察待合に目を向けると、李がおとなしく座っているだけだ。そばに置いてある雑誌を見るわけではなく、ソファにじっと目をつむっている。

彼は今、ヨガか、禅をしているようだ。

それから京極沙世未を自分の診察室に招き入れ、母親と二人でソファに腰掛けるようにすすめた。

「お久しぶりですね、よく来ていただいて」と挨拶する。娘も軽く会釈した。

母親の京極仁井は一目で高価だとわかる絞りの着物、後から来た娘の沙世未はその年の娘にしてはやや保守的なブラックのリクルートスーツだ。ただし生地は絹の上等なものだ。絹も着方によってはしわがよって見苦しくなるがそうはならず、かっちりと着用している。ヘアも相当長いらしく編み込みで頭部をぐるりと囲んでいる。

金をせびりに母親に携帯で電話をよこす娘は母親を見てもにこりともしない。とても表情だけ見るととても良家の子女には見えなかった。

娘の顔も診察が一度きりだったこともあってまったく忘れていたが、古いカルテをＰＣの中から引っ張り出してみる。特にコメント

なく、母親の一番最初の「娘をいじめた娘の友人を殺してほしい」といった当時のセリフ、当時の自分がよほど腹が立ったのかコメント欄に書きとめてあった。

　積子はその記述を見て、今度殺人のことをひとことでもいったらはっきりと今後の診察は引き受けないと言おうと決心した。いくら共時性があるといってもだ。安易に人を殺したくないのは積子も一緒だ。まず医師としてできるだけの義務は果たしたい。しにがみつみこ・・殺人医師という名前ばかり有名になっても非常に困る。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」

　美人とは言えないが、顔立ちがおとなしそうで清楚だ。ただ性格診断ではやや内向的で引っ込み思案の記載があるので恋愛には奥手かも。まだ処女だとしても不思議でもない。母親に対する無視するような表情はいただけないが、外見だけはいかにも育ちのよさそうな良家の子女というでたちでお見合いにはまさに歓迎されるタイプではないか。

　京極仁井は改めて娘を紹介してあいさつした。

「・・志神先生。あれからお世話になりました。娘ももう２０歳になりました」

　娘は黙っていたが、少しだけ前にかがんで積子に会釈だけはした。

　積子はうなづき「私のことを覚えていらっしゃいますか」と問うた。

　娘はこくん、とうなづいた。年齢の割に幼い感じもするが母親の長年の過保護のせいもあるかもしれない。動作や表情に特に変わった点はない。常用している薬や持病もない。いたって健康とのこと

だ。
「そうですか、3年ぶりですものね。ところで今回の件ですが、お母様が心配されていることはおわかりですね」
すると本人に向かって質問しているのに、母親がしゃしゃりでて答えた。
「はあ、その通りです。娘、沙世未ももう２０歳になりました。短大今年の春、無事卒業して一流商社に入りました。でも変な宗教にはまって・・」
母親がそう言ったとたん、娘の表情がまた強張った。そして思いがけない歌が彼女の口から飛び出た。
「お母様あ、ヒイロ・ヨカナン様のことを悪く言わないで～ヒイロ・ヨカナン様は最高よ～とてもお美しく、心が清らかな方ぁ～」
積子は唖然とした。
まるでご詠歌を唱えると言うか、唄っている感じだ。唄いだすと強張っていた表情も一変してうっとりと恍惚とした感じになった。少し異様な光景だった。
母親はため息をつき、積子の方を見た。積子はすぐにある症状に思いついたが今これを診断するのは時期尚早だ。積子は母親に部屋から出て娘とだけ話したいと要請した。
仁井は素直に応じて部屋を退室する。積子は診察室のいすの１つに座るように促した時に沙世未からある匂いがして思わず足を止める。
積子の唇がきゅっとひきしまった。ヒイロ・ヨカナン教に対しての警戒を怠らないように自分を戒めておく。
それから沙世未の前に積子も椅子に座り、彼女と対峙した。

第3話

積子は母親の京極仁井を診察待合に追いやり、娘、京極沙世未に二人きりで対面した。娘は「ヨカナン教の教祖、ヒイロ・ヨカナン様」とやらを讃える歌を歌い終わるとうっとりと目を閉じている。何か良い音楽を聞いて恍惚とした感じだった。

積子は自分はヒイロ・ヨカナン教のことをよくは知らないので簡単に教えてもらいたい、そして私の気に入れば私もその宗教に入るし、母親も説得してあげると言った。

沙世未は積子の言葉に半信半疑ながらもそういうと目を開けて「そ～れならばー、教えてしんぜよう～ただし、ヨカナン様に会いたければお布施～浄財がい～りまするうう～」と歌った。

服装はきちんとしているのに、ヨカナン教の一言が耳に入っただけでうっとりと唄いだすこの反応は確かに異様だった。

そしていきなり浄財・・？お金の話し・・？

積子はなんとなくおかしくなったが、笑いをかみ殺して沙世未にこう言った。

「実はこういう精神科医を長くしていますとね、いろいろな患者の悩みを聞いて自分も悩むようになるのよ。浄財かな、お金のことなら、心配しないで。大丈夫だから・・・だから、ヒイロ・ヨカナン教のことを教えてくださいね。・・・えっとできれば唄わないでね。普通の言葉遣いでいいわよ、お願い！」

「そ～れならば、」と、娘、京極沙世未はヒールを脱いできちんとソファの上で正座した。そしてよどみなく語り始める。話し方には慣れていないらしく話しが前後するくせがやや見受けられる。が、自分が心酔しているヒイロ・ヨカナン教のことを興味をもたれてうれしかったのが、笑顔でしゃべりだした。

積子もパソコンを操作するふりをして、ボイスレコーダーのスイッチを彼女にはわからないようにして入れた。そして終始彼女に対して、笑顔を見せた。かつ、さも興味があるような仕草で安心させた。

沙世未の話しは以下のとおりである。

彼女はクラスメートとの感情のこじれがあってから、やや人間不信になっていた。付属の短大にそのまま進学しても心許せる友人らしきものはできず、バイトするわけでもなく、時間を持て余していた。

そういう時に中学校の時の同級生の一人に声をかけられた。それは、病気がちで休みがちの人だったがあんまり懐かしそうに会えてうれしいと言われ気をよくして沙世未は一緒に近くの喫茶店にお茶を飲みに行った。

彼女の名前は、深見屋敷稽子（ふかみやしきけいこ）。彼女も東京都トップどころか関東を代表するある企業の代表取締役の1人娘だ。

懐かしそうに声をかけたが、それは運命的なものだ、と沙世未は言う。稽子（けいこ）はあいかわらず病弱そうでやせてはいたが、笑顔がはじけそうで、こんなによく笑う子だったかしら、と思ったという。それもヒイロ・ヨカナン教に彼女はすくわれたおかげだった、と沙世未言う。

稽子の身なりは髪を長くのばし、夜会巻きにしてきちんとスーツを着込んでいた。スーツの色はブラックだ。これが彼女にとって正装だという。すべてはヒイロ・ヨカナン様の指示だという。稽子言う。

「ヒイロ・ヨカナン様はね、この乱れた世の中を是正すべく誕生された御方。その人類にとっては大事な御方を悲しませないためにこうしてきちんとしたスーツを着込み、ただしいみなりと言葉遣いをしないといけないの。

そして浄財。汚いお金をヒイロ様に差し上げて綺麗にしていただくの。その分私達の金にまみれた魂は綺麗にみがかれ、天使のような心になれる。そして世の中の迷える人々を正しい方向に進むよう、力になってあげないと」

積子はこれは最初から仕組まれて京極沙世未を狙ったのだろうな、と思った。というよりは沙世未の両親がもっている土地とお金か・・・。

深見屋敷稽子もまた然り。

相手の家庭状況や資産を見極めた上で、出会いを仕組んだりするのは詐欺師の常套手段だ。

ヒイロ・ヨカナン教の教祖は結局はお金目当ての詐欺師だ。さて、彼は世間知らずの娘をどうやって自分の思うがままに操れるようになったのか・・？

積子には多分こうだろうという予感があったが、まだそれには触れない。沙世未の言葉を笑顔であいづちをうち、かつ慎重に耳を澄ませ、彼女の表情の変化に気をつける。

京極沙世未は、その深見屋敷稽子に連れられて喫茶店の去ると、その日のうちにヒイロ・ヨカナン様のいらっしゃるマンションの一室に連れて行かれた。そこで沙世未はその場で今まで知らなかった世界を知り、教祖から新しい第３の目をいただいたという。

第４話

新しい世界、第３の目をいただく？

積子は目と耳を研ぎ澄ませて、沙世未の言葉を待った。

稽子に連れられたのは、ここからほど近い都内のマンションの一室。好奇心と警戒心がないまぜになっていたが、もちろん自制心もあったという。何かあればすぐに逃げよう、ただ宗教とは全く思わなかったという。

元クラスメート、そしてまじめな自分と同じ良家の子女ということも安心感を誘ったのだろう。

ごく普通の分譲マンションでどこか新しい友人の家に遊びに行く、という感じだ。

表札もないあっさりとした感じで重々しい看板もなく、どこにも宗教がかったところは全くない。

稽子はなれた動作で玄関のインターホンを押す。そして１１階まで上がる。ドアの前までくるともう１回インターホンを押す。低い男性の声がしたとたん、稽子は手をあわせてインターホンに向かって拝礼したという。本当にあっというまの自然な動作で何も変な感じは受けなかったらしい。

それからドアが開いて中に招き入れられる。応対に出た人も同じ年に見える女性できちんとスーツを着て現れた。

そしてその女性は自分から好自満（こうじみつる）と名乗って丁寧にあいさつした。それも安心感があった。それから入るとその場でカギがかけられた。そして応対に出た満との名乗る女性と一緒に、その場で靴も脱がず稽子が唄い出したという。

「ヒイロ、ヒイロ・ヨカナアーーーンさまあ、わらわ、けんざん〜、ヒイロ・ヨカナンさまあ、」

大きく手を振りながらそして朗々と歌いながら稽子たちは沙世未

を連れて行った。
それから靴を脱ぎ狭い廊下を渡り、突き当たりの部屋に入れられたという。そこは黒いカーテンで囲まれた狭い部屋でそこで座って待っているように告げられる。部屋はすごく暑かった。
春先だったが汗ばむ季節でもないのに、汗をかく。沙世未はハンカチで額を拭きつつそっとまわりを見まわした。
黒いカーテン以外何もない部屋だった。人の気配がカーテンの外にするが、女性の声ばかりだった。だが、内容まではよく聞こえない。
好自満（こうじみつる）と名乗った女性は、強圧的でもなんでもなく、きさくな人だった。自分の父親は代議士で出自もはっきりとし、決してあやしいものではないという。政治には興味がなくとも、好自という苗字ぐらいは知っていたのでかえって安心する。好自満の方も京極家のことを知っていて沙世未が1人娘で自分もそうだったという。
そういう出自に関した気軽なおしゃべりで親睦を軽く深めた後、沙世未に持っているものを預かるといい、かばんの中のもの、携帯電話、財布、定期、化粧品などをやや強制的に取り上げられたという。
その際はじめて沙世未は不安になり、せめて電話と財布は持っているとこばむも、大丈夫だから終われば返却するとの言葉で納得させられる。
満（みつる）と名乗った娘は「私の父は代議士で、私はその1人娘。貴女も京極家のあととりということもわかっています。ここにいる人たちは全員、身分や身元がはっきりしていて、この世の財政界をいずれは担う役目をもっている。
私達はヒイロ様から認められた入会者なのです。これはもう前世よりもずっと昔の過去世から決まっていたことなのです」、と説明を受けたという。
あとからお茶を持ってきた女性も同じ年ぐらい。どこかで見た顔だと思ったら元華族の柳凍理家の娘、粟生（あお）だった。父方の遠縁にあ

たる家の娘で顔だけは知っていた間柄だったが、彼女の顔を見てもっと安心もしたという。その娘も暑い部屋の中、きちんとスーツを着て椅子も机もないカーテンの部屋で正座してお茶をだしてくれたという。

稽子や粟生からも身元確実な良家の子女しか入れないところと聞いてそれならば、と聴くだけは聞こうとしたと決めたという。

（積子、心中でつぶやく。満（みつる）は、亡くなった好自議員の娘だ。やはり、これは私の仕事になる、と確信する）

遠縁の娘、柳凍理家の粟生（あお）も稽子もしばらく一緒に座っていたが、ずっと小さな声で祈りの言葉を唄い、手振りをするが、ほとんど何を言っているかわからなかったという。

「でも、その不安は最初のうちだけでした。唄う、というのはヒイロ・ヨカナン様のご意思なのです。唄うことで魂の汚れを泡立てています。それを大声で唱えることにより、洗い流すのです。

それは、浄化、という言葉と同義です。でもそれは入信してからわかったことなので、最初は不安だけでした」

これからどうするのだろうか、このままずっといるのだろうか。粟生さんも稽子さんもいる。満さんもいい人そうだ。だから安心だとは思うけれど・・。

迷っている心の内を見透かすように、「じゃあぁ～、これからヒイロ様に会わせましょう～」

と3人は唄った。同時に3人は手をつなぎ、身体を揺すって気持ちよさそうにする。そのまま彼女達はごろんと床に横になり、そのまま寝た姿勢で身体を横に揺する。まるでヒラメか何かなったようで異様な感じを受けた。

沙世未は違和感を覚えるも少しだけ稽子の顔をたててやり、ヒイロ様とやらに会ったらすぐに帰ろうと思ったという。だが部屋は暑く、気分は悪くはないが眠気がしてどうしようもなかったという。

積子は話しをさえぎり、そこのお茶を飲んだかを聞いた。

沙世未はうなづいた。「ええ、暑かったから、飲みましたわ。おいしい玉露でした・・。あの粟生様はお茶の師範のお免状も持っていらっしゃるのは知っていたし、きちんとした動作ですすめられたもの。飲むのは自然なことでした」

積子はあーあ、と思った。いかに元クラスメートや遠縁の娘のすすめでも初めて行った得体のしれない場所で何かを飲むのは警戒心がなさすぎる。

そして部屋の暑さ、大きな手振りと大げさな唄い方、黒いカーテンしかない部屋・・・。

それからおいしいお茶をいただいたあとの眠気・・。

舞台道具はこれで十分ではないか、と思った。

その舞台・・・、もちろんこれはヒイロ・ヨカナン教とやらの独自の「洗脳」の道具だろう。

それからの沙世未が堕ちていく様子は心理学的には手にとるようにわかる。

沙世未の話しはまだ続く・・・。

私は眠くなりました・・。でもこんなところで寝ては失礼だし、怖い・・・。

稽子さんも粟生さんもちょっと変だし・・。ヒイロ様とやらはまだ現れないのか・・？

「私はそのままほっておかれました。携帯電話も全部取り上げられたことを私は後悔しました。だって時間がわからないし、ここかどこかもわからないのですもの。

それに稽子さん達は気持ちよさそうに寝ながら身体を揺すって唄ってばかりだし、やっぱり帰ろうかと腰を上げかけたそのときです・・・！」

突然カーテンの一部が、いや、カーテンから1人の男性が飛び出

してきたという。いや、飛び出したというよりは突然出現したというべきか。
部屋の隅にいつのまにか立っておられたという。
男のまわりだけ光が差し込んでいました。ええ、まぶしいくらいでした。
男は髪が長くどこからか風がきて男の周りにだけ髪がたなびきました。
男の目は光り輝いていました。
男の姿は昔の武士のようでした。
総髪でブラックのスーツを着ておられました。その姿で立っておられたのです。
ああ、それこそはヒイロ、ヒイロ・ヨカナン様でした。

沙世未は気持ちよさそうに小刻みに身体を揺らしてヒイロとやらの教祖の話しを続ける。
積子は自分の表情がだんだんと険しくなってきているのを感じていた。ヒイロのやり方はそれこそ心理学的なプロットによる「洗脳」の手口だからだ。
安心感と不安感を交互にあおり、最後に御大が出現して最大限の信頼感を与える。しかも薬物を使っているのは素人の彼女の告白からもよくわかる。
沙世未の話しはまだ続く。

第5話

沙世未は男の姿にくぎつけになった。
まわりの女性は眠ってしまったように動かないが意に介さなかった。もう早く帰ろうとか全然思わなかった。
ヒイロ様の目は煌々と光っていた。どうにも視線がはずせなかった。あの甘ったるし重苦しい匂いがつよく香った。思い切り吸うと頭がくらくらする。気分は悪くはない。かえって高揚する。なんだろう、この匂い・・・。嗅いだ事のないちょっと変わった花の匂い・・・？
それからこのヒイロ様の目。光っている。私を光で包んでいる。ヒイロ様の目は2つのはずなのに、そういうわけか8つとも、10にも、そして20にも見える。
身体は1つなのに、眼だけがたくさんあるように見える。ヒイロ様って稽子さんの言う通り、人間であって人間でない人なのかも・・・。本当に不思議なひとだわ。
ヒイロ様が私を見てにっこりした。たくさんのヒイロ様のやさしい目に囲まれて私はもっと頭がくらくらする。こんな異常な感覚ははじめて。こんな不思議でやさしい気持ちになれるのもはじめて、なような気がする・・・。
「ヒイロ様、不思議なひと！こんな人間は見たことがないわ！」
沙世未とヒイロ様の視線がからみつく。ヒイロ様がとうとう口を開いた。
「私の姿を見たら私に手をあわせなさい」
低い思い声だった。自分の心にずしんと響く。その迫力に沙世未はおずおずと手をあわせてヒイロ様を拝んだ。
ヒイロ様はにっこりしてそのまま自分のそばまで来た。ヒイロ様は意外と背が低い。だがその目は自分を食い入るように見ている。吸い込まれそうな目だ。吸い込まれて自分もまた光っているように

感じる。ヒイロ様の沢山の目が私の姿、私の顔を見上げている。
ヒイロ様はややあって、それから話しかけてくださった。
「・・・沙世未・・よく、来たね。待っていたよ。
京極沙世未、あんたは私に選ばれた。ああ貴重なる全知全能の信なる主は我の事也、貴重なる我らの仔羊は沙世未」
沙世未はこう言われてもぼう、としていた。
ヒイロ様は座りこんで拝んでいる沙世未の手をとり立たせた。ヒイロ様の手は異様に熱かった。
「・・・私の手は熱いだろう・・・私の目は光り輝いているだろう・・・私は熱い・・・とても熱い、君はその熱さに我慢できるかい・・・？」
沙世未は突然熱い、何もかも熱いと感じて胸が苦しくなった。手を握られたまま失神しそうになる。部屋の暑さ、ヒイロ様の輝く目と熱い手。握られる・・・大きな手で。その大きな身体で！
沙世未はヒイロ様にそうっと身体を覆われて抱きすくめられた。男性に、それも初対面の男性に会い手を握られ、抱きすくめられるのはこの年になって初めての経験だった。普通の状況ならば拒むだろう。
だが拒めなかった。暑い部屋に熱い男、大きな手振りと身ぶり。沢山のヒイロ様の目。やさしい視線。ヒイロ様に包まれて生まれて初めての言葉に言い表せない「安堵感」に包まれて涙にくれる。
何か花を思わせる重いような匂いがまた彼からしてきた。未知の匂い・・。それは沙世未を安心させた。嗅いだ事のない匂いだったが、心の奥底から陶酔感が湧いてくる・・・。
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」
積子は沙世未の告白を聞いて次なる展開も読めた。あらかじめ良

家の子女を物色し、身元を調べ上げてその娘を洗脳する。しかもお膳立ては揃っている。多分心理学、かなり高度な心理学と薬物を知っている詐欺師だろう。
好自満(こうじみつる)もこれにやられたのだ。深見屋敷稽子も、粟生(あお)もみんな・・・。

いつのまにか沙世未は下半身だけ裸にされている。上は来た時のまま、ブラウスは着用している。下のストッキングとショーツだけいつのまにか脱がされていた。下半身だけ。生まれたままの裸の姿に。
抵抗できなかった。頭が何かベールに覆われているように、抵抗できなかった。さきほど部屋にいた友人達もスーツ姿のままで起き上がり、何か唄っている。大きく手振りを振り汗をかきながら陶酔の表情で唄いあげる。朗々と切々と・・・
「ヒイロ、ヒイロ・ヨカナアン、ヨカナアアアーン様ぁ、ヒイイイロ様ぁ・・・」
頭の、額の中心が一番熱い。そこと自分の膣の中が。とても熱い。今までにない熱さと暑さ、今までにない快楽。
「それが第3の目だ、私は君に第3の目を与えたもう。君はもう普通の人間ではない。我らの住まう世の中を救う戦士となり、我を助けよ・・・京極沙世未、我を助けよ、浄財・・・献身・・」
「ヒイロ様・・・」
「・・気持ちがよいか、気持ちがよいだろう、こんなに気持ちがよいのは初めてだろう」
ヒイロ様の手は一体何本あるのだろう。たくさんの手が私の身体の外側と私の身体の内側を這いまわっている。触られるたびに身体が熱く燃え上がる。沙世未は快感を感じている。はしたない、と思いつつも腰が卑猥に前後して振ってしまう。とても恥ずかしいけれど、とてもよい感覚。
特に股の奥。女の大事なところ。膣・・・?ヴァギナ・・・?

ああ、恥ずかしいけれど、熱くて・・、とても気持ちがいい・・。
身体が何本もの手でまさぐられ沙世未は快感にあえぐ。
ヒイロ・ヨカナン様の低い声が自分の身体の中に響く。
「・・腰を振ってはいけない。これははしたないことだ。できるだけ我慢しなさい。声も出してはいけない。そう、そう・・声をだしたくてもできるだけ声をださないように・・」
「はしたない・・ああ、でも声がでてしまいます・・ああ・・・ヒイロ様・・とても・・ああ、いいです・・」
「唄いなさい、と申すのに、仕方のない子だね・・でもいい子だ。沙世未、我が戦士となれ、そして世の中を救え」
「わかりました・・ああ、何なりと・・ああ、あああっあああーーー」
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」

そのあと、ヒイロ様とその横に付いた好自満の名乗る娘から、初回は無料だが、次回からヒイロ様の第3の目をいただきたいときは1回30万円をもってくるように告げられる。

積子はもういいわ、と思った。
洗脳の手口のあらましは予想通り。あとは強烈な性的な快楽と陶酔感を与える。いったん洗脳され意のままに動かせるようになったらお金の無心も、好きなようにできる。寄進、ご奉仕、献身、寄進・・それによって快楽を得る・・
非常に悪辣なカルトだ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」

積子は再びヒイロ様を讃える唄う沙世未を、快感の余韻に浸る沙

世未を無理に立たせた。それからぱんぱんぱんと身体をたたく。
洗脳はとけないが気分転換をさせたかったのだ。一度会っただけで面識があるだけ、まだ幸いだった。
あと1つだけ、検査をしておかねばならない。積子は沙世未に検尿コップを渡してきわめて事務的に「尿検査」をしたいので採っておくようにと告げる。沙世未は積子が医者なので素直にうなづいた。
それを見てそんなに無茶苦茶、深い洗脳でもなさそうだと判断する。良いことだが用心にこしたことはない。
トイレにはもちろん自分もついていった。トイレの個室まで、ちゃんと。尿を出すところまできちんと確認する。沙世未は素直に積子に従った。積子が女医だということもあるだろう。検尿の現場まで医者もしくは立ちあい人が見届けると言うのは、オリンピックの薬物反応検査のみの厳重さだ。
積子だって、普段はそんなことはしないがこれは急を要する。
沙世未がもし検尿を拒めば腕づくでも、いや尿管を差し込んでも尿を採るつもりだったがそれは杞憂に終わる。
簡易的ではあったが果たして薬物検査は陽性だった！しかも薬物はほぼSだと断定できる。もちろんこれは法律違反だ。持っているだけで逮捕に至る。
なんてやつだろう！！いまや積子はヒイロ・ヨカナンとやらの詐欺師に怒りを感じている。

あとは今回の依頼者の好自議員の1人娘、好自満（こうじみつる）がどうして死亡に至ったのかを沙世未、もしくは現場から解明する必要がある。
その前にまだぼうっとしている沙世未をそのまま待つように言い置いて、診察室のそのまた奥の小さな小部屋に行って好自時雄代議士に電話をかけた。
すぐに秘書が出たが積子がさきほどの件で、と告げると本人にかわった。
事態は急を要する。

積子は手短に今現在ヒイロ・ヨカナン教の信者を診ていることを言う。

第6話

時間がないので、好自議員に直接的に聞いた。
「さきほどのヒイロ・ヨカナン教の件について。今当院に来ている信者から薬物のSが検出されました。
今現在、私の診療所に来ている患者は、完全に洗脳されています。聞きにくいことですが、もしかして娘さんもそうだったのではないですか？
ヒイロ・ヨカナンという男の身元に関しまして何かご存じのことがあれば情報提供願います」
好自議員も即答した。
「ではさきほどの依頼に応じていただけるのですね。
ヒイロという男の本名は英吾緋色（えいごひいろ）という日本人ですが成人後にアメリカ国籍を取得しています。年は４１歳。彼はアメリカの大学を出ています。
専攻は最初は理学部。薬物の分析化学を専攻していましたが、途中で心理学部に転部しています。行動心理学・・。彼はこれで博士号を取っています。
グリーンカードを取得しどこかの公的機関での就職を狙っていたようですがどこでダメになったのか、帰国してすぐに宗教を起こしています。ただ宗教法人にはなっていません。まったく個人で勝手にやっているようです。
実にけしからん、許せない人間です。志神先生は自由にやってください。また信者のすべての洗脳を解くべく診察も極秘でお願いしたい。
費用はすべて私の方で持ちますがくれぐれもマスコミにはわからぬように手配願う。・・いけますかね」
積子は快諾した。好自代議士は話しを続けた。
「私の娘、満（みつる）はカナダへ留学してその帰国の飛行機上で誘われたら

しい。どういう手管を使ったのかは不明だが、２人は半年ほど東京で同棲していた。
その間に満(みつる)を介して裕福な家庭の１人娘を狙って１人ずつ洗脳、入信させている。人数は７人ほどかな。志神先生の今診察中の娘さんだって、多分我が娘、満の勧誘か指示で入信に至ったに違いない。
例の薬物Ｓだが、私の娘ももちろん使われていたと思う。ヒイロ・ヨカナンの一番弟子、一番最初の入信者だから、一番効果が出てかつ、副作用も強かったはずだ。
急激なやせ、人格崩壊、幻覚を常時みていた。
父親として娘を見るのは大変につらかった。私がヒイロの存在を知り、すべてを知ったのは満が壊れてからだ。
ヒイロの信者はほとんどが私の娘、満(みつる)を介して集められているから父親としての責任も感じている。だから費用は惜しまない。また信者を引き取り、精神科医として洗脳を解く役目もお願いしたい。これも費用はすべて私がもつ。
また家族の連絡も私と私の信頼できる秘書でやる。これもすべて極秘で」
「了解しました。ところで薬物Ｓの入手経路はわかりますか、それとヒイロ・ヨカナン自身の外見、身長体重はわかりますか」
「待ってくれ、」
しばらくして返答がかえってきた。
「薬物Ｓの経路は現時点では不明。いわゆる暴力団との接触の気配は皆無。だから私としても不思議に思う。
ヒイロの外見だが、メールで画像を送付する。彼は身長１６０センチ、体重１００キロとある。いいかね」
「わかりました。潜伏しているマンションですが、もしかしたら壊すかもしれません。後始末の方も頼みます」
「わかった。ついでに言っておくがそのマンションは複合ビルといってよい。低層階が商業オフィス、上層階が分譲になっている。そこの１１階だ。場所はそちらから１０分とはかからない。・・実は

私が所有しているものだ。満に頼まれて空いている部屋を貸してやっている。だから後々の面倒なことは私でやれるから、存分にやってくれ。そして我が娘、満の将来をこわし、殺してしまったヒイロという男をできるだけ苦しませてから消してくれ」

それから言葉を切り、「今からヒイロ・ヨカナンすなわち、英吾緋色の写真とマンションの位置をメールで送付する、頼むぞ」

「報告は必ずさせていただきます。迅速かつ適切な情報提供に感謝いたします」

すぐにメール受信のランプがつき、積子は見た。

そこには小太りの男がこっちを見ている。やぼったいスーツを着用している。二重あごとロングヘアが目をひく。それから大きな目をしている以外には、これといってどういう特色もない肥った小男だ。だが手には分厚い洋書を持っている。その背表紙には「ＰＳＹＣＨＩＣ　ＤＲＩＶＩＮＧ」とある。

その本をまるで誇示するように胸の前に両手で掲げている。一体どういうつもりなのか。

ＰＳＹＣＨＩＣ　ＤＲＩＶＩＮＧ・・・。　サイキックドライビングだ。日本語訳では精神操縦という。言うまでもなくこれは洗脳の手段だ・・。

著者の名前までは読み取れないが、行動心理学では著名な教授が書いたものに違いない。題名に聞き覚えがある。

積子の唇がぎゅっと小さくひきしまる。敵はヒイロ・ヨカナン。行動心理学と洗脳で博士号をとったプロだ。相手には全く不足はない。

そしてドアを開けて診察室に戻る。椅子に座ったまま、まだうっとりとしている沙世未に近寄る。

「さあ、沙世未さん、立って。あなたは私にヒイロ・ヨカナン様を紹介するのよ」

第7話

沙世未は素直に立った。それからおずおずと積子を見上げて言った。

「あのぅ、大事な話しが2つあります。ヒイロ様に会いたければ1回30万円。初回は誘いを受けたら無料。でも先生は、誘いを受けてないのでまず連絡をとってヒイロ様の許可がいただけたらOKだと思います」

積子は沙世未を安心させるように言った。

「では貴女の分、30万円はお母様が出されるでしょう。私も初回だし、自分から申し出たので・・そうね、100万円即金で。今から行ってヒイロ様に会ったときに支払います。これでいいかしら」

「まだあります。2つめ、これは大事です。・・あの、とても言いにくいのですがヒイロ様に会えるのは・・20代の女性しかダメだそうです」

積子はむっとした。そして間髪いれずに答えた。

「あら、そお?私は29歳よっ!ちゃんとした20代よ!」

「えっ、先生って29歳?・・。そ、そうなんですか」

「そおなの、だから会わせてくれるわね?」

沙世未は半信半疑で積子を見たので、積子は心底むっとした。

(30代で悪かったわね、ヒイロ・ヨカナンってホント嫌なヤツ!若い女性しかダメなわけね、その分自分に自信がないといっているようなものじゃない、世間知らずの良家の1人娘しか狙わない卑怯者の小男の豚男めが、今に見てろ!)

心の中で思い切りまだ会っていないヒイロ・ヨカナンを罵倒しつつ、沙世未にはにっこりと(なるべく若く見えるように)笑った。

そしてシニョンに巻いてあるピン止めをおもむろにはずして、髪を下ろした。前髪もオールバックにしていたがおろすことにする。

こうするとまあ、3つぐらいは若く見えるだろう・・・。メーク

も大急ぎで直さねば。白衣も着替えて、なるべく若く見えるように・・、最低限２９歳以下に見えるように。そして１００万円。この診療所に置いてある金庫の中のなけなしのお金。これを全部持っていかねばならない。

服装はコンサバなスーツが好みらしいのでブラックの葬式用のが診療所に常備しているはず。大急ぎで探して着替えねばならない。

あの欲張りの小男の豚男の卑怯者のヒイロ・ヨカナンのために。

今や志神積子は闘志に燃えていた。

「さあ、見てろ、ヒイロ・ヨカナン！

しにがみつみこ、の働きぶりを！

私の殺人ぶりをこの目でしかと見届けるがよいわ！」

第8話

積子は診察室に沙世未を待たせたまま手早く着替えて身支度する。髪は前髪をおろし、横も後ろもまっすぐ下に流してダウンヘアスタイルにする。とにかくヒイロ・ヨカナン教の所在地に最初だけでも29歳以下の年齢と認定されて中に入れてもらわないと話しにならない。

若がえれー、若がえれーと念じながら、そしてそんなばかばかしいことを強いるヒイロ・ヨカナンに怒りを感じながら積子はフェイスパウダーを手早くぱたぱたと顔に塗り込む。

厚化粧にならぬよう、できるだけ薄くメイクしてここで5分。診療所の貧弱なクローゼットをあけて喪服を探して着込んでまた5分。合計、10分。あ、と思いだしてブラックのヒールも出す。鏡でチェック。合計12分。

グレイのバッグを取り出し、ブラックのサングラスと、積子の大事な注射器と特注のスカルペル、メスを専用の容器に入れてさらにバッグの奥へ隠す。それとある種の筋弛緩剤のアンプルと2，3種のアンプル。大事な商売道具だ。かつこれらはもちろんヒイロ・ヨカナン様へのプレゼント用だ。ていねいに底にきちんと収まるようにいれてふふ、と口元を緩める。

サングラスは仕方なしにいれておく。本当はゴーグルがよい、しかも暗視用の。でも急なことでないからしかたがない。ないよりも、マシ。というわけで入れておく。

グレイのバッグはコーチのものだ。真っ黒ではないから喪服用でないとわかるだろう。

バッグはぱんぱんに膨れていていかにもおばさんくさい・・・。が、仕方ない。急な仕事の時はこういうときもある。小説や漫画に出てくるようなスマートな殺し屋は自分には無理だ。

が、やることはやるから積子は動じなかった。格好のよい、見て

くれの良さに囚われていたらできることもできなくなる。物事には本質がある。それを見極めつつ仕事をするのが信条だ。
喪服はオーダーではなく三越で購入したつるしだが、絹の上質なものだ。一度も手をとおしたことがない。タグが袖にぶらさがっているのをはさみで切る。
タグのひもの残りを取りつつ診察室に戻る。
着替えて出てきた積子に沙世未は、うんうん、とうなづき、これなら入れますとばかりににっこりした。積子も内心、やれやれと思いつつ笑顔をかえす。

それから沙世未を連れて待合室に一緒に出た。ゆうに1時間はたっぷり待たせたので沙世未の母親は2人を見て心底ほっとした表情で迎えた。
だが、これで診察が終わりではなく、これからなのだ。
積子は待合室に待たせたままの李もほったらかしなのに気付き、彼を見たが彼はまだ座禅をくんで目を閉じて微動だにしない。だから少しは見なおした。

沙世未の母親、京極仁井には手短にこれから二人でヒイロ・ヨカナンに会ってくるので、このまま待っているかもしくは自宅で待機するように伝える。
母親の仁井は娘の沙世未と同じようにブラックのスーツ姿の私服で現れた積子に驚いた表情を見せたものの、教祖に直に会うという積子の言葉に同意した。
「あの、先生と娘だけで大丈夫でしょうか、私も行きましょうか」
積子は即座に断った。母親がついてきたら話しがすすまない。ヒイロも２０代限定の娘しか会わないらしいし。ヒイロとの１回分の面会料というかとにかく今３０万円を娘に渡すように告げる。
仁井は素直に娘に３０万円を現金のまま即金で渡した。これは多分積子への診察料の支払いにあてるつもりだったのだろうと思う。

娘の沙世未は無表情で母親から現金を受け取り、自分のバッグにしまい込んだ。
ヒイロの信者は7人ほどと聞いたが、いかに裕福な上流家庭の娘といえども毎度1回３０万円もの面会料をとられ、娘が帰宅しないとあらば各家庭は修羅場だっただろう、これは急いで解決してやらないと。
洗脳を解き、同時に薬物中毒の治療も早期にしないと取り返しがつかない。積子はそれを思うとあせってくるが、あせりは禁物だ。
京極仁井は心配そうに娘と積子を見比べている。
「それじゃあ、私、ここで待たせていただいてもかまいませんか？どうなるか、先生のご診断も聞きたいし・・・」
娘にお金を渡した後は彼女ははっきりいって邪魔だった。頼むからついてくるだの余計なことはしないでくれ、と積子は祈った。
仁井はここで待っていてもいいか、と問うたが積子は少し考え込んだ。確かにこの場合は1人は留守番がいる。電話応対は積子の不在時は、留守番電話かもしくは委託業者に伝言を頼んでいる。
だが今回は急展開の仕事になるし、この場合は留守番がいるかもしれない。京極仁井とは大家と店子としての接触しかしていないが、彼女は大丈夫だろうか。
積子は仁井の母親としての愛情に賭けた。
「じゃあね、ここから１０分ほどのヒイロ・ヨカナン教のところに行ってきますね。ただし、2時間たっても私達が帰ってこない場合はここに電話してくださいますか？」
「はい・・警察ではなくて、ですね」
「警察ぅ？ちょっと、京極さん、貴女この一件、警察沙汰にしたいですか？」
「い、いいえっ。警察は困りますわ。嫁入り前の娘なのに・・・」
「ふふ、でしょうねえ。じゃ、おまかせくださいねえ・・」
電話先は好自代議士のものだ。でも多分不要だろう。積子は自分の仕事に絶対の自信をもっている。

積子は思わず含み笑いをして仁井を見つめる。仁井は積子の笑顔を見てぞくっとしたようで目をそらした。娘の沙世未はあいかわらず身体をゆらゆらゆらして、母親を見ない。面会料３０万円をせしめたあとのヒイロ・ヨカナン様との快楽を楽しみにしているのだろう。

目がトロンとしてだらしない表情になっている。手が震えたりする等の禁断症状は出ていないようだが、緊急事態には間違いない。そして7人いると言う好自代議士の娘、今は亡き好自満（こうじみつる）の紹介で集まっている信者達。

彼女たちの洗脳の度合いと薬品の耽溺を的確に診断して遮断、断絶させねばならない。

それも極秘で。彼女たちの父親や出自を万一マスコミに知られれば好奇の目にさらされる。これは好自代議士や信者の親にとっても一番困ることだろう。

「あ」積子は再び李の存在を思い出した。彼は男性だから当然入れないが1人は連絡用にいるかもしれない。急な依頼だったので虹子という助手もいないし。李はどうだろうか、使えるだろうか？

3秒ほど迷ったが結局李に声をかける。

「李、行く？」

目を閉じていた李はすくっと立ちあがり「行きます」と一言だけ言う。

そしてさっとジャンパーを羽織り、ドアにかけよってドアを積子と沙世未のために開けてやった。

積子は軽くうなづいて外に出た。

仁井は不安そうに出ていく積子と、娘の沙世未、そしてずっと待合室にいながら言葉をかわさなかった李と呼ばれる青年の3人を見送った。

第9話

積子のマンションから出て数ブロックのマンションがそのヒイロ・ヨカナン教の本拠地だった。好自(こうじ)議員の情報提供通りだ。積子の診療所から歩いて行ける。平日だし、まだ午前中だが、商業地のせいということもあり、たくさんの人々が行きかっている。だが、このあたりに小規模なれど悪辣なカルト宗教が介在しているとはだれも思わないだろう。

先に立っていて案内してくれた京極沙世未は李の方を何度も不快そうに振り返った。そしてとうとうマンションの前で積子に告げた。

「あの、先生。あの人だけど・・・。男性は入れないのですよ・・・」

積子は傲然と言った。

「男性ねぇ、あの子、実は男の子に見えるけど、女の子よ。中身だけおんな、なの。性同一障害でね～治療中の患者さんよ」

「え・・、性同一障害・・男に見えても実は心の中は女性というあれですか・・・そうなんですか・・でもヒイロ・ヨカナン様はいれてくださらないと思いますけれど」

「ま、連れて行くだけ連れていくわ。入れなかったら待たせておく」

積子のものすごい強気の発言に彼女の意図がまるでわからない沙世未はとまどったように黙った。李も自分のことを女の子と言われて、さすがに驚いたように積子の顔を見た。

李の顔はひげこそなく華奢な体型だが、どう見ても女の子には見えない。顔つきも体つきも男性そのものだ。（心の中までは確かにわからないが）

時間があれば李に女装でもさせるのだが、今回は本当に行き当たりばったりだけど。いまや積子は仕事を楽しんでいた。李がこの積子の言葉で怒って帰るといえば、勝手に帰るがよい。なんとかなる

さ。

「あの、志神先生、今回もぼくついて行くだけでいいですか」

李はとうとうたまりかねたように、沙世未に聞こえぬように聞いた。

「ええ、相手はこれから行く新興宗教の教祖よ。ヒイロ・ヨカナンといってね。すぐ終わるからまあ、見てて。手伝ってほしいことはほとんどないけど、腕がたつらしいからもし力仕事になったら頼むわね」

「はい、わかりました」

仕事なのだ。李は殺しだとすぐに推察しても全然動じなかった。積子はなんとなく李もまた殺しを何回かしている人間だな、と思った。これはあとでゆっくり話を聞こう。絵図との兼ね合いも考えねばならないし。

「ぼくなら入室できなくとも大丈夫ですよ。部屋さえ教えていただけたら何とでもできます」

「そうね、このあたりだからオフィスビルだろうし、だったらできるわね。１１階の一番奥に部屋があるはずよ」

いかにセキュリティ防止策をとろうとも複合のオフィスビルなら誰が入室しても基本は自由だ。李はなんとかするだろうと思った。だからほうっておくことにした。少なくとも彼は積子の仕事の邪魔はしないだろうから。

そうして3人は商業地、大きな4車線ある道沿いにある複合マンションに到着する。マンション自体は小さな規模だが1階の入り口にはセキュリティロックがある。常駐の警備員は奥にいるのだろうか、見当たらない。築年数もそんなにないらしく、ぴかぴかして新しい。

入っている会社をざっと見るが、アパレル関係や美容関係のオフ

ィスが多い。上階の方は分譲マンションを兼ねているのか、土地柄を表して無記名のままのも多い。
積子は京極沙世未がどこまで知っているかカマをかけた。
「ねえ、沙世未さん。これは誰の所有者のビル？マンション？ご存じかしら」
「あ、好自満さんのお父様です。満さん、最初の方からヒイロ様にお世話になっていて、以前の住居はアパートで手狭だからってお父様に頼んで貸してもらっていたのですって」
「・・・好自さんのお父さんって、ま、びっくり。お父さん、反対されなかったのね」
「さあ・・反対だったかもしれないけれど、マンションを貸してくださったのだし・・」
父親として娘の目の届く範囲内に、住居を構えさせたのだろうと推測した。結局娘は亡くなったけれど、それが悲しい効を発して今回の積子への依頼に至ったわけだ・・。
積子は好自議員の心中を思いやった。娘の死の原因になったヒイロ・ヨカナンへの復讐、並びに娘が勧誘したという他の信者へのカルトの抹消、心療内科的な治療を依頼してきたのだ。極秘裏に。
ある意味、かなり責任感のある行動といえる。たしかに政治家としての好自議員も一本気のある男との評価を世間的に得ているがそれは事実だと思える。
積子は再度、沙世未に問う。
「・・・ねえ、満さん亡くなったって聞いたけど、どうしてかしら・・・？」
沙世未は玄関のインターホンを押そうとしていたが、ぎくっとしたように急に立ち止った。積子の方を見上げる。積子はここではじめて沙世未の不安そうな顔を見た。洗脳まみれの意思のない女性の顔からほんの少し、本来の気弱なそしてしつけの厳しい家庭の女の子。積子はたたみかけるように、ただし強制的にならぬようやさしい気遣いのある思いやりをこめて聞く。

「大丈夫よ、沙世未さん・・実はね、好自さんとは私、知り合いなの。満さんが亡くなられた話は・・この話、今朝聞いたばかりでね、差し支えのない範囲でいいのよ。・・・亡くなられて残念だったわね」

沙世未は言おうか言うまいかの表情で逡巡していたが、とうとう口を開いた。

「あれは・・、一昨日の話しですが事故だったんですよ。満さんってヒイロ・ヨカナン様の一番最初の信者さんでヒイロ・ヨカナン様の一番のお気に入りです。だけど彼女はいつでもヒイロ様を独占したかったのです。いつでも、どこでも。

だからお部屋にいつでもヒイロ様についておられました。ヒイロ様に命じられていろいろな実験の手伝いもしていたようです」

「・・・実験？」

「私もよくわからないのです。でもヒイロ様と一緒に奥のお部屋でいろいろなことを実験していると聞いています。でも実験が失敗して彼女がこわれた、とヒイロ様がおっしゃられたのです・・」

「沙世未さん、貴女はその場にはいたのね・・？」

「いえ、満さんが倒れてこのマンションの1階の・・、まさにこのお玄関まで肩をかして送りました。

救急車はヒイロ様が呼ばれたようです。彼女の体はすごく軽いのに、口元と目元が変に重苦しくどんよりとしていました・・。口から泡のようなものも出ていました・・だから、私は本当は肩を貸すのは嫌だったのです。だけどヒイロ様のご命令ですから。

もちろんそれで後でヒイロ様からたっぷりと・・、うふふ・・教えていただきました。いつものような普通の接見ではなく。ああん、今日も楽しみです」

友人が亡くなったというのに、平気で別の信者をかわいがるヒイロ・ヨカナン、それとそれを楽しんだという沙世未を積子はおぞましいと思った。だから満がなくなってわずか数日でも親にお金をねだって彼に会いにいけるのだ。これも洗脳のせいか。

「・・・ねえ、彼女が亡くなったと聞いてどんな気持ち？」
「さあ？ヒイロ様も満さんは壊れた。あいつは結構弱かったと言っていました。だけどお父様がどう出てくるかご心配されていましたわ・・・、あの、志神先生、志神先生はヒイロ様におすがりしたいのでしょ・・・？どうしてそんなことを聞くの」
　積子は薄く笑った。
「そうだったわね。私はヒイロ様のおすがりしたかったのだったわね」
　・・・沙世未はいまや積子を連れてきたことを後悔し始めていた。そして積子を恐れはじめていた。

　積子は思った。救急車の搬送先の受け入れ病院では熟練した医師ならば、ここから送り込まれた好自満は薬物Ｓの常習者だとわかったはずだ。今聞いた限りでは彼女は薬物Ｓの急性中毒になっていて、すでに危ない状態だった。
　多分、救急車が搬送先の病院に到着するまでに彼女は事切れたのではないか。死亡診断者は死因が必ず記載されておかねばならない。医師はどう扱ったのだろうか。
　でもこれは好自満の父たる好自議員が揉み消したのだろう。多分子の推測は当たっているだろう。そして娘を壊されて挙句の果ては亡くなった・・・好自議員の怒りはヒイロ・ヨカナンに向けられ、こうして積子が刺客として差し向けられることになる・・・。
　しにがみつみこ・・積子は請け負った。ヒイロ・ヨカナンを消すために。この男は自分も大嫌いな男だ。精神医学の知識を弄んで人の心中を操作して自分の欲望を満たす男は大嫌いだ。
　そして薬物Ｓ.
　さて、仕事だ。

第１０話

いまや京極沙世未は積子を恐れはじめていた。そもそも精神科医として悩み事があるからヒイロ・ヨカナン様に救ってもらいたいから紹介してといったのはこの志神先生の方からだ。

積子はいぶかしげに自分の顔を眺める沙世未に威厳をもって言う、いや、命令した。

「さ、インターホンを押しなさい」

そう、沙世未は積子を恐れはじめていた。このやさしい精神科医の先生はもしかして母の味方なのか、それとも好時満（こうじみつる）の不審死を調べに来た警察の手先か、どちらにせよ、ヒイロ・ヨカナン様は喜ばれないだろう。

ヒイロ様のご機嫌が悪くなれば私は信者にしていただけなくなってしまう。そうすると私はもうかわいがっていただけなくなる。それは困る。それは悲しい・・。

「どうしたの、私の言うことが聞けないの？お嬢さん・・さ、早く押しなさい」

沙世未は震える指先でインターホンを押す。返事があるより前に積子は後ろを振り返らずに李に言いつける。小声でお経を唱えるように。

自力で1人で部屋に入りなさい。合図はしない。また玄関よりも窓から入っておいで。手段は問わない。警察のことは心配しない。

そして、これで最後。・・眼と鼻をできるだけ保護できるようにしておきなさい。

ぱっと振り返ると李の姿はすでに消えている。同時にインターホンから応答があった。

「はい、沙世未さま」

「そのお声は粟生(あお)さま、ですね。・・ごきげんよう、粟生様」
「ごきげんよう、沙世未さま、あのう、横にいらっしゃるのは・・？」
「ヒイロ様を紹介してと言われましたの・・」
「でも、好自満さんのこともあり、ヒイロ様はご機嫌は・・」
積子は2人のインターホンの会話に割って入る。
「ごきげんよう、粟生さま。私は志神と申します。ヒイロ・ヨカナン様に会いたいです。お金はたくさん用意できます。どうかお願い、御取次なさって」
粟生(あお)さまの様子は不明だ。こちらから彼女の姿はわからない。（でも29歳以下に見えますように・・・画像がやや不透明で不鮮明だときっと20代に見えるだろうと、期待）しばらくインターホンはしばらく無言だった。
それから5分はたったか、ようやくヒイロ・ヨカナンの許可がおりたらしく、「お話をお伺いするだけになりますが、それでもおよろしかったらどうぞ」と返答があった。
積子はもちろんしおらしく「ありがとうございます」と言った。もちろん内心やれやれと思ったのは間違いない。とにかく手間取りたくなかったのだ。これで10何分かの若く見えるように装った積子の努力は報われたことになる。
インターホンが切れると同時に玄関の自動ドアが開いた。ドアすぐ横のホールを横切り、エレベーターで11階まで上がる。
好自議員の情報提供通りだった。

11階のエレベーターから一番端の部屋。それがヒイロ・ヨカナンの部屋だ。別に普通の分譲マンションの一室と変わりはない。
表札もない、特別な飾りもなにもない、ごくごく普通の無味乾燥なマンションの玄関ドア。
そこに再度インターホンを押す。
京極沙世未はもう興奮していた。横に積子がいるのも構わず、「

ああ、ヒイロ様、ヒイロ様・・我、見参いたす。ヒイロ、ヒイロ・ヨカナン様・・・ああああ・・・」

小声であっても彼女の言動は異様だった。こうまでして人をたぶらかす男に積子は心から嫌悪感を抱く。そう、嫌悪感が増せば増すほど、積子はより強い「しにがみつみこ」と言われる殺し屋となるのだ。

積子は今やヒイロ・ヨカナンとの対面を楽しんでいる。

さあ、彼はどうでるだろうか・・・？

第１１話

玄関が開くと、沙世未が先に入り、その次に積子が入る。
分譲マンションで狭い玄関だ。カギを開けた粟生(あお)が出てきて沙世未と初対面の積子に会釈する。そして粟生はいぶかしげに積子を眺めた。遠慮しながらも不審げだ。
ここの信者はすべて今は亡き好時満の勧誘によるものだ。ヒイロ様のご指示に従い、良家の娘しか入信できない誇り高きヒイロ・ヨカナン教の。
だけどこの京極沙世未が連れて来た女は一体何なのか。お金はあるらしい。でも京極沙世未のなんなのか・・。
ヒイロ様は会うだけならいいさ、と一言おっしゃられただけだ。
ヒイロ様は好自満さんを亡くされてからずっと心を落とされている。私はそれが心配だ・・・。

玄関からすでに部屋の温度と湿度は高く暑かった。悪い空気だ。粟生は積子の前を通り抜けていつものとおり玄関を施錠した。
それから沙世未と粟生はお互いに手をあわせて挨拶し、ヒイロ、ヒイロ様、ヒイロ・ヨカナアーン様ぁ、我らぁ、見参、ヒイロ様ぁーーー
と酔っているように唄い出した。
狭いマンションだ。ヒイロ・ヨカナン側からしたらこれで誰が来たかわかるわけだ。
積子は素知らぬ顔で会釈しただけでじろじろと玄関を無遠慮に眺めまわす。そう、入室してしまえばもうこっちのものだし。ここの空気はなるべくすわないように呼吸を浅くゆっくりと、を心がける。唄っている方は、唄うことでよりこの悪い空気を吸い込むわけだ。
これがヒイロ・ヨカナンの自己陶酔と信者の性的興奮を与える前

技の一種となるわけだ。なんて嫌な男だろう。
ひと通り唄い終わると粟生は廊下の先に立って沙世未と積子を案内すべく廊下の先に立って歩く。
マンションの廊下は幅が狭く、また天井が低かった。高級分譲マンションといっても現実はこんなもんだ。
廊下のつきあたりの部屋に入る。沙世未が最初に言った通りの黒いカーテンで覆われた部屋だ。
積子はくんくんと鼻をきかせた。例の重ったるい、そして甘ったるい匂いがもっと強くしてきた。もしくは腐った英吾緋色という腐った男の腐臭、腐った臭いが。
案内にたった粟生も沙世未も積子の行動にとまどったように見つめていた。どう反応してよいのかわからぬのだ。
成人して２０歳も過ぎればよい年だ。なのに、自分たちの根城というべき態度の妖しい闖入者に何も言わない、言えない。もし積子がここの信者ならば、「失礼な態度をとるな」と激怒するだろう。普通はそうだ。
良家の子女と言う昔のイメージ通り、非常事態になっても何も言えない、言うことができない、自分の意見を主張することができない、やさしいたおやかな清純な乙女。現代っ子らしくもない、昔のイメージ通りの「お嬢様。」
それがヒイロ・ヨカナンと名乗る悪辣な精神操縦術を扱う男の狙いなのだ。またそういう女しか扱えない。許せざるをえない積子の大嫌いなタイプの男。
鼻を思い切りクンクン言わせたあげく、積子はティッシュをおもむろに小さく裂いて鼻の穴につめた。粟生、沙世未の2人の案内人は部屋に入るなり、鼻をクンクン言わせてそれから堂々と鼻の穴に白いティッシュを丸めて詰める女に気圧されたように黙り込んだままだ。
積子は鏡で自分の姿は見なかったが多分鼻の穴だけがティッシュで大きく膨らんで変な顔になっているだろう。でもここでは自分が

どう見られようが全然平気だった。それから大きなマスクで鼻と口を覆う。さあ、これで完璧だ。
これで薬物Ｓの影響はもっと少なくなるわけだ。
沙世未も粟生も積子をどう扱ってよいのかわからぬようだ。積子は心の中でため息をついた。
「与しやすいかわいい、そして世間知らずの女の子だこと・・・」

積子は目を細めて２人を眺めた。それから「ねえ、早くヒイロ・ヨカナン様に会いたいわ。あ、これお金、１００万円あるからこれを見せてきてねっ」と粟生の手に押し付ける。
粟生はとりあえずは黙って受け取り、「はあ、・・ただいま、取りついで参ります。でもその前にお荷物を私に預けてください」といった。
積子は当然いやいやの仕草をおどけたように粟生に首を振る。この小さな荷物、バッグの中にはスカルペルや劇薬、シリンジが入っている。普通の女が持つものではない。絶対に渡してなるもんか。
「お荷物？これは大事なものなの、渡せないわ」
粟生は困っていた。どうして行動していいのかわからないのだ。自分の言うことを聞いてくれない他人とは会ったことがないのだ。だからどう対応していいのかわからないのだ。それだけ人間関係には苦労したことがない、ということがわかる。
積子は業を煮やして、それでも丁寧に（ネコ撫で声で）言う。
「さあ、ヒイロ様に会わせていただけるかしら？」
粟生はとうとうお金だけをもったまま、黒いカーテンの一部を開けて退室した。
積子は部屋の中央に立ったまま、バッグを左手で持ち、仁王立ちのままで立っている。バッグはいつでも開けられる体勢だ。
沙世未がたまりかねたように「あの、お座りになりませんか・・ここは座って手を会わせないと・・」と言っても積子は知らない顔をしていた。

そしてバッグを開けて今度はおもむろに黒いサングラスをかけた。これはヒイロ・ヨカナンの大げさな身ぶりに惑わされぬため、催眠術をよけるための準備だ。サングラスのせいで、あたりも全体真っ暗闇の中に入り込んだように思えるがそれも一時だ。我慢できる。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」

とうとう渋い低い男の声がした。積子が思わず感心したほど威厳のある渋い声だ。声に反応して先に黒いカーテンのこの部屋に再び入ってきた粟生、元からいた沙世未は酔っぱらったようになった。

これはヒイロの声に条件反射というべき反応だ。声を聞いただけで感応するように、また快感を得られるように精神操縦されている。

重苦しいかつ暑苦しい部屋の気温があがった。多分ここの空気がもっと悪くなっているはず。

積子の読みは当たっているはずだ。このカーテンのすぐ向こうには薬物Ｓが「あぶられている」はずだからだ。だから積子は鼻の穴の中にティッシュをぎゅっと抑えた。この悪い空気を吸わないために。

そして男、ヒイロ・ヨカナン教の教祖、ヒイロ・ヨカナン。本名英吾緋色本人がとうとう登場した！

「・・・京極沙世未の紹介者よ、私がヒイロ・ヨカナンです。その格好は何ですか？サングラスを取って私の姿を見たら手をあわせなさい！」

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

先手必勝！

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

積子はバッグを開け、スカルペル、メスを取りだした。そしてヒイロ・ヨカナンの肩に向かってぐっさり一直線に刺した。正確には肩の動脈を狙う。もっと正確には右鎖骨下動脈。メスはオペ用の持ち方ではなく、ぐっと握りしめて９０度の角度で狙う。刃先は上。ヒイロは背丈が低いので別に背伸びなどしなくてもすっきりと狙える。ぐっさり差し込むと今度はやや斜め上部に刃先を動かす。差し込むだけではメスは鋭利すぎるのでかえって出血しなくなる。それが狙いだ。メスにはきっちりと筋弛緩剤を塗っている。不意をつかれたヒイロはどっと倒れた。

２人は薬物Ｓの匂いに酔っていたがさすがに信仰する教祖、ヒイロ・ヨカナンの姿に悲鳴をあげた。

同時に黒いカーテンの外にいたらしき信者の娘数人がどっと教祖ヒイロを心配してやってきた。どれもきちんと黒のスーツを着こなしている。

メスをひきぬくと肩から鮮血がほとばしる。動脈血だから脈にあわせて血をふいた。

積子はまったくあわてずに「タオル、」と一言言うと誰かがすぐに清潔なタオルを放り出した。信者の一人だがそこらへんの心理がわからない。積子は内心おもしろがってこれは後で彼女の心理状態を聞いてみようと思った。名前を聞くと彼女は小さい声ながら深見屋敷稽子だとはっきりと名乗る。確か沙世未を勧誘した元同級生だ。「タオル、ありがとうね」というと稽子はとまどったように目をふせた。

タオルはもちろんみるみるうちに血にまみれる。簡単な圧迫止血を試みた。

他の信者たちは積子をとめようとしたが、積子がメスを散らかせると後ろにひいた。彼女達もどうしていいのか、わからないのだ。

第１２話

ヒイロ・ヨカナンにはこの筋弛緩剤はよく効いたようだ。同時に窓が開いた音がして、黒いカーテンがばっと開いた。
李の登場だ。１１階のこの部屋までよく来れたものだ。彼は使える男だな。一瞬だけ李の姿を見たが、どこからか入手したのか、彼は大きなマスクをして大きな眼鏡をかけている。
積子はヒイロから目を離さないまま、李に声をかけた。
「李、カーテンを全部はずす。あぶられているものを今すぐに消す。そして何かの実験しているという部屋を探してそこに何があるか見ておいで！」
カーテンが外されて積子は李が入ってきたまどから外の空気を吸う。サングラスをはずして殺風景な部屋をざっと眺める。絵画も金目のものも何もない部屋だ。隅っこにコンドームの箱が積まれている。
こんなつまらない部屋でつまらない男の思うがままにやられてきて、なんとも思わない哀れな信者達。そしてその洗脳の手口の鮮やかさと怖さを思う。行動心理学者として大成もできただろうになぜこの男はこんなことで満足していたのだろうか。積子は彼の心理に興味があった。
２人の信者、粟生と沙世未はずっと悲鳴をあげている。どう、と倒れた教祖、ヒイロ・ヨカナンは動かない。積子は2人に声をかける。
「大丈夫よ、心配しないで」
声をかけつつ積子はすでにアンプルをカットしてシリンジに詰めていた筋弛緩剤をヒイロの肩の付け根、足の付け根にさらに少しずつ注射する。彼はすぐに殺すわけにはいかない。いろいろと聞くことがあるからだ。
そこへ粟生が泣きながら「やめて、やめてください。ヒイロ様が

おかわいそう！」と積子に言う。積子は今や本性を現してこぶしをグーに握り、粟生の横面をはりとばしてやった。
「バカな娘ね！いいから、この男の化けの皮をはいでやるから、よく見ておいで！」と言い渡した。
粟生の顔からは鼻血が出て、泣きだす。様子を見ていた沙世未も泣きだした。２人でしくしく肩をよせあって泣いている。積子は「バカ娘・・」と舌打ちした。

李がやってきた。
「あぶられていたものは消しました。それと試験管とアルコールランプが大量に見つかりました。この部屋が実験室だと思います。そして、この風邪薬の空き箱が大量にありました」
積子は李の持っていた箱をチラ見して「ね、そこに漢字でふた文字の××という字がない？」
と聞く。李は箱を見て返答する。

「××」ありますよ！！

薬物Ｓの入手先は薬屋で安易に手に入る安価な風邪薬の一種だった。彼のように分析化学の知識があれば××が原材料と明記されている風邪薬から、純粋な××を取り出してから更に薬物Ｓに合成するのは容易なことだ。
積子は李に念のため粟生と沙世未、そしてその他の信者の娘たちをしばるように言いつけ、それから無様に倒れているヒイロ・ヨカナンの姿をとくと見まわした。

ヒイロ・ヨカナン教の教祖こと英吾緋色はまったく不意打ちをくらい、四肢の自由が効かず、もがいている。
肩までかかる総髪で髪自体は美しく艶があっていいものだ。そして肥った身体は上等の和服で身を包んでいる。また体型のことで一

言言わせてもらえるならば好自議員の提供してくれた写真よりももっと醜く肥っていた。和服を着ているので言わば和製のハンプティ・ダンプティといったところか。

ヒイロはもがきつつ2人の信者に声をかける。まだ動けるのか、と思ってもう少し積子は筋弛緩剤を追加した。ヒイロの動きが小さくなった。

「一体君達は何を呼びこんだのだ。早く私を助けなさい！」

発語の方はわざと自由にしゃべるように配慮している。これは積子が英吾緋色に聞きたいことがあるからだ。だが大声を出すようならば小さい声しか出せないようにするために声帯に細工するつもりだった。そのため気管のための鉗子も入れてある。

沙世未と粟生は教祖の声を聞いてなんとかしようとしているが李にベルトで手足をしばられ何もできず、しくしくと泣くばかりだ。

非力な娘に頼る哀れな教祖に積子は、ケッと思い、ヒイロの肥った身体を軽く足先でこづく。

「英吾緋色、私は好自満の父親に頼まれてきた女だよ。お前、その察しもつかないの？アメリカで精神分析学を学んでいたのだろ？え？」

ヒイロ・ヨカナンは自分の本名を言われ、亡くなった好自満の名前を聞いてげえっと声にならない声をあげた。彼はきっと心の中で悔やんでいるに違いない。

満が亡くなったのは薬物Sの扱いが過ぎたからだ。彼女が過剰投与により狂ってしまった。なんとかしようと思ったが彼女は元に戻らなかった。・・彼女が亡くなったのは非常に残念なことだ。

父親が何らかの形で報復するだろうと心の中では思っていたのに、すぐ動かなかった自分の浅慮を悔やんだ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

「あれは事故だったのです。好自さんに言ってください。満さんは私の妻です。大事な私の妻でした。だからこのマンションも貸してくださったのです・・・」

ヒイロは名前も知らないこの女に自分のことをいろいろと言った。女は黙って自分の話を聞いている。サングラスはいつのまにかはずしているが、女はぶすっとしていて表情も読めない。

こうしている間に窓が大きく開かれたのか、新鮮な空気がはいってきた。黒いカーテンもはずされてきた。そしてあの原材料の箱も見破られてしまった。

この女はただものではない。泣き落しや私のような精神操縦は効かないだろう・・。サイキックドライビング、デパターニング・・。だがやってみるだけはやってみる価値はあろう。

ヒイロはできるだけ大きな手振りで話をしたかったが、手足が言うことを効かない。動かない。

多分この女は非力で自分が暴れるのが怖くて軽い筋弛緩剤を自分に注射したのだ。ヒイロもまた精神分析学を学んだ男だから積子の行動をそう読んだ。

しかし亡くなった満のことでただですむはずもない。好自議員をもっと取りこんでおけばよかった、満が死ぬとはまったく思わなかったのでこれは本当に痛かった。

自由は効かない、でも口は動く。話すのは自由だ。ただ全部離せば殺されるかもしれない。この女を見上げれば大きなマスク。透けてみえるが奇妙なことに鼻の穴に大きなティッシュをまるめている。間抜けな姿だが薬物Sの「あぶり」も見込んでいたのだ。これは容

易な相手ではない。しかしなんとかすべきだ。このおんなを処理してこの場を切りぬけるのだ。

第１３話

ところが女は動じない。身ぶり手ぶりができないというのは英吾緋色にとっては羽をもがれた小鳥のようなものだ。
ある程度身体の自由がきければ、こんな女、体力的にもまた精神医学的にもひねりつぶしてやれるのに。英吾緋色はもがきつつ、口は動く、手足は付け根には力は入らぬものの、ある程度動けることを発見し、また負けたわけではないと思った。
ところが・・・。
女は自分の様子をじっと見ると、「まだ動いている・・・情報提供用の画像よりも肥っているから筋弛緩剤の容量を見誤ったじゃないの、もう！」と怒っている。
それからバッグから小さく折りたたんだビニールを広げ手にはめる。ごく薄いもので手の色が透けて見える。手術用の医者が使う手袋だ！ヒイロはぞっとした。
そして女は鋭利なメス？のようなものを口にくわえて、自分の履いている足袋を脱がしている。そしてメスをもつと裸の足の裏からそのメスをぐっさりと刺した。
そしてそのまま抜かれずに、かきまわされた！！
メスで足の裏をかきまわされた！かきまわされた！！

これは痛いというものではない。英吾緋色は悲鳴にならぬ悲鳴をあげ続けた。
「ヒッーーーーーーーーッ・・・」
女はうっすらと嗤う。
「痛い？でも麻酔剤ももうないし、むくっと起きて歩かれちゃ困るし、これでしばらくは動けないわね。やれやれ」とか言う。
英吾緋色は痛覚と戦いながらも女を観察する。どこかに隙はないか、どこかに抜け道はないか・・・。

ああ、痛い痛い痛い・・・でも私はしゃべれる、女は私を殺すつもりはないのだ。この女は私が巨漢で力が強そうなので、それで私に力が出ないよいに何かを注射したのだ。
筋肉をゆるめる何かの薬剤だろう。それならばモノにもよるが、時間がたてば効き目が緩む、最後には元に戻る。今は私に動いたり暴れたりしてほしくないから、こういう行動に出たのだ。
足の裏だって大丈夫だ。命には別条ないはずだ。大丈夫だったら大丈夫だ・・・。
彼女は私を怖がっている、勝機はある。
英吾緋色は痛みを我慢しつつ、あたりを見回す。私のかわいい信者たちが泣いている。手足をしばられて泣いている。みんな喪服のようなスーツだ。この女も喪服のようなスーツだ。
私は黒、深い黒が好きだ。ああ、そしてこういう非常事態でも女の泣き顔や陶酔した顔は何と美しいのだろう。
私はこの信者を守らないといけないが、まずは自分の命をたすけなくてはならない。なんとかしてこの場を切りぬける。
好自満の父親は私を怒っているだろう。そしてその女を派遣した。
しかしこの筋弛緩剤を使用していることから殺すまではしないだろう。殺せるならばとっくに殺しているだろうから。ヒットマンをよこして消音機付き（サイレンサー）の銃器で一発撃てば私は死ぬだろうから。
足の裏の傷も大丈夫。生きてさえいれば私は大丈夫。今はすごく痛いがこの痛み位で人間は死なない。私は大丈夫。私は絶対に大丈夫。私はヒイロ・ヨカナン。絶対主のヒイロ・ヨカナン。だから絶対に大丈夫。
だからこの場を切り抜けるのだ・・。私の力を持っていて切りぬけるのだ・・・。
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」

英吾緋色の目算はまったくもって甘いものだった・・・。
しにがみつみこはまったくもって甘いものではなかったのだ。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」

第１４話

やがて李がカーテンをはずし、積子の邪魔にならぬように隅によけたのを見計らい（ああ、この李と名乗る子は気のきくよい子だこと！）今度は娘達７人を全員、診療所に連れて待っているように命じた。李は「わかりました」と即答した。しばられていた娘達もしばりを解かれてもまだどうしていいのかわからぬようで呆然としている。

積子は李がどうやって娘を従えさせるのか興味があった。李は淡々とした様子で気負いもみじんも感じられない。「さあ、立て」と言っただけだ。当然娘たちは動かない。

李はこの反応は当然だろと言う顔で積子を見る。積子はうなづいた。そりゃそうだ。

７人もいる娘たちを動かすには初対面の李には荷が勝ちすぎる。ただ李ができませんといったり困った表情をしたりしたら即助手失格だと伝えるつもりだったのだ。そういうものに動じないことについては前回の鎮静病院の態度といい合格といったところか。

続いて積子はヒイロに娘をまず保護するから、この近くの建物に移動させたい。だからそのようにしろ、待機しろというように命じさせた。

ヒイロはこのざまだったがこのままではすまされないということがわかったのだろう。またこれ以上みじめな姿を信者たちにさらしたくもなかった。

だからヒイロは積子の提案に応じた。

「この人の言う通りにしなさい。私はあとから行くから」と命じた。あとから行くから、もないだろうとは思うものの、さすがにサイキックドライバーだけあって、娘達は素直に立ちあがった。

「あなたたち、この男性が道案内するから黙ってついて行きなさい。途中で泣きだしたり走ったりしないこと、いいわね？」

黒いスーツ姿の娘たちがぞろぞろと眼鏡姿の李について行くのだ。道行く人たちはきっとあの奇妙な集団はなんだろうと振り返るに違いない。

李は娘たちをせきたてたりすることなく、丁寧な仕草でどうぞ、とばかりいざなった。娘達は教祖ヒイロ・ヨカナンの言う通り黙って静かに部屋を退室する。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」

さて、部屋には英吾緋色と積子の２人だけになった。

そして積子は殺し屋だ。

だがヒイロ・ヨカナンこと、英吾緋色を殺る前に聞くことがあった。

「英吾緋色よ、お前に聞くことがあるよ。時間は取らせない、」

「正直に言えば助けてくれるのか」

「・・警察は関係ない」

「そうか」

積子は正直に言っただけだ。が、苦痛に耐えつつ英吾緋色は自分に都合のよい解釈をしたようだ。彼にとっては非常事態だから何が何でも助かりたいだろう。積子の心を根問いせずに、自分を理解してもらえさえすれば、いいように物事を運ぶとでも考えているのだろう。

概して自分で自分のことを頭がよいと思っている人間は、まわりを都合よく思考するのはよくあることだ。積子はほくそえんだ。英吾緋色も心の中で薬物Ｓの力がなくとも絶対に言い任せてみせてくれるとおもっていた。

「そうだろうな・・こういうことが明るみに出たら、好自議員さんの政治生命に支障が出るだろうし」

「そのとおり。その点についてはあんたのもくろみ通りさ。（だから助かるとは言わないよ）
さて、そもそもなぜ海外のそれもその世界で著名な師を仰いで博士号も取った秀才がなぜこんなチンケな宗教を起こしたのか？」
「全部話すさ・・話そう・・。
私は人助けをしたかった。迷える人々を救いたかった・・だが、その前に自分自身を救いだす必要があった」
「自分自身を救いだす。どういった面で救いだしたかったのか」
「私には私自身ではとても救えない劣等感と言うものが幼いころから自分の心奥底に巣食っていた」

英吾緋色は足の裏の痛みに耐えつつしゃべっていたが、やがて熱のこもった話しぶりになっていく。いつもの自己陶酔の一時がやってきたのだ。私はやれる、きっとやれる。
私は神に近い、神に許された絶対主の人間なのだ。そこらへんの人間と一緒にされたら困るのだ・・・。
だが、今はピンチでこれの場を何としてでも切り抜けたい。
そのためには私が私になったいきさつを聞いてもらわないといけない。手足が自由にならぬ今は言葉で自由にしてもらわないといけない・・そして私に好感をもってもらうのだ・・。
私にはそれができる。絶対主の私には不可能を可能にできる力があるのだ・・。
この女は好自議員の使いだというが、殺すまではいかないだろう。警察にもいかないはずだ・・。娘がああいう死に方をしたのは政治生命にかかわるスキャンダルになるだろうから。だから勝機は必ずある・・。この女にもきっと隙があるはずだ。私はそれができる。私にできないことはないはずだ・・・。

英吾緋色は目を半眼にしてそして低い威厳のある声でしゃべりはじめた。積子は黙って耳をすませて聞き入っている。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」

ヒイロ・ヨカナンこと英吾緋色はごくごく普通の子供だったが、家庭は円満ではなかった。一人っ子。父母はとても厳しかった。物心ついた幼いころから両親は「完璧」を求めたのだ。
しゃべても遊んでもだめ。本は両親が選んだものならば、読んでもＯＫ．お客様がいらしたらちゃんとあいさつ。笑ってはダメ。
ヒイロは全部両親に従った。そうしないと愛してもらえないから。学校にあがると今度は成績や素行での完璧を求める。言わば子供らしくない子供になった。当然クラスメートとは折り合いが悪い。秀才、勉強家。
幼いヒイロはがんばったのだ・・・。
だけど、がんばればがんばるほど、両親はぼくを愛さずさらに上をいくがんばりを求める。これ以上完璧にできないのに、完璧さを求める。
「そう。ぼくは愛してもらえない子供だった。だけどあるときに両親が海外の仕事上の事故で２人とも亡くなったんだ。私を縛り付ける両親の存在が皆無になった！
私は自由になったのだ。
私の輝ける人生はその時からはじまった。そう、時に１８歳。すでにアメリカにいたぼくは大学を自由に選んだ。
今までぼくはあやつり人形だったたから今度は他人をあやつりたくなったのだ。
いいだろう？それぐらいしても、いいだろう？
サイキックドライビング。これは過去ＣＩＡが精神科医に依頼してやらせていた洗脳手段だ。私はこれを学んでこの道のエキスパートになり、世の中を席巻したかった。特に女性を。若く綺麗でお金のある女性を。

意のままにあやつり思うがままにあつかいたかった。
しかし大学で学位は取れたものの、就職先がなかった。私の希望はＣＩＡや警察機関、もしくはＮＡＳＡ等の公的機関の心理捜査官だ。だが、どこも私を雇ってくれなかった。
そもそも教授すら私を推薦してくれない。なぜか？私がグリーンカードを取得したものの、外国人だから、ではない。それは」
積子はおせっかいにも最後まで言わせなかった。
「教授はあなたのその犯罪性志向とサディスト気質をわかっていたのでは？
心理テストもあったはず。そりゃ公的機関に推薦はできないわね～」
ヒイロは積子に目を向けた。怒ったのだ。両親がこの世にいない現在、自分自身は何物にも惑わされない絶対主になったはずなのだ。
「私が何者かも知らないで！きさま、後悔するぞ」
「何が全知全能よ。薬の力を借りないと女を落とせないなんて。心理的操作を使わないと女を自由にできないなんて。自分で男性的な魅力なしといってるのとおんなじよね～。女達もバカだわ。良家の子女？意のままに金を持ってこさせる？ひっかかったのはバカ娘ばかり・・ふふふ。
好自満（こうじみつる）を死なせたのは残念だったわね。でもあんたは、遅かれ早かれこういう運命になったはず」
「くそっ・・早く私を離せ。自由にさせろ」
「無理ね。私はサイキックドライビングはしないけど、一応精神科医なんでね」
「・・！医者だと。
・・なんと、お前が、医者だと・・」
「もう話しあいしても無駄だし、これから罪をつぐなってもらうわね～」
積子は刺しっぱなしにしておいた、スカルペル・メスをヒイロの足の裏から引き抜いた。ヒイロの悲鳴が再びあがる。

「ほほほ・・」

第15話

次いで積子はヒイロの袴の帯を解く。袴をおろして男性器をむき出しにした。
「なにをするんだ！」
「・・・う～ん、思っていたよりは小さいサイズだわね。これも内なるコンプレックスを刺激した故、薬を使って女を意のままにした理由かもね？」
「何を失敬な！私自身の魅力はな・・！」
「魅力と言うより、無力。かな、ほほほほほ・・！」
積子は男性器にぺっとつばをはきそしてペニスを引っ張った。できるだけ、細く、長く・・。
ぎりぎりにまでのばす。ヒイロは足とはまた全く違う痛みに苦痛の声をあげた。積子は容赦しない。
そして、ぎりぎりまでのばしたそれをメスで根元からざっくり切った。

ヒイロからつんざくような悲鳴があがる。
大きく口をあいた中に素早く積子は手を入れて、今度は舌の一部を切り取った。そしてそばにあったタオルで簡単に圧迫止血をし傷口にすばやく止血剤の液体を塗布する。ヒイロは顔をふって大きくもがくが肩全体筋弛緩剤が効き、動かない。
「もう弛緩剤がないから顔にはうてない。もっとたくさん持ってきたらよかったわ・・あれは体重で用量が決まるのであんたがこんなに豚としっていたらな～もっと沢山打ってあげたのに、そしてそんなに苦しまなくてもよかったのに」

ヒイロの悲鳴はとぎれないのでタオルをはずし、メスをはなさず、口中の大出血の中そのまま手探りでヒイロののどのおくをついてや

った。
ヒイロの声がとぎれた。
今度は、
ぶふううーーぶふううううーーーーぶぶうふうううううーーといううめき声だけになる。
また下半身から便臭がした。便をもらしたのだ。多分尿も。男性器切断面が血液で染まって見えないが尿臭もするから。
積子はヒイロの声を冷静に聞いた。そしてだんだん声が出なくなったのを見届ける。ヒイロの声がかすれて聞こえなくなるまでじっとしていた。
ヒイロは気絶しそうでまだ気絶していない。ＯＫ、ＯＫ．それで、ＯＫ．
そしておもむろに次の動作に移る。

そこへさきほど切り取った男性器の一部を口の中に入れてやり、今度は丁寧に口を閉じてやった。ホッチキスがあったらもっと丁寧にとめてやるだろう。縫合糸でも持ってきたらよかったかな？と積子は首をかしげた。積子の上半身はすでにヒイロのせいで血まみれだが、幸い黒いスーツなのであんまり目立たない。
それからヒイロの眼球をメスを垂直にさし、まぶたごとついてやる。まずは左目から。
「ぶち」という音とともに眼球が一度に落ちくぼむ。中ではじめて液がこぼれたのだろう。房水が出たのだ。それからメスを引き抜いて次なる右目に同じことをした。ＯＫ，ＯＫ．それでＯＫ．
ヒイロの眼球とおぼしきあたりが落ちくぼんで一気に老けたようになった。ＯＫ，ＯＫ．それでＯＫ．
眼球がぺしゃんこになったに違いない。ふふふ・・。

ヒイロはそれでも頭を激しく左右にふってもがいている。このままでは薬が切れてしまうかもしれない。這いながらでも外で出られ

ると困るわ。火事場の馬鹿力ってあるからねえ・・、そう怖れた積子は今度はメスを足先にもっていき、足の指を子指から順番にざっくり根元から切り落とす。

１つ、２つ、３つ・・・やはり親指はちょっと切りにくいわね～

１０本とも丁寧に切り落とした後は、かかとも斜めに切り落としておき、最後の仕上げに土踏まずの全面も切り刻んでおいた。これで間違っても立つことは不可能だ。

ヒイロは動けず、首だけ左右に激しく振っている。眼球もつぶされ、もはや人間の顔はしていない。

積子は立ちあがった。仕上げにかかるのだ。

奥の部屋に入って薬物Ｓをあぶるのに必要なオイルをもってきた。大びんが目立つ所にあったため、積子は大喜びでヒイロのなくなった男性器のあったあたりからはじめ、首と目に流しこんでやる。

鼻と口の部分はわざと避けておく。だってオイルで窒息させるとあっさり死ぬかもしれないもん。それは困る。できるだけ苦しむようにという依頼人の希望を叶えてやらないとね・・。

ヒイロはまだもがいている。すでに目は見えないし、口もきけない。手足も動かず、もはや人間ではなく食肉の塊が服をきているようだ。そこへ積子はそーっとライターをつけた。一瞬で炎がヒイロ・ヨカナンこと英吾緋色を包む。そう、彼は苦しみながら焼死するのだ。

足早にマンションの部屋を玄関先から堂々とでる。玄関先にはスーツの上半身だけ脱ぐのを忘れない。スーツを脱いでもわざと黒いブラウスを着ているのでヒイロの汚れた血液は目立たない。そうそう、手術用の透明手袋もだ。血濡れだったが、手袋をはずすとなんでもない。そのまま玄関にポイ。

エレベーターで１階までおりたところに、遠くから煙だ、火事だ！という声が聞こえた。

「ま、反応が早いコト」
積子はつぶやいて自動ドアを開けてマンションを去る。マンションへ向かう消防車をしり目にまた、火事の野次馬たちと反対方向に悠々と立ち去り、歩いて自分の診療所に戻る。

第１６話

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」

火事は幸いボヤで収まったようだ。そして新聞記事にはボヤというのは小さく出たが、死人が出たとか薬物Ｓのことは１行たりともかかれていなかった。また英吾緋色の名前も出てこない。
　積子は依頼を依頼通りこなしたことになる。
　今回の後始末は依頼人がすることになっていたから積子は心置きなく仕事にかかれたといってもよいだろう。

　以下は後日談になる。
信者７人のうち、６人は積子の努力で洗脳は解けた。特に深見屋敷稽子は１度だけの診療であっさりと解けた。驚いたことに稽子はヒイロ・ヨカナンの魅力は薬物Ｓにあることを薄々は察していたらしい。彼女は積子に口止めをしたのち、実は過去ヒイロに会う以前から薬物Ｓの味は知っていたと告白した。
　それと見た目とは違い男性経験が豊富であったことも洗脳を解くのが容易にしたといってもよいだろう。
　それとは正反対だったのが、粟生(あお)だ。この子には正直、手を焼いた。最初の積子の行動を邪魔したせいで積子に殴られた粟生。
　プライドの高い高貴な生まれの粟生だったので、積子を許せない。それゆえ積子はまったく信頼(ラポール)を作れず、また当然治療のきっかけも作れない。
　こればっかりは、ほかの医師に紹介状を持たせて洗脳と薬物Ｓの依存をとってほしいと頼むわけにはいかないので、積子は初めて患者に「ごめんなさい、申し訳ありませんでした」とあやまった。
　卑屈に丁寧にあやまってはじめて粟生の敵対意識を解いてから、

治療にかかったことを白状しておこう。
　最後に京極沙世未。
　母親も診療所の留守番をしておいて、李がぞろぞろと娘以下7人をひきつれて戻ってきたときは驚愕していたが、母親への説明には苦労した。どうやっても納得しないのだ。
　薬物を使用されて洗脳されていたことまでは告げたが、ヒイロ・ヨカナンに会いたいといって聞かない。母親がこんなふうで積子が沙世未の治療に診察室から退室するようにいっても聞かない。
　大家に対して脅すような行動はつつしみたかったのだが、こればかりは参った。
　ただ家名に傷がつくことと、騒ぐと京極家のみならず、他の家にも迷惑がかかることを飲み込ませるに成功するとやれやれと思った。
　沙世未は親がかりだったが、今まで母親に頼りきりだった娘が初めて反抗して宗教に走ったのだ。今後の母娘の関係に亀裂が入るかもしれない。が、とりあえずは洗脳を解いておく。
　今後の家族関係はまた別次元の話になる。積子はそこまでは責任がもてない。
　娘たちの家族への説明は好自議員がどうやってやったのかは不明だが、積子への問い合わせは皆無だった。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」

　最後の最後に、李。
　もし李の訪問がなく、積子はたった1人で仕事をこなすことになったら、こんなに早く英吾緋色を始末できなかっただろうと思う。が、自分は1人だけでもやれていたはずだ。
　それでも李の存在は今回は有り難かった。積子は正直にその感情

を認める。また私は年老いてきたので、残念ながら助手が必要になったのか、とまでも思った。だが、本気で思っているわけではない。積子はもう殺しはできないと思ったら、きっぱりとこの稼業をやめるつもりだからだ。

李には礼をいっておいた。李はあっさりと自分の自慢や疲れを口にだすこともなく、うなづいただけだった。

積子は李に、アドバイスした。

まず自分探しをしておいで。と。

戸籍がないことは今後もし本当に医師を目指すならば、医師になれないことになる。

「大事なことだし、自分と言うものの存在を確認しておいで。あなたはまったく賢い子だとは思うけれど、とにかく中学卒業のままではいけない。

高校卒業の資格、つまり大検を取得しないと話がはじまらないしね。

とりあえず、そうしておいてくれる？

それと絵図さんとの交渉は私はしないからね。これにはくぎを刺しておきますけれどね・・・。

李は黙って最後まで積子の言うことを聞いてから「じゃあ、自分のことで一区切りがついたら、またきます」と言った。

李は積子に一礼して帰って行った。彼は積子の診療所にまるまる２４時間いたが、疲れも何も見せずに帰って行く。金どころか不平不満や積子への質問もなかった。

もしかしたら李は「可能性のある人間」かもしれない。この稼業に向いている人間かもしれない。

積子は李を見送りもしなかったが、誰もいなくなった診療所に鍵をかけるときに初めて「あの子の下の名前を聞いておけばよかったかな？」と思った。

ヒイ

ロ・ヨカナン教の項、完。

第1話（前書き）

老人介護施設は建てても建てても追いつかない状況。小説なので、大変誇張してかいていますが、ある得ない話ではありませぬ。積子はどうでるでしょうか・・・。

第1話

積子の今度の仕事はT県東部の要介護の老人施設「あんじん」の所長の案新という女である。

今回の依頼をこなすのはは簡単だろうと思った。案新、フルネームで言うと案新毛伊佐（あんじんけいさ）という女である。所長兼婦長。そう、看護師の資格をもっている。年は５４歳。「あんじん」という施設の表には出てこないが会長が父親の案新恵二（あんじんけいじ）８４歳。元医師。これにも問題があるが、とりあえず案新毛伊佐をなんとか消してくれということだ。

依頼の原因はもちろん恨みによる。依頼人は積子の昔の知人になる。彼女は母親を施設に殺されたのだ。母親の名前は、すでに故人となっているが、鳥居超個（とりいちょうこ）。実際に依頼したのはその娘の鳥居超三井（とりいちょうみい）だ。「あんじん」を告発したのは娘の鳥居超三井。彼女は積子を知っている。積子は彼女の性格を知っている。

だから積子はこの依頼を引き受けた。

「あんじん」これは老人介護施設。収容人数は８０名。やや規模が大きいといえる。

またただの老人施設ではない。いわゆる高級な、という触れ込みである。介護保険のみで利用しようとする人はもちろん相手にされない。入居一時金６０００万円より。

全個室、もしくは夫婦個室のみ。１カ月の介護料金は介護保険とは別に食事代や人件費等を入れて月々に５０万円必要だ。もちろん、

万一の時の治療費は別である。
これだけお金がかかるのはまず、立地がよい。眼下に国立公園の海の景観が望める風光明媚な場所にある。自然豊かでかつ冷暖房完備。
そして介護が手厚い。医師や看護師の常駐はもちろんだ。食事も嗜好にあわせてなんでも調理してもらえる。基本的な給食は一緒でも必ず刻み食であることや、朝昼夕フルーツを添えてという人、また葉巻を好む人の好みにも応じれる。
また主に自分で食事やトイレに行けない要介護４から５の老人達も収容ｏｋだ。一度入れば終末まで親身に世話をすることをうたっている。
安くはない。しかし、持っていた土地を手放してでも入居を希望する人が後をたたない。ある権威ある雑誌が特集を組み、手厚い介護施設のランキングでベスト１０に入ったことも大きいだろう。

老人社会を反映し、この地方でもどんな重篤な疾患を持つ老人でも手厚く介護してくれる施設が少ないせいもあって、こんなに高価であっても常時７０人ほどの順番待ちがあるという。
近年は介護、トイレの介助もしくは大人用紙おむつの差し替え、小、大便の始末、そして食事の介助、食べられない人は栄養食は流動食、ゼリー食、それでも行けない人は鼻からチューブを入れての介助になる。またマーゲンチューブもしくは胃ろうといって胃から直接チューブを介しての栄養食になったりもする。こういう要介護者は自分でつばやたんを飲み込めたり吐きだすこともできないので、注意が必要になる。
たんが絡んだ状態でそれが続くと体力にも差しさわりができるし、気管に詰まってしまうと肺炎になってしまう状態になる。それはただでさえ、体力のない要介護の老人にとっては致命的だ。
そういう場合は常時状態に気をつけて必要に応じて、たんを取るチューブを鼻からもしくは口腔から入れて吸引しないといけない。

この状態の老人を看るには介護士ではなくヘルパーさんでもない、医療行為にあたる介護が多いので必然的に看護師の資格が必要になる。軽い介護、最低限1人でトイレに行ける、1人で食事ができる人はヘルパーだけでも大丈夫、そういう福祉施設はデイケアも含めてはいりやすいが、上記にあげたような看護にあたるケアが必要な老人を見てくれる施設は現時点の日本では非常に枠が少ないのが現状である。

先にいった入所を待つ老人が70人と言うのは決して大げさではない。老人介護施設はどこも満員である。ごくまれに空き部屋が目立つ施設は何か理由、不具合があるといっても差し支えないであろう。

大都市では200人待ちと言うところもある。老人だから入所を待たずに亡くなる老人もいるだろうが、家族が家庭で看ていくには限度がある。老人を見る子供はちょうど年齢からいって働き盛り、老人の子供の子供、つまり孫を育てるのに、学費などがいろいろと入用な年齢だ。

これを踏まえて介護福祉のマーケットは増えていく一方だが、世間の多種多様の要望にはついて言っているとはいいがたい現況だ。

今回のターゲットの安新の経営する老人介護施設「あんじん」は私立だが、高級感並びに手厚い介護を唄っている。さて、経営者の案新(あんじん)親子はどういうことで人の恨みをかったのか？またどういう過程でしにがみつみこ、こと志神積子が依頼を引き受けるにいたったのか、説明せねばなるまい。

依頼人の鳥居超三井(とりいちょうみい)は親一人、子1人の家庭だった。そして鳥居自身は看護師だった。大学を卒業し正看護師の資格を得るとすぐに地元の大学付属病院に入局しそのまま定年まで働き続けた女だ。辞

令によっては何年かごとに院内で異動があり、それこそ外来から病棟までマンモス病院をくまなくまわった。
だからこそ老人介護施設「あんじん」の華やかかつ手厚いをうたい文句で入居を誘う陰で行われていたダークさをみやぶれたのかもしれない。
しかしそれがはっきりと判明したのは自分の親、鳥居超個（とりいちょうこ）が亡くなったときだった・・・。
鳥居超三井、積子に話す。

第2話

以下は積子への依頼人、鳥居超三井（とりいちょうみい）の話しの続きです。

老人介護施設「あんこく」は一見清潔で簡易でスタッフの皆さんはやさしく親切で居心地のよいように見えました。場所も母、鳥居（とりい）超個（ちょうこ）の昔独身の頃に住んでいたところに近く、見学してすぐにここに入りたい、と決めたほどです。偶然ですが入所見学の折、入所者に昔の知り合いの笹元うをさんご夫婦がいたことも大きかったと思います。

笹元うをさんは母の古くからのつきあいで女学生の同級生だったと申していました。笹元さんを認めるなり、ふたりは学生に戻ったようにわあわあきゃあきゃあ言っていました。私の母も、うをさんも、２人とも８４歳。笹元さんは介護認定４の車いす生活。脳梗塞の後遺症で右手右足が麻痺していたようです。でも頭の方は全然呆けていず食事もトイレも軽い介助が必要でしたが、しっかりしておられました。

一方母の方も似たようなものですが、６０才代から患っていたリューマチがひどくなり、手が鉤爪状態にまがり、背骨も曲がり見た目がひどい状態でしたが、呆けず大変にしっかりしていました。

２人とも女学生時代とはうってかわった状態だったと思いますが、やはり若い時に出会い、培った友情は多少外見がお婆さんになり外見が病的に変化したとしてもすぐにわかるものですね。

見るなり2人とも一気に１０歳は若返ったようでした。幸い言語の方は年齢と病歴の割にしっかりしていたので不自由そうに見える歩き方とつたない左手だけの車いすの操作でゆっくりと駆け寄りあとは、機関銃のようにしゃべりまくっていました。

笹元さんのご主人の方は残念ながら、もう呆けて寝たきりになっ

た状態でお部屋から出られない状態だといい、私と母はこのときは会いませんでしたが。

昔のおしゃべりに夢中になっている母と笹元うをさんを置いて私は、スタッフとゆっくりと施設内を見学させていただきました。設立して5年。施設として新しい方には入りますがそれでも国道沿いで高台に建ち、全面は海、背面は山にごく近いという自然の立地の良さ。眼下は国立公園というのもうなづけます。景観はすごくよく、私もここで暮らせたらいいなあ、と思ったほどでした。

加えて要介護の胃ろう枠、鼻注枠がこの規模にしては多目にあるということで入居希望者が大変に多いと聞きました。

実際スタッフの詰所には看護師姿の人が１０人はいたでしょうか。夜間当直はさすがに2，3人になるということでしたが、私自身も長年看護師をしていたのでどこも人員募集に苦労しているのはわかっていますので特に気になることはありませんでした。

なによりこの施設の代表である案新毛伊佐（あんじんけいさ）が元看護師というのも個人的に親近感を覚え、かつスタッフから夜中に伝言があればこの施設のすぐ隣の敷地に住んでいてすぐに駆けつけてくれるというのも大きかったです。

それならば当直の看護師の手が足らないときでも、代表の案新さんがすぐに出てきてくれるなら看護師複数体制ということになりますし、安心もいたしました。

なぜなら私は母一人、子1人の家庭で定年退職したとはいえ、まだ今の病院に嘱託として働いていますし、付属の看護学校の講師もしています。また憚りながらこのたび4月から看護学校の校長と地区保護司、某議員の後援会長にもなりなお一層忙しくなり、母の介護に携わる時間がなくなったということになりました。

子供の立場としては母よりも仕事優先という形になり私も心苦しいのですが、まだまだ働きたいということと母の介護に今後もお金がいるし、私は未婚のままこの年になりましたので老後の資金もできるだけためておきたいという心づもりもありました。

・・・入所待ちが７０人越と言う言葉に驚きもしましたが、私はその私設代表の案新毛伊佐に出会い、話しを詳細に伺ったうえで、また当の母が古い友人に出会ってあんなに喜んでいるということもあって即決同様に決めました。ただ入所待ちがどのくらい時間がかかるのかということです。

鳥居超三井は話しを続けた。彼女は看護師現役時代が長く、また高いマネジメント能力を要求される大病院の総婦長をしていただけあって、話し方に無駄がなく積子は好感をもった。

鳥居の話しは続く。

施設見学の間、一部の入居者に元気がないことが気になったという。また個室が多いので食堂や談話室に極端に人が少ないことも。要介護で寝たきりの人も結構多いと聞いていたのでその時は不自然に思わなかったという。

見学の後、最後に理事長の部屋に入り、案新毛伊佐と対面したという。隣に理事長で毛伊佐の父という恵二もいた。毛伊佐は私が看護師と言うことでざっくばらんに親しみを持って接してくれたという。少なくともその時は。

やはり高額の入居料を取るだけあって理事長の部屋は豪華なしつらえだった。ちょっと豪華すぎないか？というちょっと英国の貴族が所有するマナーハウスを思わせるぜいたくさだっという。

毛伊佐は超三井と同じ年。しかも看護師。まず自分の経歴を簡単に名乗った後、入居者の家族に政治家や元華族、医者、経営者等裕

福な人が多いことをあげて自慢した。
超三井はそういうことには関心があまりなく、有り難がらなかったことにもしかしたら毛伊佐が不快を感じたのかもしれないと今から思えばそうかも、と思うと言う。また私がまだ第一線で働いていることにも。歪んだ考えのようですが、同じようなキャリアで同じ年頃の女性同士というのは、甘い友情と言うよりも牽制しあうというか、変に生臭い感情がお互いに湧くものかもしれませんね。でもこれは今から思えば、の話です。
初対面の毛伊佐には私は好感をもっていましたので。全然そういうことは思いも、思いつきもしませんでしたから。
それに母親をもう入居させる気でいたので少々あせっていたのかもしれません。私は熱にかかったようにぜひこの施設で世話にならせたい、と頭を下げました。

「70人待ちは困る。私は仕事のこともあり、すぐにでもこの施設に母を入れたい」
そう思って率直に代表の安新毛伊佐に聞きました。安新はもったいぶった様子で、今すぐに入れたければ1000万円を余分に入居料に上乗せしてくれたら階下に1つ個室が開いているのですぐに入れます、と応じてきました。
それでは入居時の総額7000万円の支払いとなります。
地獄の沙汰も金次第は本当です。
私はこれもありかと思って快諾しました。お金の問題はなんとかなると思いまして・・・。父が残した土地を売れば入居もできます。現に私はそうしました。
でも母にとっては地獄への道になってしまい・・そして亡くなってしまいました・・・。

この「あんじん」に入れなければもっと長生きしたでしょう。私の浅はかな振る舞いで母の寿命を縮めてしまいました。

鳥居超三井の話しは続く・・・。

第3話

鳥居超三井（とりいちょうみい）の話しの続きです。

私は母のために、父が遺してくれた土地を売りお金を作りました。そして「あんじん」に入居一時金＋早めに入居させていただく権利金として７０００万円を収めました。

ローンはくみたくなかったので小切手にして一括で支払いました。双方で重要事項説明書にサインをし、当方が７０００万円の額面が書かれた領収書を受け取った時点で、契約が成立。

案新（あんじん）経営者親子はにこにこして「これであなたのお母様はこの名誉ある、あんじん、の一員になられたのです。おめでとうございます」と言った。

ついで「ここは誰もが知っている有名人の肉親が多く引き取られています。また元一流企業の役員や元華族といった人々もいらっしゃいます。こういう人たちと暮らせるのは大変名誉なことかと思いますよ」

鳥居超三井はその尊大なものの言い方にこちらを見下げているのかとも思って一瞬むっとしたが、相手が本気で言っているのがわかり思わず母親と顔を見合わせたことを覚えている。

そして階下のスタッフ達や一部の入居者とお茶をいただく。笹本さんご夫婦の部屋にもお邪魔させてもらい、先日お会いできなかった笹本さんのご主人とも対面。ただ、本人は痴呆がすすんでいるのと、脳梗塞の後遺症のため要介護５の寝た切りの状態になっていた。もちろん挨拶しても反応なし。

笹本うをさんはこのご主人を心から愛しているらしく、生きてくれて、私のそばにいてくれる。私は幸せです。と言う。

入居後に毎日、こうしてご一緒にお茶をいただきましょうね、といってその日は退室する。母は入居日をそれは楽しみにしていました。

そして入居日がすぐにやってきた。

それが、私達親子にとっては、地獄の幕開けになりました・・。

第４話

老人介護施設「あんじん」

母はそれはそれは入居日を楽しみにしていました。日付も覚えています。１１月１日。その日はちょうど私の誕生日ですし。前日の夜、１０月３１日、私と母とで外食し、前祝いをしました。そして母はこれからの快適な生活を約束された「あんじん」が楽しみでしかたがないようでした。

「あんじん」は結構、母親の友人の間でも有名らしく、あそこに入れて羨ましい等と言われたようです。それも楽しみを増幅してくれたようです・・。

入居日。

１１月１日。

入居に当たり、母を連れて「鳥居です」と窓口受付で言うと、スタッフがとんできてドアを開けてくれます。そして大勢のスタッフ達があっという間に玄関に集まり、なんと２列に勢ぞろいして「鳥居さん、お待ちしておりました！」と笑顔で挨拶してくれました。まるで老舗の旅館がお客の出迎えをするようです。私達は驚きかつうれしく思いました。

スタッフは若い人たちが多く、頼もしい感じがしました。荷物も率先して持って行ってくれました。

母の住まう部屋は２階の部屋。眺めは岩場ばかりの光景で、はっきり言ってよいとは思えませんが、　寝るだけと思えば平気です。食事の場所は自由といいますから、最上階の国立公園の海浜を眺めながらでもいいし、友人ができればその友人達とご一緒に食べたらいいだけの話ですし。

部屋の広さは縦横４０ｍぐらいか。トイレも車いすの人でもはい

れるように設計してあり、さすがに７０００万円も取るだけのことはあると思っていました。
母もキングサイズのふかふかのベッドにすわり高い天井をながめて満足げです。高価な買い物でしたがここ「あんじん」に決めてよかったと思いました。
そして荷物のチェックがありました。持ってきたものの目録を作成するというのです。こんなものか、と思いましたが、金目のものをなくしたなどといってトラブルになったことがある、というので納得しました。
亡き父が母に買ってやった思い出の宝石などがありましたが全部見せました。あちらはデジカメでみんな記録していました。もちろんその場で返却されました。金庫などはないので自己責任で、もし不安ならスタッフ窓口に金庫があるので預かり証と引き替えにあずかるサービスがあるといいました。
次にＰＣなど通信機器のチェックです。ＰＣができる場所などは決まっているのでなどと言われましたが、母はパソコンはもっていないというとＰＣなしと記録されて終わりでした。リューマチのせいで右手が不自由なのはあちらもわかっていたので根問いされずに終わり、です。今から思えばそれが幸いしました。実は母は左手でも食事ができます。元々両手利きなので。ただし、文字は筆圧が弱く書きません。だから入居申し込みに必要な書き込みはすべて私がやりました。
だから施設側もこの人は左手で食事などはできても文字がかけない、という思い込みも勝手にしてくれたのが幸いでした。
そして大変重要な事・・。実はその時は忘れていたのですがごく薄いｉ－ｐｏｄを持っていたのです。文庫本にはさまれていたのであちらも気づかれなかったのです。
左手では時間がかかりますが操作ができたのです。実は・・。
それで内情がわかったのです。
繰り返しますが、母は見た目は慢性関節リウマチが進行している

外見でしたが、中身は非常にしっかりしていましたもの。だが、それがあだとなり殺されてしまいました。

でもその時は本当に申し出るのは忘れていたのです。パソコンや携帯電話は？といわれてとっさに持ってないと返事したのは事実ですもの。だからそのほかもなにももってきてない、というと納得されました。

そのあと、洗面用具や着替えなどの置き場所等の説明がありました。スタッフが3人ついてくれ、何くれとなく世話してくれます。娘の私の出番がないくらいでした。

3人ともその日は若い娘さんばかりでなごやかかつにぎやかなひと時でした。

落ち着いた頃、母がまずみんなに挨拶したいが一番最初に笹本うをさんご夫婦に会いたいと言うと、3人のスタッフ達の顔がこわばりました。

なんと笹本さんのだんなさんがきのう亡くなったそうです。母も私もびっくりしました。

「・・あの方はもともと痴呆があり、寝たきりの状態だったのです。梗塞が再々発してしまい、今度の発作は即死に近い状態で医師も手のほどこしようがなかったそうです・・」

私達はなんといってよいかわかりませんでした。

「じゃあ、今日がお通夜ですよね？私なんとおなぐさめしてよいやら・・」

母が言いますと「笹本さんのご希望で密葬になるようです。もうご家族、といってもお子さんがいないので遠縁にあたる方が今朝引き取りにこられたそうですよ」

「まあ、お子さんがいらっしゃらないことは知っていましたが、それはあまり急なことで・・・」

「はあ、でもこういうことはどうしてもあります。何分ここは介護

施設ですし・・」
一番年かさに見える女性がそう口ごもった。
母はショックをうけて整理している手をとめるし、私は笹本さんご夫婦に母の入居の挨拶として持ってきた夫婦湯呑をどうしようかと思いあぐねてしまいました。
とりあえずはお悔やみを、と部屋を訪ねようにもスタッフからは「今はそっとしておいてあげてください」と言われて母も私もその日は会えずしまいでした。

母の入居日前日に笹本さんのご主人が亡くなられたことは本当に残念でした。このハプニングは入居にあたってのうきうき気分はふっとんでしまいましたが、みんな年寄ですもの、いずれは死ぬ身だし、こういうことは８０人近くも収容されているので起こりうるのは当然だろうと思います。
長年看護師をしていたこの目でみても入居された方々は８０代以上ばかり。また痴呆がすすんで無表情になっておられるかたもちらと見ました。介護認定２，３は軽い方で５の人は個室から出れないでしょうし。だから仕方がないよ、とも思いました。
子供として母も長生きしてほしいのは当然ですが、やはりいずれは死に分かれるわけです。その現実を見た、とも思いました。

ただその「現実」がこんなに早く「人為的」になされようとは・・・！
私は案新毛伊佐を許せません・・。
こんなことがまかりとおるとは・・、絶対に許せません。

鳥居超三井の話しはまだ続きます・・。

第４話（後書き）

著者追記：介護認定ですが現時点では要介護１から５まであり、数字が大きくなればなるほど介護が必要。という認識でお願いします。（「５」の人はほぼ寝たきりの人ですね・・。）読むにあたってあまり必要ないですがごくわずかの興味を持たれる方に。なお介護福祉施設や保健施設等種類がいっぱいありますがこちらに出てくるのはかなりアバウトで療養型介護付き老人専門マンションとでも思ってくださったらいいです。

第5話

私は結局笹本さんには会わないままでしたが、母の部屋の両隣の人に挨拶して帰宅しました。
右も左の人も女性で年は母と同じくらい。もちろん、個室です。2人とも身なりも身ぎれいできちんとされています。右の人は少し痴呆があるようで、ぼうっとされていますが、左の人は昔教師をしていたとかで大変しっかりした人でした。大木ゆうがさんと名乗られました。息子さんにすすめられてこちらに滞在してもう半年になるそうです。笑顔がすてきで現役時代はさぞやよい先生だったのでは？大木さん。この人なら母の新しい友人になってくれるでしょう。
私はスタッフさん達にも何度も頭を下げ、老人施設「あんじん」を後にしました。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」
以下は母からぽつぽつときたメールからの話しです。
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

持ち物調査時には言わなかったＩＰＯＤからのメール。母は文庫本の中にこれを言うのを忘れ、スタッフに申し出ようとしたらしいですが、さっそく遊びに来た大木ゆうがさんにスタッフにこれを持っていることを黙っているように、言わないように、助言されたそうです。
メールができるならきっと家族に言うことができるかもしれないから、万一施設「あんじん」側とトラブルになることを考えて言わないように、と重ねて言ったらしいのです。
そして充電も用心を重ねて見つからないようにすることも。

クローゼットは元気ならめったにスタッフもチェックにこないから小さなソケットがあるからそこで充電した方がよいなどと細かい注意を受けたそうです。
母は驚きましたが毎日部屋に遊びに来る大木ゆうがさんの話しはもっともっと驚くことばかりでした。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

母がメールができる入居者だということは今から思えばよかったのか、悪かったのか・・。「あんじん」のスタッフや施設側にもわかりませんでした。ある時点までは・・。

まず入居に持ち込んだ持ち物の整理が一段落ついたあとは同じ階下の住民やスタッフ、案新毛伊佐さんが主催者となって夕食時に歓迎会をしてくださったそうです。
夕食も大きなダイニングがあるが、個室で食べたい人は1人で食べるなどと自由がきくようです。でも習慣的に新人歓迎会のときには個室から出れる人はみんな出てくるそうで、ベッドに寝たままでもスタッフに命じてベッドに寝たままでダイニングに来た人もあったそうです。
母は大層喜び、杖をつきつき1人1人に頭を下げて「よろしくお願いします」「どうぞ仲良くしてください」と頼んでまわったそうです。
わりと社交的な性格なので、普通の施設なら別にトラブルにもならずにうまくいったのではないでしょうか・・・。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」

@母からのメールその1@11月1日午後11時

超三井！今夜は楽しかった。みんな私を歓迎してくれた。でもこのメールは消灯時間に書いてるから内緒。なんだか学生時代に戻ったみたい。でもメールは内緒にした方がいいって。だから返事はいいよ。音がしないように設定しなおしといたけど。じゃあね。時々メールするね。

第6話

@母からのメールその2@11月3日午前3時

超三井。昨日、喪服がないので困ったけど、黒っぽい服をなんとか探して大木ゆうがさんと一緒に笹本さんのお悔やみにいきました。でも笹本さんに会えませんでした。部屋の前にはスタッフが2名立っています。ご主人を亡くされたショックで体調をくずされたとか。また夫婦個室を開けないといけないので部屋を変わると言われました。

私と大木さんは笹本さんの部屋を立ち去り難く、立ちつくしていると、部屋の中から案新さんが看護師姿で出てきました。安新さんは私とうをさんの関係を尋ねられました。昔からの友人と言うと舌打ちをされたのでえっと思いました。大木ゆうがさんの様子が変でした。またメールします。

@母からのメールその3@11月4日午後11時45分

超三井。昨日は祝日で結構面会のお客さんがきました。あなたは仕事で大変だろうけど、今度遊びに来てね。ここの食事には満足しています。毎晩ダイニングに出て食事を取ろうと思います。せっかく施設に入ったのに1人で食べるのはさみしいもの。スタッフが笹本うをさんを連れてきました。笹本さんが私に会いたいと言ったそうです。私達みんなでお悔やみを言いました。ご主人を亡くされてショックで高熱が出たそうです。無理もありません。うをさん、げっそりとやつれておいでした。

スタッフはずっとつきっきりでした。右手右足がご不自由なので親身に食事介助をしてもらっていました。でも私達には頭を下げた

きりで口をきいてもらえずしまいでした。部屋も夫婦個室から普通の個室にかわったそうです。私と同じ2階ですが、一番すみの小さい部屋になったそうです。

それも本人からではなく、スタッフさんから聞きました。スタッフはうをさんにつききりですが、親身に介護しているようにみえ、実際そうなのですが私達としゃべらせまいとしているようにも受け取れます。だってすぐに熱がまた上がるので帰りましょうとかいって、本人の返答を待たずさっさと車いすの方向を変えて部屋に戻らせましたもの。うをさん、ずっと無言で涙を流しておいでした。

ご主人を亡くされたので無理もないけれど、それ以外にも何かあるようで私は心配です。

@母からのメールその４@１１月７日午後１１時４０分

超三井。ここは驚くべき場所です。ここは毎日午前中にデイといって折り紙をしたり唄ったり遊んだりする時間があります。広間にいろいろな人とおしゃべりができました。少し痴呆のある人もいますがしっかりした人は私の財産状況を細かく「必要以上」に聞きました。どうしてだろうと思ってると「ここはお金次第なのよ。幸い私は息子達がしっかりしていますから、大丈夫ですけど。笹本さんは・・」と言いました。スタッフが見回りに来る時があるので、またメールします。だって、危険だから・・・！

@母からのメールその５@１１月９日午後１１時５５分

笹本さんは高熱のためずっと案新さんがつきっきりで看病していただいているそうです。ここの経営者の案新さんの父親も医師姿で時々入室しています。私は心配で部屋の前で案新さんに伺ったら「こ

の間会わせてあげたじゃないの。彼女はしゃべれない状態だから」と嫌そうな顔をされてまたまたショックを受けました。大木さんは私を見て「案新さんに逆らっちゃダメ」と忠告しました。メールの返事はいいです。これたらきてください。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」

私はその週の日曜日に「あんじん」に母に面会をしてきました。母は元気でした。私は笹本さんに会いたい、母の昔からの友人で私が小さいころからかわいがっていただいたので、と言うと笹本さんの部屋に通されました。前に入った夫婦個室とは違い２階の隅のえらく狭い部屋です。窓もありません。看病用の部屋？にしても狭すぎる。びっくりしました。笹本さんへの面会は看護師姿の案新さん立ちあいの上でした。部屋にマスク、手袋白衣をつけて入室するように言われました。母は入室できないそうです。

「かぜだと思いますが何分高熱ですし、うつるといけないから。娘さんの方は看護師と言うから会わせます」

　なんとおしつけがましい言い方をするのでしょうか？こちらは入居にあたり７０００万円もの大金を支払った方ですよ？むっとしましたが大人しく指示に従い白衣を着て入室しました。

　笹本うをさんはげっそりとやつれていました。私は一目見てこれはただ事じゃない・・と思いました

。笹本さんは口が聞けない状態で入居前にお会いしたころと別人のやつれようでした。マスクで目しか見えなかったですが私がわかったのかしきりにモノを言おうとされます。

　何を言っているのかわからないので、近寄ろうとすると案新さんに止められました。でも止められる前にうをさんが力を振り絞って言った言葉はわかりました・・・。

「たすけて・・・わたしは・・ころされる・・・・・・」
「えっ」
思わず声をあげましたが、案新さんは高熱による錯乱です、と言っただけです。理由はわかりましたがでも・・・と思いました。うをさんの眼には恐怖しか移っていませんでした。
麻痺した右手は動きませんが左手がしきりに動いてシーツをつかみ、はなし、つかんでいます。何かを必死に言おうとしているのがわかります。
振り返ると安新さんが「もういいでしょう？治療に差しさわりがありますので退室してください」と言いました。ものすごい目つきでした。治療と言うにしては点滴もモニターも何もついていません。直感的に変だと思いました。どこか、というのではなく何かが、です。
案新さんの態度に臆することなく、私は「この状態ではここでは治療できないでしょう？提携している病院はないのか」と聞くと何と返事は「笹本さんの息子さんは破産したとかで仕送りが2カ月ないのです。連絡も取れないし、ご主人のご遺体は仕方なく遠縁の方に引き取ってもらった。だから転院など費用がかさむことはできない」と言いました。言ってから一部失言だと彼女ははっとしたようでした。
そしてものすごい顔で私をにらみました。
私はこれからの前途多難を思いました。
ダイニングで待ちかねていた母と大木さん、笹本うをさんの入居時からのご友人達はどうだったと口々に聞かれましたが私は答えることができませんでした。
スタッフがお茶を入れて「どうぞ」と言ったその時に別のスタッフがダイニングにかけこんできてそのスタッフに「笹本さん、たった今亡くなられました」とだけ言いました。居合わせた母達はわっと泣き崩れました。大木さんはじっとしていました。

スタッフは二人して笹本さんの部屋に走って行ったようです。残った私達は呆然としていました。
大木さんは「・・人が亡くなるとこんな感じです。特に身寄りがないとか、お金がない人は、ね」と言いました。どういう意味がたずねるとそれきり答えませんでした。しつこくたずねると涙を１つこぼして「あなた、私を殺されるようにするおつもり？なの？」と言われ大変にショックを受けました。
入居して１カ月もたたないのに、こんなにすてきなダイニング、すてきなお部屋に住んでいるのに「地獄のような施設」の実態に私は足を踏み入れたのです・・・
７０００万円も出したのに、私は地獄の施設に母を入れてしまったのです・・・。

第7話

再度母よりのメールその６

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「

１１月１１日午後１１時４５分

超三井。大木さんや笹本さんのお友達から笹本さんの大体のあらましの話し聞きました。ご主人が４か月前に脳梗塞の再々発を起こされ本当に寝たきりになったとき、いきなり食事代や介護代が毎月２人分合わせて９５万円に跳ね上がったそうで、支払をどうしようかと相談を受けていたそうです。９５万とはすごい金額です。聞けば夜間の呼び出しコールは１回につき３０００円。夜間のおむつ取り換え代や介護割増代金があるそうで、うをさん一人ではご主人の介護がまったくできないのでどうしてもコールしないと介護できません。

　息子さんの事業がうまくいかずその月の支払いを待ってくれと頼むと案新さんの態度が激変したそうで、ひどいことを言ったそうです。うをさん、すごく泣いていたそうです。かわいそうに・・。私はその話を聞いて自分ももらった約款を老眼鏡をかけて仔細にみましたが一番小さい文字で一番下の方に確かに介護認定級が上がればコール代や介護料金設定がかわることがあります、と書いてありました・・。

　超三井。私の食事代などは月３５万円ぐらいといってましたね？ティッシュなどの消耗品は別途請求とありますがこの「別途」がこわいです。ああ、だれか身まわりのスタッフが来そうです。私はまだ聴力の方は大丈夫でよかった。ティッシュ、それとトイレットペーパーも。今度来た時もってきてね。なるべく安くあげたいから。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」」

母よりのメールその7

11月14日午後10時40分

今日は大荒れです。海はしけで大荒れです。波の音が高くちょっと怖いです。朝からみんなでダイニングでおしゃべりしていました。安新さんが自慢していた通り、こちらの入居者はみなお金持ちで地位のある人たちの親でした。元華族という人にも会いました。一番のお金持ちは何と言っても平豪さんでしょう。あの平豪財閥の婦人です。こんなところでまさか会うとは思いませんでした。平豪さんはお歳は90代後半だそうですが、気さくなとても良い人です。「あんじん」の最上階のお部屋にお住まいで、案新さんの事務所の隣なんですって。だから特別な待遇をしてもらっているみたい。平豪さん、光りモノがお好きとかで、10本の指に全部すごい宝石をしています。でもこんなに年取っていてはみんな半分棺桶に足をつっこんでるのも一緒です。反対に、元いた自分の地位をひけらかす男性が数人いましたがあわれな感じです。だって昔国会議員で4期務め議会長をしていた人がいます。それでもあとできくと子供が4人、孫が7人もいるのに誰も見舞いにこないんですって。いばるばっかり。あとはいかに自分がお金持ちでっていう話し。このように自慢話をする人はいますがほとんどはきさくないい人です。私はさりげなく

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

母よりのメールその8

１１月１５日午前０時１０分

超三井。さっきはいきなり言葉をきってごめんね。巡回でこれを見つかるのを恐れています。続きを描きます。私はさりげなくうをさんのことを聞きました。それと毎月支払っている会費を。そうするとやはりお金持ちは違います。息子や娘まかせなので知らないって。大木さん一人だけが言いました。うちは息子が愚痴りますのでね。「お母さん、ここ高いね。入居時６０００万円の上、毎月食事代などで６０万円払っているよ。自動引き落としだからなかなか気付かないけど月によっても金額が違うし、お母さん、ぼくは大丈夫だけど貧乏な人は困るよね」って。息子はお金に細かいのでもっと安いところにしたらよかった。長生きするのも迷惑がかかるって言われるのよって笑っていらっしゃいました。だから笹本さんご夫婦の毎月９５万円というのもあながちうそではないと思います。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」

鳥居超三井は母からのメールでいろいろなことを知った。月末に届く請求書を恐れていたが超三井の母はまだコールしてスタッフをあれして、これしてと言わなくともトイレも食事も一人でできる。老人用介護パンツ等の消耗品も不要です。だから食事代だけの３０万円ほどですんだという。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」

・・・私は意を決して仕事を後回しにして１１月１６日に母をたずねました。こちらは我が家から遠いので片道３時間かかります。

景観は確かにいいけれど交通不便が悪いのは困りますね・・。
母に会いましたがとても喜んでくれました。笹本さんご夫婦が入居後まもなくあいついで亡くなられたのは残念でしたがお友達がたくさんできたようです。またデイケアで作ったという折り紙細工のツルなどがお部屋にたくさん置いてありいろいろと楽しんでいるようで私もほっとしました。
案新さんにも会いました。安新さんがたまたまダイニングにいたのです。挨拶しました。彼女は1人の老人を親身に食事介助していました。さすがに現役看護師だけあって手慣れた様子で無駄な動きもなく、車いすの人にこぼさず口の中に食事を入れてやっていました。
はたから見ればとても笹本うをさんの殺されるや助けて、と言う言葉はやはり高熱による錯乱だったのでしょう。私も案新さんもきさくに言葉をかわし「鳥居さんはこちらにすぐなじんでたくさんのご友人ができましたよ。楽しそうにしておられこちらもうれしいです」とおっしゃってくれました。
私は笹本さんの臨終の様子と彼女の舌打ちはいまだに忘れられませんがやはりここは1つ大人になって「ありがとうございます、感謝しています」と頭を下げました。

ところが・・。
食事介護が終わった後、ちょっとした出来事がありました。
1人の男性の入居者が部屋から杖をついて出てこられ、ダイニングにいた私と案新さんを認めるなり、こちらにつかつかと歩み寄ってこられました。そしてその男性は案新さんを指さして「私の宝石類と権利書を返せ！」と叫びました。
案新さんはあわてず「糯(もち)さん、まあ、落ち着いてください。ちゃんとお預かりしていますよ。うちの金庫にきちんと預かっていますよ」
糯(もち)さんとおっしゃる方は90歳と後から知りました。元某有名私

立学園の理事長をされていたそうです。
杖をつきながらですが、すごい勢いで案新さんにくってかかります。案新さんは本当に落ち着いて私達もてっきり、糯さんの方が認知症にかかっていて、何かをなくしても人のせいにする、というたぐいのトラブルだろうと思っていました。
案新さんは「じゃあ、私の部屋に今から行きましょう、部屋に金庫がありますからね」と糯さんの背中に手をまわして2人で連れて行きました。糯さんはまだ興奮しておられて、「私宛の手紙が届かぬ、届いても返事もなんだか変だということで、息子の方に先方から連絡があったので、わかったんだ。あんた、勝手に人の持ち物や、パソコンをのぞいて財産や仕事状況を把握して好きなことをしているだろう！こっちの信用を逆手にとりやがって！私を誰だと思っている！こんな目にあわせて、私だけではなく、息子も黙っちゃいないぞ！」
糯さんは興奮してわめきながら、案新さんに背中をまわされて介助されつつも罵倒していました。ダイニングを出てすぐにもう一人の若い看護師らしき人が介助の手伝いにやってきました。
糯さんと安新さんと看護師。この3人の姿が見えなくなっても罵倒の声はこのダイニングまで響いていましたが、ふと声が途切れました。
「あれ？」と私が思う間もなく、ダイニングでひそひそ声が充満します。
「案新さん糯さんのこと、何かしたのでは？」
「支払いか何かで揉めていたのも知っているわよ・・」
「何かを渋ると預かられている金目のものが、質流れのように、売り飛ばされる話は聞いたことがあるわ」
「そうそう、何年か前に支払いをしていた子供さんが蒸発して支払いがたまった人が・・・」
ひそひそひそ・・・
他の人々は平気でそういう話しをしゃべっていました。本来お金

に困らないひと達なので、全くの他人ごとのようです。母の顔色が悪くなっていました。
私は急に声が途切れたのが妙に気になってそっとダイニングを出て廊下を曲がりました。廊下を曲がりすぐホールになりエレベーターがあります。
最上階の案新さんの事務所と言うか部屋がありますが、そこにランプがついていました。なんだ、エレベーターに3人とも載ったので声が途切れたのだ、と思いましたがエレベータの前に何か水のようなものが濡れています。
さっきの若い看護師がホールにはいつくばって、急いでなにかを拭きとっていました。顔をあげて私がいるのに気付くとあきらかに動揺していました。
長年看護師をしていたので、何かひっかかるものがありました。臭いをかぐと尿・・・でした。まだ暖かいです。看護師は「糯さんが、ちょっと洩らされたのです・・」とだけ言って私の足元まで拭きにきました。
「手伝いましょうか・・・」
「いえ、結構です。ダイニングにお戻りいただけますか・・？」
彼女は明らかに動揺していました。ふるえてもいます。なぜだろうか・・・？
糯さんが興奮のあまり失禁した。これは間違いないでしょう。しかし、何かがひっかかります。何かが変です。
そう、エレベータの扉の上部に何気なく目をやってあ、と思いました。何か白いものがはさまっています。
人間の爪・・でした。白く濁っていますが確かに爪です。血液は流れていません。
「ちょっと・・・」
その看護師は立ちあがってさっと爪を認めて抜き取りました。そして青い顔をして「糯さんは怪我をされたのです。あのう、他の人がびっくりされますので・・これはご内密に・・」とだけかすれる

ような小さな声で言ったかと思うと、返事をする間もなく雑巾と一緒に爪も走るようにして持って行きました。

少しの間に何かがあったのです。糯さんに・・・。

私は少し迷いましたが、最上階の案新さんの部屋に行こうとエレベータのボタンを押しました。ボタンは反応しません。階下の数字の一番下に「専用」の文字ランプがついています。

「専用」・・・施設や病院の関係者ならばわかるでしょう。ベッドごと人を乗せたりするとき。また他人を乗せられないとき、死人等・・・「専用」キーがあれば、その間他の人はエレベーターは使用不可です。何かが起こりつつある。私は階段をのぼりました。1階、2階・・・。

日ごろの運動不足がたたり3階の踊り場で息切れがしましたがそんなことはいってられません。がんばりました。

第8話

そしてやっと最上階の安新さんの部屋に到着。最上階は経営者の案新さんと超ＶＩＰにあたる居住者1名だけが住んでいます。母はメールで一度だけ部屋に入れてもらったといっていましたが、多分それがその人の部屋なのでしょう。平豪財閥総帥の妻、平豪婦人だそうです。

母がいる部屋とは景観が全く違い、国立公園の勇壮な開眼の光景が一面に広がり、部屋は倍以上もひろく待遇も破格で何かあればの案新コールというのがあり、コールすればすぐ案新さん自身が来てくれるといういわば貴人の扱いだそうです。

案新さんの事務所は彼女の個人的な部屋だそうで（本来の福祉事務所というのは1階の玄関口にある）一番端にありました。

ふかふかのじゅうたん仕様の廊下のおかげで私の足音もさほど響かず安新さんの部屋の前まできました。長いじゅうたんの毛にはさまり、なにか水のようなものが出ています。糯さんの尿だろうか？いや、違う。血だ。血痕です・・。

大変だ・・。だが、自制をしてそっと部屋に近寄りました。分厚い扉に耳を寄せます。部屋の中から2人の声が聞こえます。

「私を殺すつもりか、案新っ！この性悪女めが！私の金を返せ！！管理とは、口先ばっかりで私が呆けたなど言い訳をしおって！返せ、金、返せ！」

「糯さん、落ち着いて。私はただ管理させていただいているだけです。他の人の金品もそうですよ。でも、お金の支払いができない人や痴呆がすすんでわからない人のためにある程度処分するのは本当です。

だからあのように言いがかりめいたことをいうのは非常に心外です」

「私をこういうめにあわせて、何が管理だ。何が心外だ。この悪魔めが！」
「だからこれも治療の一環ですってば。糯さん・・・」
「離せ！離せ！痛い、痛い、・・離せ！ぎゃああっ」

声がそれきり途絶えました。何かがこの部屋におこっているのです。私は柄にもなく足がふるえました。長い看護師生活ではそれはそれはいろいろなことがありました。
だけど今この部屋の中でおきているのは非常事態です。私は中に入らないといけない、と思いつつ入れませんでした。母のこと、今後のこと、何より危険だから入るなという内なる自分からの警告・・。

耳を寄せ手を扉につけていましたが、よりによって手がすべり、ノブに軽くでしたがぶつかりました。
カチャ・・というごく小さな音がしてしまいました。
「誰っ？」
鋭い案新の声がしました。
「しまった」
私はすぐに身をひるがえして逃げました。エレベータをはさんで一番奥のドアが開いています。私は無我夢中でそこへ逃げ込みました。分厚いじゅうたんが私の味方をしてくれ、足音は消してくれました。私はそれで助かったのです。
奥のドアに逃げ込んで、間一髪、安新側のドアが開いたようです。私はベッドに寝ている人に構わず、近寄り窓の横の床まで垂れ下がっている長いカーテンの後ろに隠れました。
案新が早足でこの部屋にやってきました！ノックもせずに入ります！当然カーテンの中にいる私は息をひそめます。
「案新です。・・平豪様、お邪魔させていただきます。たったいま、ここに誰かきませんでしたか・・？」
ベッドの中で寝ていたとおぼしき人が起き上がったようです。

「いいえ、案新。誰もきませんよ・・」
「そうですか、それでは失礼いたします」
「案新。お茶でもいかが？」
「いいえ、ただいま、取りこんでいますので、後ほど・・」
「じゃあ、これから昼寝をするから、ドアを閉めておいてくださる？」
「かしこまりました。平豪さま。ごゆっくりお眠りくださいませ」
ドアが閉まりました。私はカーテンの中で安堵のため息をつきました。この部屋の平豪様、とおっしゃる方がどういうわけか私を助けてくださったのです！
　私はなんとか助かったようです。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」

　平豪様とおっしゃる方は「もう大丈夫だから出ていらっしゃい」とひそやかな声で呼びかけられ、私はおずおずとカーテンから出てきました。
　平豪様は女性で長い白髪頭をきちんと結い、私のような素人目でも高価そうな白っぽい紬を着て起き上がっておられました。シーツをつかんだ１０本の指には燦然と宝石が輝いています。
　平豪様は口をすぼめて、微笑みました。
「で、あなたはどなたなの？ちょっと、そこに座って説明をしてくださる？」
「は、はあ・・すみません。私は鳥居と申します。鳥居超個の娘で、鳥居超三井と申します」
「ああ、鳥居さん、ね。あなたのお母様、いい人ね。お友達になったわよ」
「ありがとうございます」
「案新の部屋でまたトラブルがあったのね。彼女の顔は真っ赤だっ

たもの。
彼女、怒るとまるで赤鬼のようになるのよ。おかしいでしょ？
鳥居さん、よかったらお話を聞かせてご覧」
平豪様は見かけは本当にいくつかわからないようなおばあちゃんでしたが（後で聞いたら９８歳だとか！）身なりはきちんとしているし、全然呆けていない。目は輝いています。耳も多少は遠いようですが聞こえます。何よりもこの人ならば大丈夫と思い、私は最初から話をしました。
平豪様はベッドに起き上がり、豪華な椅子に座った私を注視し、ふんふんと黙って聞いていました。ふかふかの大きなベッドには大きな地模様のあるイスラム様のどっしりとした掛け布団がかかり、大きな窓。国立公園の勇壮な景色。それを背にしてしっかりと座る老婆。
見事な一枚絵のようでしたが、私はその時はわかりませんでした。ただただ自分が見聞したことを話しました。
平豪様は終わりまで聞くとにこっとして「まあ、案新ってつまり、そういう人なのよ」のさらっと一言だけの感想ですまされてしまい、拍子抜けしました。
「あのう、平豪様？それでは過去そういうことがいくつも？」
「だってここは福祉施設でもなんでもありませんのよ。お金儲けのために私達の面倒を見ているのよ。お金が払えなかったら、困るのだし、ある程度は仕方がないのでは？」
「はあ、でも糯さん、怪我をしているようだし、あの様子では拷問かと思いますが・・」
「拷問ねえ・・・あの糯さんは確かに昔は学園経営の仕事をこなしながらもかつ凄腕のディーラーでしたが最近の株相場や為替はご存じのように無茶苦茶な展開ですからね。波に乗り切れず、負けたんでしょ。あの通り糯さんは勝気で怒りんぼで昔から安新さんとうまくいってなかったからね。いや、糯さんはどことも仲良くなれない

かな？ふふふ」
「あの、それで最初に預かった金品を処分を・・」
「経営者として当然でしょ。何も貴女が騒ぐこともないわ」
どうも平豪様とは論点がずれてしまいます。
「でも、それで怪我？をさせたり、本人が承知してないのにお金をしょぶんしたり、これって違法になりませんか？」
「お金がないから仕方がないわ？じゃあ、この話は終わりにしましょう」

平豪様はにっこりとしてそれからベッドに横たわりました。もしかしたら演技かもしれないし、呆けてないようでも呆けているのかもしれない。私の味方でもない。でも助けてくれた・・。
私は混乱した頭のまま、平豪様に頭を下げてお礼を申して部屋を去りました。
そしてまた階段を使って1階のダイニングまで行きました。

第9話

1階のダイニング。やっとの思いで戻ると母はさっきの場所にお友達とすわっていました。顔色が青いです。

「お母さん・・」

「超三井、どこへ行っていたの？心配したわよ」

「ああ、ちょっと気分が悪くなったのでトイレにいたわ」

もっと長い間最上階にいたと思ってましたが、時間にしてまだ15分くらいしかたっていません。時間の感覚って本当に不思議です。2時間ぐらいはたったかと思いましたが・・。

ダイニングからホールは見えませんがスタッフが「大先生、が到着されました」と言いました。みると医師姿の案新恵二です。何から大きなかばんをもっています。ダイニングでちょっと挨拶したあと、ホールの方に向かって行きました。

「彼が医師姿で来るときは誰かを診断するためよ。それで死亡診断書を書くのよ」

大木ゆうがさんがぽつりと言いました。そしてダイニングにいた皆さんがしーんと押し黙り、私と母は顔を見合わせました。

やがて、糯さんが急病で亡くなられたと発表されました。皆は騒然としていましたが、みんなさきほどの糯さんの怒りとは関連性があるのは明白なのですが、それを誰も口にはだしませんでした。

私もそうです・・。口にはできませんでした・・・。

その時に私は母を連れて帰ればよかったのです。７０００万円のことは気にせず連れて帰ればよかった・・。

私は母のことが気がかりでしたが、仕事も気がかりだったのです。

やがて夕食の時間がせまり、スタッフに挨拶して母を残して帰宅しました。

以下は母よりのメールです。最後のメールです・・・。

」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」

11月17日午前0時10分

超三井。怖い話を聞きました。大木さんが私の部屋でなら話すというので、教えてもらいました。ここはお金がなくなると、預けた金品を処分するのは本当のようです。そして処分するものも何もかもなくなると、本人自身が処分されるのです・・。こんなことって信じられますか？殺人じゃないの？痴呆がすすんで何も分からなくなって人もそうなんですって。親族にうるさそうな人がいない人が狙われるのですって。怖いです。でもそんなことがまかりとおるなんて。警察沙汰にはどうしてならないのかしら。超三井、ねえ私は

」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」

母からのメールがそれきり途切れました。時刻を見ると夜の12時半をまわっています。何か胸騒ぎがします。何か嫌な予感がします。

電話をかけて母と話しがしたい・・。でも今かけるといくらなんでも失礼です。その躊躇が後の後悔につながるとは・・！

とにかく朝の7時ぐらいまでは待ってよう、そう思いました。私はほとんど眠れず、家でぼうっとしていました。いつのまにか空が白み、7時になるのを待って介護施設「あんじん」に電話をかけました。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」

１１月１８日　午前7時。鳥居超三井から「あんじん」への電話

もしもし。
・・・鳥居です、母がきのう帰り際にちょっと気分が悪いといっていたので、心配になりまして・・朝早く申し訳ないですが母と直接話しができませんか・・・？
そうお願いすると、しつけの行き届いたスタッフは早朝の電話にも気を悪くしたふうも見られず、少々お待ちくださいませ、といって待機メロディーをきかせてくれました。
ところがなかなか母との電話が切り変わりません。
電話のメロディーはエーデルワイスでした。この曲はいい曲ですが、この場合はいらいらして全然いいとは思いませんでした。
やっと切り変わったかと思うと、なんと案新自身が出てきました。
「鳥居さん？ああ、今そちらに電話をしようと思ったところです。お母様、具合が昨夜遅く急に具合が悪くなられたので・・」
私は思わず言葉をさえぎってしまいました。
「ええっ、母の身に何かあったのですか？」
案新はあきらかに口調を変えています。
「ちょっと、あなた？私よりずっとキャリアが上の看護師さんなんでしょ？だったら落ち着いて私の話を最後まで聞いてくださるかしら？」
「・・・」
なんという毒を含んだ嫌みの言葉でしょうか？あちらの方こそ、こちらの心情を理解していないのでは？でも私は黙って案新のいうことに耳を傾けました。
「あのですね、貴女のお母様はね、スタッフの身周りのときにぱっ

と何かを隠されたのでね。もし何か危ないものでもお持ちでしたらいけませんでしょ。決まりですし。それでその隠したものをご提出願ったわけです」

ＩＰＯＤを持っていたのが発見されたのです。

「通信機器は最初に申し出ていただきたかったわね。だってこういう痴呆のご老人も多い施設ですし、金品類や通信トラブルを避けるために記録もしていたのに、こういうことをなさって・・・。

しかもチェックのために、メールを開けてみたらこちらの悪口ばかり書いてありますし・・・。

私どもは親身になってお世話させていただいているのに、入所して間もないのに、こういうことをされると本当に裏切られたようで悲しゅうございますわねえ・・。

それでですね、スタッフから夜間その連絡があり、私自身お母様に事情を説明し誤解を解いてもらうべくゆっくり話をしようとしたとたんに、急に気分が悪くなったとおっしゃいまして」

私はもう我慢できず「それで母はどうなったんですか？何をしたんですか？」と叫んでしまいました。　案新はとうとう本性を現し「人聞きの悪いことをまたおっしゃいますこと！あのですね、きのうの糯さんは確かに亡くなられましたが、もともと心臓に持病をもっていて発作をおこしていつ亡くなられるか不思議でもない状態でしたのよ。だからあの時も私がおちついていただこうと努力していたのに、どういうわけか鳥居さんのように、悪く取る人もいて非常に残念に思います。

こういう呆けた人も多い施設で疑心暗鬼やものを取った取られたという被害妄想を持つ人も多うございます。それを鵜呑みにされてご家族に訴えるとは、非常識もいいところですわ！」

「案新さん、わかりました、わかりましたから！それで母はどうなったのか、早く教えてくださいっ！！」

すると・・・案新は信じられないことに含み笑いをしました。ふ

ふっと小さく・・・1回限りでしたが舌打ちのときと一緒です。聞き間違いかと思いますがそうではありません。決して、決してそうではありません。

「案新さん！母はどうしていますか！私そちらに行った方がいいですか？」

「いえ、・・・お母様は大丈夫ですよ。寝ておられます。ただＩＰＯＤを取り上げるときに抵抗されてね、あのとおり関節リウマチを患っておいでですので、無理な姿勢を取られたのです。腰の骨にひびがはいったようです。

でも、大丈夫ですよ、あの、鳥居さん？人の話は最後まで聞いてくださいね。私の父は医師ですからすぐに適切な鎮痛薬を注射して湿布も貼っています。今は痛がっていませんからご安心ください。

ＭＲＩ？どうしてえ？うちは介護施設だからそんなものはありませんわ？病院へはまた折をみて連れて行きますからどうぞご安心くださいね？

え？今から行く？見舞いに？

かまいませんわ。ご家族ですもの。またお母様も安心なさるでしょうし、ぜひお顔を見せてあげてくださいね。お待ち申し上げておりますわ。

それでは失礼いたガチャッ！！

最後のセリフは最後まで言わず電話を切られました。一方的に話されてこちらの問いかけには答えず電話を切られたのです。

もう一度話しをしようかとも思いましたが「あんじん」に直接出向いて母の様子を見た方が一番早いと思いました。

なので、昨日の今日でしたが、仕事はすべてキャンセルして、私は母に会うために出かけました。

7時半に急いで支度しても不便な場所ですので着いたのは11時前でした。ええ、私の自家用車でいきました。タクシーでいったらもうもう何万円かかるやら。

「あんじん」の玄関までは小高い山になっていますから、車がくるのは玄関口のスタッフ事務室から見えているはずです。以前まではこちらの車を認めるやいなや、ばっとスタッフの誰かが出迎えてくれていたのに、誰も出てきません。駐車場も平日でもあり、通いのスタッフらしい車の他には誰も止まっていません。

私は車を止めると小走りになって「あんじん」の玄関へ出向きます。

収容されている老人達で痴呆、徘徊癖のあるものが多いため、施設の玄関は施錠してあります。それをわかっていたのでインターホンで「鳥居です。母の様子を見に来ました。開けてください」と言いました。

なのに、誰も返事しません。どうしたのでしょう？

私はインターホンの上部にあるカメラをいらいらしつつ眺めていました。何度もボタンを押しましたが応答なし。とうとう持っていた携帯電話で目の前の「あんじん」に連絡しました。

ベル1回でいつものとおり「はい、お電話ありがとうございます。施設あんじん、でございます」と若い女性の声がします。

「鳥居です。インターホンの前にいますがどなたも出てこられません。開けていただけますか？」

「はあ、わかりました。少々お待ちくださいね・・」

見覚えのあるスタッフの若い女性がやっと出てきました。

「遅くなりましてすみません。少々取り込みがありまして・・」

「母は大丈夫ですか？」

「腰を痛められたとかで、今案新医師に診ていただいているようです。でも大丈夫ですわ」

「部屋にはいませんか？」

「部屋にいます。ご案内しますね」

彼女は先に立っていきました。私は彼女を追い越していきたい衝動もありましたがなんとか我慢して大人しくついて歩きました。

母の部屋の前には大木ゆうがさんやここで知り合った友人達が数人立っていました。みんな心配そうな顔をしています。
大木さんは私の顔を認めるとさっと顔を伏せました。
「・・みなさん、こんにちは。きのうの今日ですが、母の具合が悪いようで」
言葉はしまいまで出てきませんでした。案新毛伊佐とその父安新医師が部屋から出てきたからです。

第9話（後書き）

セコム管理の一時入居金2億円の老人施設が話題になりました。こちらでも超高級と名付けてしまったが、現実はもっと高額のようです。

第１０話

母の個室からこの施設「あんじん」の経営者親子が２人とも出てきました。
私は案新たちに聞きました。
「・・鳥居の娘です。母に会いに来ました」
２人は私を無言でじろりと見つめます。
案新毛伊佐の顔色は赤くなっていました。彼女は怒ると赤鬼のように顔が赤くなるのよ・・。昨日会ったばかりで助けてくれた平豪婦人の笑い声を思い出しました。
（赤鬼・・。安新毛伊佐は鬼・・。）

とりあえず自分を押さえて「急いできました。母の容体は？」
案新はまだ私に返答しません。母の部屋の前に出て私の他に母を心配して出て来た入居者を眺めました。
「鳥居超個さんは、ちょっと寝ておられます。念のため救急車を呼びましたので、もう少々お待ちくださいね」
「お母さんっ！」
私は思わず部屋の中に駆け寄ろうとすると、案新に手を引っ張られました。
「もうちょっと落ち着いていただけるかしら？大丈夫だって言ったでしょ？」
そして案内してくれた若いスタッフに「救急車お願い」と一言だけいいました。私は案新の手を振り切って母の部屋に走り込みました。
母の部屋。私は一生このときの光景を忘れることができないでしょう。
母のすべての持ち物がめちゃくちゃに荒らされ、ひっくり返されていたからです。泥棒が入ったかのようでした。

母がこの施設に入居する時を指折り数え、これとあれを持って行ってこの服は置いておいて、とよくよく吟味した母の持ち物。そう、全部です。あるべきものはなく、気に入りのガレ様のガラスのスタンドは割れてそこらに破片を待ち散らかしているし、本はすべて乱雑に放り出され、気に入りの絵画の額ははずされ、本当にひどい有様でした。

母の寝ているベッドも裏返され、シーツの乱雑なままでその状態で母は寝かされていました。

母は寝ています。腕が固定されていますが変なふうにねじくれ、骨折しているのがあきらかでした。私はシーツをそっとめくりました。

そして母の胸を鼓動を聞きます。・・・不整脈？不整脈が出ています。

母の持病は慢性関節リウマチです。心臓に病気はありません。なぜ？なぜ、こんなことに？

母は寝ています。でも呼吸は粗く浅く、いわゆる健康な状態ではありません。

案新はいつのまにか私の背後にまわっています。私はゆっくりと案新に向かいました。案新毛伊佐の顔は真っ赤でした。

「・・・案新さん、母に一体、何をしたのですか？この部屋は一体なんの様ですか？」

案新毛伊佐の顔色がもっと赤くなりました。赤鬼・・安新毛伊佐は怒ると赤鬼のようになる・・。私は怒りをこめて見つめます。

「鳥居さん。あのですね、申告しないものをお持ちでしたので、念のために持ち物検査をしようとしたら、抵抗されたのです。それで手と腰に怪我をされたのです。でも大丈夫ですわ、救急車を呼びましたし」

「これを大丈夫だというのですか？持ち物検査？最後のメールが来たのは真夜中です。そんな時刻に持ち物検査？なぜ？母は犯罪者でもなんでもないのですよ。

それを抵抗したからといってこんな怪我、普通するものではないでしょう？
事の次第によってはただではすみませんよ。公にしますからね！」
「まあ、鳥居さん、そんなふうにとられては他の入居者にもご迷惑がかかりますわ、規則をまもれない入居者って本当に困ります。
ご家族もそんなケンカ腰では話しあいも何もあったものじゃありませんわ！」
私は怒り心頭にたっしていました。

第１１話

母はその後、救急車でふもとの病院に運ばれ、診察してもらいました。不整脈＋腰の骨折と手の骨折。大けがです。

そこの病院で、どうも急性心筋梗塞かもしれないが慢性疾患のリウマチも持っているし、この状態ではうちは診れないということで、特定機能、救急指定病院へ運ばれました。時刻は午後４時をまわっていました。自動体外式除細動機（ＡＥＤ）も使用した緊急手術もしていただいたのですが、治療の甲斐なくわずか１日足らずで母の容体は悪化し、そして・・２日後に亡くなりました。

この２日間、長かったです。私は仕事も忘れ、母の無事を祈りましたが残念です。あの時、糯さんが亡くなったと聞いたときに連れて帰ればよかった・・。だがもう遅かった・・。

またそれからの２日間、お通夜とお葬式・・。母親が亡くなったという実感がないままにしました。納骨も読経も実感がわかないままです。見慣れた家ももう母が帰ってこないだろうと実感もないままでした。

・・母の容体悪化はあきらかに施設「あんじん」いいえ、実質的な支配者、案新毛伊佐との因果関係が求められます。はっきりいってＩＰＯＤをスタッフの知らせで夜中に母の部屋に入り込んだ案新毛伊佐が何らかのきっかけで言い争いになり、激怒した案新が母に暴力をふるったと思っています。

だとしたら、これは殺人ではないのか・・・？

でも目撃人も何もいない。葬式にはスタッフが遠路はるばる１人来てくれましたが、ばたばたしていたし、当日の夜は勤務時間外だといって何も知らないようでした。またその時の目撃人も誰もいな

いようなのです。
だから肝心の証拠がなく告発ができないのです。客観的な証拠すらも・・。
私は母の葬式をすませた翌日に再度「あんじん」に連絡を入れました。電話を受け取ったスタッフも母の死を嘆き偲んでくれましたが、案新毛伊佐からは母の遺品を引き取りに来るようにとのコメントをスタッフさせました。
電話で直接彼女と話したいと思いましたが、彼女はでません。スタッフも不在だといって取り次いでくれません。それですむ話ではないと思いました。

瑣末な私事の用事をすませたあと、母の遺品を引き取りに行きました。そう母の葬式の4日後ぐらいでした。
すると母の部屋はもうすでに別の入居者が入り、遺品は1階の事務所の隅に段ボール箱7箱ぐらいに分けてでんと置かれていました。

このときの私の心情をどうぞ理解してくださいませ・・。悲しいってもんじゃありませんでした。顔見知りになったスタッフはとても良い方でしたのに、と泣いてくれました。が、事前連絡したにもかかわらず、案新毛伊佐は出張中とかで出てきませんし、コメントすらありませんでした。
ダイニングに行って皆さんに挨拶しましたが、母の部屋の隣の大木ゆうがさんの姿が見えません。どうしたのかと聞いてみると、大木さんは脳出血を起こされて地元の病院に入院中とか。
皆高齢なので偶然なようですが、何か作為的なものも感じて私は不安でなりませんでした。
スタッフは心配そうに私についていましたが、私が母がメールをくれた直後にＩＰＯＤでの通信が見つかりそれがきっかけで命を落とした。この疑いがどうしてもぬぐいきれませんでした。
出張中とかで事をうやむやにしてはならない。残された娘として

この疑問ははっきりとさせなければならない。私はそう決心しました。またあの様子では案新毛伊佐は絶対に自分の非を認めないでしょう。

裁判になるかもしれない。私は原告で・・。それならば弁護士、状況証拠の提出など、煩雑ないろいろなものを用意しないといけないだろう。

特に証拠。

私はここに来たのはいいけれど、何か録音できるものを持ってきたらよかったと後悔しました。とりあえず私はついてきたスタッフに言いました。

「案新さんと私は話しをしないといけません。お帰りはいつですか？」

「はあ、あ、あのう・・。わかりません・・」

「わかりません、ですむの？困ります。それならば案新さんと話しができるまで、ここでお泊まり覚悟でずっと待たせていただくわ。宿泊されるのがお嫌でしたら、駐車場で寝ますから！」

私は母を亡くした無念さで仕事なんかもうどうでもよい心境でした。

スタッフは顔を見合わせてまた事務所の奥で何ごとかを話し合っていましたがやがて誰かがどこかへ電話をかけました。ぼそぼそと小さい声で言っていたので内容まではわかりません。やがてその受話器をもったスタッフが私の方へやってきました。

「あのう、案新さんがお話をしたいといっておられますが」

「出ます。電話を貸してください」

以下は案新と私との会話です。怒りでよく覚えていないぐらいですが、内容にうそいつわりはありません。

」」」」」」」」」」

「もしもし、」

「はい、もしもし。案新です。鳥居さん、今そちらに来られていますのね。お母様、残念でしたね」

「・・・私はこの時間にきて実質経営者たるあなたと話しがしたかったのです。だから前もってこちらに来る日時を教えていたはずです。・・急用とのことですがいつ頃お帰りですか？」

「そんなの、今忙しいし、いつ帰れるかわかりませんわ」

「あのですね、私は先日の母の状況をもっと詳しく聞きたいのです。教えられないなら出ることへ出ます」

「まあ、それは裁判にするということ？私どもは貴女のお母様はじめ、入居者様に親身になってお世話してさしあげているのに、そんなふうに言われると悲しいですわねえ」

「あの晩、メール通信が見つかったと言うだけであんなふうに怪我をするものでしょうか？一体何があったのかを教えてください。電話では困ります。直接会って話を聞かせてほしいですが」

「あのね、私は今、忙しいといったでしょ？メール通信が見つかったのでそれは禁止ですといったら急に暴れられたのよ。私もスタッフもけがをしてしまったくらい暴れられました。だから多少は力ずくで押さえないといけませんでしたのよ。私はそう説明したはずよ。納得できませんの？

　裁判とおっしゃったわね？お金がほしいの？入居して1カ月もたたないうちに亡くなられたのは残念でしたが、お金なら手数料をひいてお返ししますわよ。どうぞ安心なさって」

「お金の話をしにきたのではないですよ、詳細な説明を求めているのです。」

「さっき言ったじゃないですか。私は今、忙しいのです。返却金の詳細は事務局から手紙が行きますから待っていてくださいね。なる

べく急がせますから」
「案新さんっ！」
プツ、ツーツーツー・・・・・
電話が切れました・・。全然相手にしてくれなかった。とりつくしまもないとはこういうことをいうのでしょう。私はくやしくてその場で大勢の事務員や入居者が見守る中、泣き崩れてしまいました・・。

やがて事務員たちが段ボール箱を持ってきて、「荷物を車までお運びします・・」と言いました。彼女達は目を伏せ、手はしおらしく重ねて行儀よくしています。私は問いました。
「案新さんとのトラブルは今まで私の母以外にも他にもあったのではないですか？彼女があの調子なら本当にいろいろなことがあったと思いますが・・」
彼女達はお互い顔を見合わせた後、知らないというふうに首を振ります。関わりたくない様子でした。やはり、ここには何かある・・。

私は母の遺品を車のトランクまで運んでもらいながら、そして涙を流しながらゆっくりと運転して家路につきました。あんなに悲しいドライブは初めてでした。つい3週間前に母はこの車の助手席にすわり、気に入りの小物を入れた気に入りのバッグを持って、私と楽しいおしゃべりをしていたのです。
入居者にはどんな人がいるのか、部屋は個室だけどお隣さんはどんな人だろうか、スタッフはやさしい若い女性だといいな。気の合う人がいればいいな。
いくつになっても新しい生活というのは、人を不安にさせ、また期待にわくわくさせるものです。母は「あんじん」の暮らしを楽しいと信じていました。私もです。

入居間もなくの笹本うをさんの死が残念です。あの人が生きていればもっと話が違ったかもしれません。また大木ゆうがさんも。・・そして私とメールしたのがそんなにいけなかったのでしょうか。

偶然とはいえ私は糯さんの1件で「あんじん」の案新毛伊佐の裏の面を見てしまいました。知らなかったらよかったのかもしれません。

毛伊佐を怒らせた母が悪かったのでしょうか？違うでしょう。毛伊佐は施設「あんじん」の独裁者でもなんでもありません。経営者です。

彼女が母に暴力をふるって死にいたらしめたことは間違いないとみています。ただ証拠がない・・。私の憶測でしかない・・。くやしい・・・！

母は本当に楽しみにしていました。施設「あんじん」との新しい生活を。楽しい老後の生活を・・。

続く

第１２話

その翌日、「あんじん」から速達で書類が来ました。急いであけると返却金の件でした。

私と母が、父の残してくれた土地を売って「あんじん」に入れたお金は７０００万円です。このうち早期に入居できる手数料として１０００万円、これは返却できないとのこと、それはわかります。

母が「あんじん」に入居していたのは1カ月にも満たない3週間でした。残り６０００万円のうちいくらなんでも半分以上は、はっきりいって５０００万は返されると思っていました。

だけど、返金は１０００万円だけです。その金額を見て私は唖然としました。高級施設とはいえ、1カ月未満の在籍でも６０００万円取られたのです。あんまりだと思いました。

母が退去したあとの部屋の清掃料金や母が怪我したときの血液の拭きとりに壁紙やベッドから全部総取り換えをしないといけないぐらいの汚れ具合だったからだそうです。またこの地はへんぴな場所にあるので、清掃職人の出張料金も高かったそうです・・・。

でもあんまりです。私は弁護士事務所を訪問し相談しました。そして弁護士名義で内容証明を送付したところ、もう１０００万円が返金されました。それでも７０００万円支払って返金は２０００万円・・・。ひどいと思いませんか・・？

なんど電話しても案新毛伊佐は絶対に出ません。思いあまって直接「あんじん」に直接行っても、私の車を先に見つけるとスタッフが連絡するのか、彼女には直接会うことはかないません。急用で不在、こればかりでした。

案新毛伊佐。なんという悪辣な人。こういう人はたとえ裁判で訴えても平気でうそをつくでしょう。

私は案新の真っ赤な赤鬼のような顔と表情を思い浮かべます。同

時になぜか私を助けてくれた平豪婦人の案新に対するかばいようを思いました。彼女は私を助けてくれましたが案新をも非難することなくかばいました。

　もしかしたら裁判になっても平豪婦人のような財閥総帥のある権力を持っている人が「あんじん」の見方をすれば、私には証拠もなにもないし勝ち目はないかもしれない。

志神さん、この返金された2000万円。貴女の仕事には少ないかもしれないですが、どうぞ受け取ってください。そしてどうぞ母と私の恨みを晴らしてください。

どうぞ、どうぞ・・。

どうぞ・・・・。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」」」」」」

今は亡き鳥居超個の娘、鳥居超三井はここまで話すと「しにがみつみこ」こと志神積子に頭を深く下げた。

　積子は黙っていた。この話は憶測でしかないが、彼女は本当のことをいっているだろう。大昔とはいえ一緒の職場で働いていたから超三井の働きぶりや思考能力はわかっている。

　しかし1個人の経営者、しかも介護施設の経営者がそうやすやす入居者を簡単に死にいたらしめることができるだろうかと思った。

　かっとなって他人に暴力をふるえる人物だとしたら、かつ殺すまでにいかなくとも、死にいたらしめても平気、そういう人物だとしたら。これはそういう性格とはかたずけられない潜在的な精神疾患があると考えられるが・・。

　しかし案新毛伊佐なる女性は今まで実質的に経営をしているし、現在も経営している。スタッフに仕事の指示をし、入居者に自ら看護師姿で介護もしている。その姿はうそいつわりなく、超三井も彼

女の親密な介護ぶりを見ているし、介護の手技は手慣れていたと証言している。

ここは1つ慎重にウラをとっていかないといけない。

積子は依頼を引き受けたが、すぐには実行しないと言った。

超三井はそれでもいい。裁けるものなら彼女を裁いてほしいと改めて積子に依頼した。

・・・・契約成立・・・・・・・・！

第13話

鳥居超三井から依頼を受けて積子はいろいろな方面から施設「あんじん」を調査した。

「あんじん」自体には訴訟沙汰になった案件は皆無だった。だけどそれは表面上のことでいくつかのトラブルはあった。しかしそれはどの介護施設にも見受けられる介護を受ける側と介護をする側との主観の相違や説明不足による食い違いからきたトラブルが多い。

しかし「あんじん」の実質上の経営者である案新毛伊佐（あんじんけいさ）なる人間には未成年のときに補導歴があること、看護師時代に勤務怠慢として退職勧告を受けたことがあるのを積子は重視した。

案新毛伊佐。

彼女は精神医学的にいうと易怒性（えきどせい）というのだろうか。すぐにかっとなると言う性格は幼少からだと言う。

勤務医の家庭の1人娘として大切に育てられたが、幼少時からわがままで自分の思う通りにいかないとかんしゃくを起こす。かんしゃくは長く続き、子供によっては自分で自分の毛を抜いてしまったりする子もいるが、毛伊佐の場合は爪でそばにいた人の皮膚を引っ掻いたり噛みついたりすることが多かったという。これは他害というが特に目立った精神的な症状はなく、単なるわがまま、だとされてきたといえる。

でも友人はでき勉強もある程度はできて特に問題児扱いはされたことはない。中学校から高校、短大とエスカレーター式に進学できる女学校に通ったが、高校2年生の時に補導されている。

この補導。クラスメートをいじめて自殺未遂にまで追い込んだことによる。クラス中心人物でムードメーカーでもあった毛伊佐はやりたい放題だった。いじめた相手だがある先生がその女性とを「ク

ラス一番の美人だ」とほめたことによる。ただの冗談にしてはその先生にも非があるが、毛伊佐は先生ではなくその称賛されたクラスメートをいじめようと思ったのだ。嫉妬の感情が強いのだろうか。

他の親しい友人を巻きこみそのクラスメートをいじめることを楽しんだという。クラス全体で無視することを続けること3カ月。「死ね」と言われたという遺書を書いて相手は自殺をはかる。幸い未遂に終わるが話しは終わらない。

遺書に名指しをされた毛伊佐だが先生や親に注意を受け、反省するわけでもなくかえって逆恨みをする。自殺未遂で長期で自宅療養していたが、見舞いと称してその女性との部屋に押し掛け言葉で、遺書の中で私をよくも名指ししたと責めた。

「あの時さっさと死ねばよかったのに！」と責めた毛伊佐。当時17歳。顔を真っ赤にして怒る毛伊佐。自殺未遂にまで追い込んだのに、見舞いと称して責めにきた毛伊佐。その女性の親があまりに常軌を逸した行動をビデオテープにとって警察に連絡したのだ。

それが補導の経緯。だがそれでいじめはなくなるわけではなく、毛伊佐はその女性とをとうとう死においやる。再度の自殺を試みてその子は人生を去ったのだ。毛伊佐は凱歌をあげたのか？まだ若い毛伊佐。人をいじめることに快感をすで得ていたのかもしれない。

だが当時はいじめによる殺人という社会的認識もなかったせいか毛伊佐は逮捕もされず、学校から反省文を書かされて終わったようだ。

ついで父の後を継ぐべく医学部を目指すも2浪の末、挫折。看護学校に行く。看護学校での成績は特に優秀でも劣悪でもない。成績もふるわなかったが看護師という国家資格をとって父の紹介で某病院に勤務につく。そこではまず病棟看護師として勤務についたが、本人は当直すると次の朝はしんどいといって無断欠勤をすることが多く、管理側は困ったという。

しかも業務のえり好みが激しい。トイレ介助はにおうからイヤ、

オペ場はこきつかわれるからイヤ。入院患者の好き嫌いも言う。あの人は口うるさいから嫌いといってコールがあっても詰所から出ていかない。大好きな人にはご機嫌伺いと称して個室があればそこに入り浸る。とうとう退職勧告をうけるにいたる。本人はそれを苦にやることなく、喜々として退職。家でいわゆる家事手伝いという名の寄生虫になる。

父の案新恵二には娘毛伊佐のサドの傾向、攻撃性、他害を気に病んでいたふしがある。

そして施設「あんじん」

元々老人介護施設だが父の案新恵二の元同僚が場所がへんぴすぎて入居者が集まらないと言って売りにきたのだ。恵二の勤務医としての激務に耐えられず体調をくずしがちだったので、土地と株を売って購入した。もちろん名義は案新恵二だが、実質上の経営は毛伊佐になる。彼女は当然のように看護婦長兼施設長としての業務につく。

伝手はあった。恵二の亡くなった妻の親戚が平豪財閥につながる人でその人の紹介で平豪総帥の妻が入居すると次々といわゆる上流家庭からの入居者が増えてきたのだ。

もちろん宣伝も怠りなかった。毛伊佐はそのあたり才能はあったのだろうと思う。

派手な広告、豪華にしつらえた部屋のつくり。何より手厚い行き届いた介護。介護雑誌に掲載された推薦物件を見て今度は一般週刊誌に施設お勧めランキングにベスト１０に入る。

それで一気に知名度があがり、常時満室の状態が続く。

だがこの不況で高価な設備費、冷暖房費、各自の好みにあわせた食事代、そして介護度数に応じてのコール代金、夜間手当代。細かな設定をしているが毛伊佐はもっと金もうけをしたかった。

十分な代金をいただいている少数の入居者は手厚くするが、不況

で資金繰りが苦しくなり入居者の支払いを滞りがちな人にはつらくあたる。また肉親や近しい親せきがいない人にはもっとつらくあたる。

また金銭的に盗られたと騒ぐ入居者には、肉親の委任状をもらって財産管理と称して宝石類や各種不動産の権利書などを管理している。通信機器も支配下においている。痴呆のある患者で金を持っている人にはとことんやさしく。そうでなくいわゆる自分の要求を率直に語れる毛伊佐にとっての「うるさい患者」は厳しくしていた。

自分のインテリアの趣味を満たすためにお金はいくらあっても足らない状態。カッシーナ、コルチャゴ、ファントーニ。特に象嵌細工をいれたチッペンデールのアンティークものは高価すぎるものだ。しかし毛伊佐はインテリアを愛していた。そして最上階に陣取った自分の事務室や施設の隣に建てた自分のプライベートな住まいには湯水のごとくお金を使う。

オフには耐えず模様替えをして暮らす。そこに異性の影は見当たらない。あくまでも自分が大好きなナルシストなのだ。

また積子は報告書の中で行方不明の入居者がこの１０年で７名いることを重視した。いずれも見つけられてはいない。いずれも痴呆の入居者でこの国立公園の風光明媚な光景の中に迷い込んで海の中にでも落ちたのであろうとされている。

もちろん警察の介入もあり大規模な捜索もされている。

施設の見取り図も入手する。かつ案新親子以前の持ち主に当時の俊工事の様子、建築士に何度も話を聞いてもらった。

そういうのは積子の信頼おけるブレーンがする。その一人が城田という男で彼は耳寄りな情報を１つもってきた。これで積子の腹は決まり、依頼を実行する日を決めた。

決めて城田に連絡を取ったその日に李からなんとメールが来た。積子は自分の診療所を宣伝するホームページの類を持っておらず、

どうやってわかったのかいぶかしんだが何のことはない、積子の所属する精神科医の学会に連絡を取って転送依頼してきたのだ。
メールの内容は「もしぼくが手伝うことがありましたらぜひお知らせください」とその下に携帯電話番号が書かれている。
積子は何と言うタイミングかしら、この李とは何か変な縁があるのかしら、と独り言を言って電話連絡を取る。
「1つ仕事があるけど、いく？」
「はい」
「じゃ、明日東京の診療所まで来なさい。できるだけ派手な格好をだけど下品でない恰好をしていらっしゃい」
「わかりました」
李は二つ返事だった。絵図のことはどうなっているか知らないし、積子の関知することではない。だけど李が来てくれるとわかって何となくうれしく思った。結構李のことを気に入っているのか、気になっているのか。その両方だろう。彼は積子の仕事を2件見せているがいずれも冷静だったし余計なことはしないし、邪魔にはならなかった。それがよかったのだ。医学部に入りたいと言ってたが彼には戸籍がない。あれからどうなっているのか。

第１４話

時に１２月の中旬。都会はクリスマスムード一色だが、積子には関係ない。

「あんじん」は田舎にあり不便な場所にある。天気予報ではその地方は雪になっている。しかも寒波がきているので、大吹雪になるだろうとある。

「まあ、おあつらえむきじゃらいの。案新毛伊佐の命日としては上出来！吹雪なんてね、」

積子は今東京の自分の診療所にいる。表のドアには「本日休診」の札。狭いがコンパクトにおさまった待合室一杯に積子は荷物を広げている。積子は濃いめの化粧をしている。

そして派手なヴェルサーチのロングドレスにロシアンセーブルを羽織った。セーブルはロシア産のクロテンの毛皮のことだ。光沢といい毛並みの美しさといい、宝石に匹敵するものだ。もちろん動物愛護協会の人にはわかってもらえないだろうけれども。

そしてドレスの色はゴールド、セーブルは薄紫。見る方向によっては微妙に色とラインが変化する。目が離せない印象深い衣装だ。

バッグもヴェルサーチにした。この色もゴールドだ。大きなＢ４サイズの書類等が入るチャック付きトートバッグ。派手なメドゥーサが見る人を威嚇するようだ。中に入っているものはもちろん普通の女が持つものではない。各種の点滴道具、薬品のバイアル、アンプル。メスやピンセットも。それと今回は忘れてはならない、料理に使うラップを3本ほど。それと拘束服。これがすごくかさばるのだ。だが持っていかないといけない。そしてオペ用の超薄手の手袋も何種類か。

薬品の種類はもちろん厳選している。使わないものは置いていく。持っていくものに迷いがあるものも置いていく。要は思い切りが大

事だ。ばっさりいく。

今回の仕事はマスクなどして素顔を隠すわけにはいかない。だが派手な印象をわざとつけて自分の素顔は覚えられにくいようにする。だからそれでいいのだ。

インターホンがなる。カメラをのぞくと李だった。

入れてやると李はめかしこんだ積子に笑いかけるでもなく、生真面目に会釈した。李も三つ揃いのスーツを着て前髪をあげている。しかも積子の目立つようにとの言葉通り髪全体に派手な金色のメッシュをいれている。だが下品ではない。スーツの生地は上等のものだ。

「スーツの銘柄は、なに？」

「ブリオーニです」

「あなたみたいな若い子がそんなブランドをよく知っているわね」

「事務所にそういうのに詳しい人がいてきいたんです。でもこれ、もらいものなんですよ。寸法直しだけはしましたけど」

「お金はあとであげるわ」

「いや、いいです。その人の中古を無料（ただ）でもらいました。ぼくがしたのは寸法直しだけです。それも事務所に出入りしている洋服屋が激安でしてくれたんです。だけどほら」

李はぱっと前ボタンをはずしてスーツの裏をみせた。とたんに大きな桜の花びらが舞う般若の面が見えた。縫製のしっかりしたブリオーニも顧客の趣味に応じてこういうのもしてくれるのだろうか。積子はおかしく思った。

「わかった。このスーツの前の持ち主は、もしかして絵図さん？」

「そうです。頭（かしら）です。あの人結構着る物にうるさいです。見えないものにもとことんこだわる人で」

「そうお？まあ、あなたは、かわいがられているようね」

「よくわかりませんが、医学部に行くなら金を出してやるといってます」

「杯もらってないそうだけど、いずれそうはいかなくなるわよ」
「ぼくはやくざにはならないです。医者になるんです。だからその時はその時です」

再びインターホンが鳴った。今度は城田だ。車を出してきたのだ。
「じゃあ、あんじんまで車で2時間かかる。遅くならないうちに乗り込みましょう」
積子は言った。
「あ、そうそう。それじゃまだインパクトが弱いから、この口紅を塗って」
「はい」
李も素直に積子から口紅を受け取り、ずずっとひいた。口元にピンクの線がついた。はみでてしまったのだ。
「まあ、鏡を見ながらひくものよ。でも時間がないからね」
積子はティッシュで口元をぬぐってやり、診療所の引き出しからコンタクトレンズをもってきた。
「車の中でつけてもらうわ。これはつけるとブルーアイになれる。目の損傷とかしたことはないわね」
「ありません」
「眼圧とか高くないわね？」
「はい。ただコンタクトレンズはつけたことはありません」
「慣れると簡単よ。今回もう1人助手がいるから彼女につけてもらいなさい。九州で会ったと思うけど、虹子さん。覚えていますよね」
「はい、覚えています」
2人は連れだって、診療所を後にしてエレベーターにのり地下3階の駐車場にまっすぐ下りて行った。

第１５話

積子のいる診療所が入っているマンションの地下３階。車はすでに待っていた。
車種はリンカーンタウンカー、早い話がスーパーリムジン。色はクリスタル。この車だって、派手さでは積子達にも負けてはいない。
全長８メートルをゆうに超し、幅も２メートル。高さは１５０センチとあまり高くはない。が、しかし長い分シートは進行方向に沿っている。寝そべれる長さと広さだ。しかも座り心地のよい革張りシートだ。運転手を入れて８人は余裕で乗れる。防弾ガラスも入っていてセキュリティもばっちり。本当のＶＩＰしか持てない車だ。
この車を調達してきた城田は運転手に徹し、地味なこしらえだ。城田はいつでも脇役に徹する。彼は絶対に目立ちたくないのだ。

一方今回の助手の虹子はすでに車に乗っている。秘書風のかっちりした格好だ。しかし日本では見かけない真っ赤な生地に黄色のラインが何本も走っているカラフルなスーツを着こなしている。スタイルがいいのでよく似合っている。頭は前髪をオールバックにし前々回九州の鎮静病院であったかつおばあさんに変装していたときとは雲泥の差だ。とても同一人物には見えないだろう。
虹子も濃い化粧をほどこしてはいるが、若いので年齢不詳に見えずどちらかというと国籍不詳の女性に見えた。虹子は車に乗り込んできた積子に声をかけた。
「積子先生、とてもおきれい！よく似合うわー」
「おはよう、虹子さん。今日はよろしくね」
「はあい、こっちは李くん。九州のあの時以来ねえ！おひさー」
「・・・おはようございます」
返答はしたものの、虹子の明るいテンションにも動じず李は頭１つ下げない。虹子が鼻白んだように肩をすくめた。３人が横並びに

ソファに腰掛けると城田がドアをしめた。ソファにはセーブルを着込んだ積子はゆうに3人前はとったがそれでもゆったりとしている。虹子が積子のセーブルを逃がせる。車内は暖房がよく聞いているからだ。

城田はゆっくりと車を動かす。平日のビルの駐車場は人気が少ないながらも3人はいたが。3人とも口をあけてこっちをみていた。スケルトンなのでこちらからはその様子が見えるがあちらからは車中は全く見えない。

虹子は煙草に火をつけた。空調もしっかりしていて換気はいいので煙はこもらない。

「積子先生、本当に今日はおきれいだわ。いつもそういう恰好をなさっていたらいいのに」

積子は苦笑して首をふる。自分が美人だと思ったことはないが、特に特徴のない顔はどれほど過去に役だっただろうか。いや今もだ。

だが虹子の感想はまた違っている。積子は確かにモデルや女優のような万民向きの美人ではないが、こうして化粧するとどことなく気品がある。

誰かに似ている・・・、虹子は思考していたがやがて「あ」と声をあげた。

「そうだ。積子先生はね、あの人に似ているのよ。その名もジャクリーン・ケネディ・オナシスに!!」

積子は虹子の突拍子もない言い方に再度苦笑して首を振った。

「いえ、本当よ。彼女に似ているわ・・・。世界で一番権力を持った男、ケネディ大統領と結婚した女性。そして世界で一番のお金持の男、オナシス。ケネディが暗殺されたあと、彼女はオナシスと再婚したのよ。

数奇な運命だったけど、彼女の人生は豪華だったわ!積子先生って、似てるわ。ほんとよ」

積子は反論した。

「私はそういうことを言われても全然光栄とも思わないわ。それは虹子さんだけのご感想でしょ。
　もう故人となっている人だけど、似ているなら彼女の方が私に似ていると思いたいものね。うれしくないわ」
　虹子は恐れ入ったように頭を下げた。積子の表情は厳しかった。李は黙然として２人の会話を聞いている。積子は話しを続けた。
「今日は個人名は以降ださないこと。私達は国外に住んでいる日本人よ。海外に資産がいっぱいある日本人。いいこと。あなた、お名前は？」
　虹子はかしこまって答えた。
「さきほどは、大変失礼しました。私は秘書のコバヤシと申します。アナンダ様」
　積子イコール、アナンダ様はうなづいた。
「今から行くあんじん、母が気に入るといいわね」
「さようでございますとも。日本で過ごしたいとかねてからお望みですから」
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」

　そう！
　読者様、お察しの通り、積子達ご一行はこれから超高級老人介護施設と名うっている「あんじん」に見学に行くのだ。
　海外在住の日本人。海外、しかも中東に油田をもっている大金持ちだ。さぞや案新毛伊佐達は舌なめずりをして、見学にくるのを待っていることだろう！
　だが、今日は入居する本人は来ない。足が悪くてまた中東にいる。だが年老いた今、早く祖国、日本に帰りたいと切望している。だから娘のアナンダが忙しい事業の合間をぬってこうして「あんじん」に見学に行くのだ。

やがて駐車場から地上に出る。リンカーンリムジンは車道にでる。道行く人がみんなリムジンを見て立ち止まったり指さしていたりする。それをしり目にリムジンはすぐ高速道路にのり、一路「あんじん」を目指していった。

第１６話

そして2時間後、目指す「あんじん」の建物が見えてきた。東京の林立したビル群はもうどこにも見えない。見えるのは見渡す限りの岩山、そして海。広い海。

防風林の松の木群が整然と植えられている国定公園に沿ってリムジンはすすむ。

李は車中に虹子こと、秘書のコバヤシにブルーのコンタクトレンズを入れてもらっている。李の顔立ちは整っているがますます国籍不明の若い男優という感じに仕上がってきた。

虹子は満足そうに「あんたはアナンダ様のツバメなのね」とささやくと李は黙っていたがちょっと怒ったようにぷいと横を向いた。虹子はその様子を見て笑った。

積子は頭の中で「あんじん」の設計図と見取り図を再現している。図面をかけと言われたらできるだろう。特にセキュリティ面は特に。今回は老人介護施設ということで監視カメラが通常の建物よりも多く設置されているからだ。

案新毛伊佐が糯さんとやらの生爪をはがそうとそれは毛伊佐の持ち物の中でのこと。他人がやればたちまち監視カメラに証拠が残る。だから素顔を見せないように濃い化粧と派手な仕草で煙にまくのだ。

音もなくリムジンが止まった。リンカーンを「あんじん」の建物内から早くも認めたのだろう。写真でしか知らない案新毛伊佐が大げさな微笑みを浮かべ車の駐車場にやってくるところだ。そしてお付きのヘルパーや事務員たちもぞろぞろと。窓からは入居者の老人たちが、あのすごい見たこともない大きなリムジンにはどんな人が乗っているのだろうと鈴なりになって見つめている。

城田が運転席から下りて簡単に身づくろいしてから、おもむろにドアに手をかけた。運転手らしき白い手袋は1点のしみもない。案

新は城田にも「ごくろうさまです」と声をかけているが城田は反応しない。
運転手は運転手に徹し、彼はアナンダ様専属の運転手であって、それ以上でもそれ以下でもないのだ。
ドアに手をかけ静かに開けた。まずは李、続いて秘書のコバヤシが下りる。
降りてすぐ2人は城田がしたように、きちんと身づくろいをした。コバヤシは車中から両手でロシアンセーブルをかかえて持ち出した。コバヤシが車中にいるアナンダ様に声をかける。
「アナンダ様、お疲れさまでした。施設あんじんにご到着でございます。どうぞ下りてくださいませ」
ブルーアイとメッシュの国籍不明の青年や秘書コバヤシの国籍不明の衣装と変なイントネーションの日本語にのまれたように、案神毛伊佐の顔はこばわっていた。毛伊佐の後ろに控えている事務員も同様だ。
入居希望者は海外在住が長い日本人の85歳の女性とは聞いているが、娘のアナンダとやらはハーフなんだろう。果たして見学してここが気に入るだろうか。事前に秘書が連絡してきた情報や乗ってきたリムジン車を見る限りどうも途方もない金持ちらしいが。
やがて毛伊佐をじらすようにして、アナンダ様が降車された。

第17話

アナンダ様が降車された。さきに17センチはあるピンヒールの形のよい足が見え、次いでゴールドのドレスのすそが見えた。それから全身。ほっそりとしたスタイル。態度は堂々としている。

彼女の髪の色は漆黒。ほどよくウェーブがかかり、一見乱雑だが手がこんだカッティングがされた凝ったヘアスタイルだ。だが化粧が濃くアイラインがきつく、やはり海外在住の女性だとそれとわかる。

秘書のコバヤシがさっとセーブルを着せた。するとより態度がいっそう堂々としてみえた。まるでどこかの王族かセレブのご来臨のようだ。取材の記者やカメラマンが殺到していないのが不思議に見える。

ついで大きなトートバッグをコバヤシが持ち出した。ゴールドに輝くメドゥーサが迎えに来た毛伊佐達を睨みつける。

毛伊佐はこのアナンダ様とやらに圧倒されて声がでないようだ。

まさかこんな日本の常識を超えた大金持ちが来るとは思わなかったのだ。訪問の依頼はメールで突然だった。今中東のN国にいるが母がどうしても日本で死にたいというので、自家用機で見学に行くといってきたのだ。「あんじん」と知ったのは日本の雑誌からというから、何年か前に受けた取材の誌面による記事を信用したのだ。

秘書のコバヤシが言った。

「ケイサ・アンジンはどなた、でしゅか？」

毛伊佐はとっさに言った。

「わたくし、でございます。遠方から我が施設あんじん、にようこそおいでなされました。光栄に思います」

さっとアナンダ様の顔が案新毛伊佐を射すくめた。その強い視線にさすがの毛伊佐もたじろいだが、笑顔はくずさなかった。

アナンダはにこりともせずに毛伊佐に握手を求める。毛伊佐も握手に応じた。この様子を取り巻きのヘルパーや事務員は息をひそめて見守っていた。この娘アナンダ様とやらは日本の慣習をまるで知らないだろう。入居者の家族として説明など、うまくやっていけるのか不安に思っているに違いない。

「ハロ、ケイサ。あんじん、にこれてうれちぃ。どぞ、あんないしてくださぃ」

アナンダ様がたどたどしい日本語で話しかけた。後ろに控えているブルーアイの青年はにこりともしない。ぶすっとした表情で施設の駐車場から見える海の断崖を見つめている。

毛伊佐は恐れ入った様子でどうぞこちらに、と玄関口を示した。

アナンダ様ご一行は毛伊佐について施設「あんじん」に入った。

毛伊佐、先頭。次いでアナンダ様。秘書、青年。そしてヘルパーや事務員たち・・・。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

」」」」」」」」」」」」」

見学はその場ですぐに始めた。毛伊佐はいろいろアナンダ様やコバヤシに話しかけたが2人とも日本語が全部理解できないようで、返答は支離滅裂でごちゃごちゃだった。

「あの、お母様はおいくつでいらっしゃいますか？」

「私ハタチでしゅ」

「え、うそまさか。あ、いえいえ大変失礼しました。あのう、アナンダ様のお母様のお歳はいくつですか？」

「私のママン、８７しゃい」

「なにか持病とかお持ちですか」

「ジビョってなに」

「えっと、病気のことです」

「ビョーキないです。ガンにかかってホネオッテ、３回死にました

けど、今ママン元気」
「はあ？あのう・・・では歩行や食事も大丈夫です・・よね」
「ママン、ホコーしらない。ショクジ全部たくさん食べる。生ハムとキャビアとトリュフがスキ。トリュフの混ぜご飯もっと、しゅき。おわんまで食べる」
「あの～日本食で大丈夫ですか？納豆とかみそ汁など・・」
「日本食、私も大好き。でもナットキライね。オスシ好き。イス好き。ネコも好き」
「はあ、あの、それでアナンダ様がお母様の入居をおきめになられたら、ご来日は・・」
「ニュキョしらない。ゴライニチ大好きね。ママン日本好き。日本で死ぬ。ミンナ死ぬあんたも死ぬね」
「はあ・・・あのう」
「ここ、キレイですね。海キレイ。シャンデリアもすき」
「こちらではインテリアに特に力をいれてまして、みなさまに好評で」
アナンダ様は毛伊佐の話しの途中を平気でさえぎり、いきなりセーブルを脱ぎ捨てた。
「ここ、アツイネ。これいらないからアゲル」
「まあ！」
毛伊佐の顔が真っ赤になった。床に無造作に投げ捨てられたセーブルをさっと拾う。その仕草はあっという間だったがまわりに集まった老人達はじめ、みんな見た。へこへこしながらかさ高いセーブルを拾う姿はまるで乞食だった。
「サンキュー、アナンダ様。サンキュー」
さもしいとかみっともない、とか考えない女よね。おまけに介護の手厚さを自慢するより、施設内のインテリアが自慢だなんて。本当に看護師の資格を持っているのかしらね。
積子は富豪アナンダ様を演じながら毛伊佐を軽蔑した。

第１８話

やがてひと通りの説明を終わると、双方理解し得ていたかは不明。早くも毛伊佐は疲れを覚えていた。せめて父の案新恵二がいれば彼はフランス語とドイツ語が拙いながらも理解できたのでもっと交流ができたかもしれない。だが恵二は今日は知人の葬式に出るとかで不在。午後には帰ってくるはずだが。

英会話が流暢にできる事務員を用意していたが、全然無駄だった。彼らは中東の言葉らしきものと片言の日本語しかしゃべれない。意味不明の言葉ばかりべちゃべちゃしゃべっている。彼らの国籍はなんだったのだろう。シリアかヨルダンだったか・・・。

実はメールの日本語もめちゃくちゃできちんとしたビジネス会話にもならなかった。毛伊佐はそこの点を不安に思ったが海外在住であれば先の身上調査もできない。とりあえず見学させて様子をみようとしたのだ。

見た限り途方もない大金持ちであるのは間違いないが、しかし双方の意思疎通が困難であれば入居されても先が思いやられる。アナンダ様の母親のことをもっとしっかり聞いておかねば。

しかしこんな大金持ちの顧客はそうめったに見られるものではない。できることならつかんでおきたいものだ。他の施設にはこのアナンダ様の母親にとられたくはない。ぜひ気に入られたいものだ。毛伊佐はアナンダ様が投げ捨てたセーブルをぎゅっと握った。この毛皮、最低でも１０００万円はするだろう。それをゴミでも捨てるように捨てた。このアナンダ様という女は。

この女にぜひ気に入られたいものだ。お金を出資してもらえるところまで仲良くなれば私ももうひと花咲かせられるかも。毛伊佐は「あんじん」をもっと大きくして、チェーン化したいという望みをもっている。だから多少強引な手をつかってでも取れる入居者からはどんどんお金を取っているのだ。

入居している老人達はこの奇妙な一行を無視するか、好奇心いっぱいでじっと見つめるかだった。アナンダ様はご機嫌良く老人たちに手を振ったりしていた。

やがて毛伊佐は「あんじん」の最上階にある自分専用の事務室に一行を誘った。いつも見学者には最後に自慢の自分専用の豪華な事務所を見せつけ、契約に持ち込むのだ。

だがこの客人達はどうだろうか。全然驚いてくれないのじゃないか。毛伊佐は心配になったがとりあえずエレベーターに乗せて案内する。

案の定、アナンダ様は部屋を見回したり驚きの声を発したり、まあステキ、みたいな感動を表わす語感の発語も表情もなかった。ぶすっとした顔で、部屋の窓にでんとそなえつけている大理石の大きな机だけはやたらとじろじろと見ていたが。

秘書のコバヤシが後ろに控えている。ブルーアイの青年も。事務員がお茶とお茶菓子をもって応接用の机に置いていった。事務員は丁寧にお辞儀をして部屋を出た。この部屋は施設「あんじん」のものとはいっても実質上は毛伊佐のプライベートの部屋にしているので、常駐の事務員はいない。

今この部屋にいるのは、毛伊佐、アナンダ様、コバヤシ、謎の青年。この4人だけだ。お茶を出した事務員が退室するなり、アナンダ様は毛伊佐にずずっと近づいた。

毛伊佐はびっくりした。

「あの、アナンダ様、なにか・・？」

積子は最後まで言わせなかった。先手必勝だ。ぐっとこぶしを握りお腹を思い切り殴った。毛伊佐がぐえっとのけぞったが、早くも後ろに回ったコバヤシが毛伊佐の髪をひっつかんだ。そこへ青年が手をのばして、みぞおちに軽く触れようとした。その瞬間毛伊佐の

意識が飛んでしまった。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」

外は雪なのに。暑い。なぜか暑い。
毛伊佐は長く寝てしまったかと思ったが実際は５分もたっていなかった。自分がなぜ暑いのかはすぐにわかった。身動きができない厚ぼったいごわごわした服に着替えさせられているのだ。手も足も動かない。だが顔は自由だ。
　また全身がしっとりしている？手指は足の指は動く。が、何かが違う。
　それと下半身。なぜは肛門が痛い。いや前の方もだ。肛門と尿道口？膣にも何か・・・？
　痛い。
　毛伊佐は混乱した。一体自分に何がおこっているのか理解できない。
　ここは、見慣れた自分の部屋だ。しかし椅子に座っているのではなかった。自慢の大型の１枚岩の大理石でできた机の上に寝かせられている。
　首は自由に動かせられる。ほっとして首だけでも起き上がろうとすると髪をつかまれて、いきおいよく机の上に戻された。ごん、と音がして激痛が走り、目の前で星がちかちかした。
　アナンダ様がこちらを、見ている。頭の方にいるのはは秘書のコバヤシか？何かひものようなものが自分から出ている。あれは？

第１９話

アナンダ様はピンセットで何か白いモノをつまんでいる。その手にはぴっちりと使い捨ての手術用手袋をしている。手袋の色は透明でも毛伊佐だって一応プロの看護師なのでどういうものかは理解できる。

・・・・アナンダ様は・・・

・・一体彼女は「何を」しているのだろうか。

「私に」、「何を」しているのだろうか？

この白いモノは綿花（めんか）だとすぐにわかった。それを小さくしてピンセットでつまんで自分の鼻の穴に入れているのだ。驚いて毛伊佐はもう一度起き上がろうとした。また髪をひっつかまれて大理石に後頭部を激突させられて痛みが走る。

「あの、一体これは・・・」

アナンダ様がにっと笑った。そしてピンセットで綿花をつまんで鼻の穴にぎゅっと押し込まれる。思わずせき込みそうになった。だが冗談にしては度がすぎる。やがてアナンダ様が小さい声で発語した。

「・・・次は耳の穴にするわね・・・」

日本語だ！流暢な日本語だ。彼女は日本語をしゃべれるではないか！？

「・・・口の中は最後にするわ・・」

下半身にずきっとした痛みが走る。鼻の穴綿花、耳の穴、最後は口の中。

毛伊佐ははっとした。もしかして下半身のこの痛み・・すでに綿花が自分自身の肛門の中、尿道口にぎゅうぎゅうに詰められているのでは？多分膣口にもたくさんの綿中が・・・？

毛伊佐は恐怖でしびれるように身体が硬直した。もつれる口で震える声でアナンダ様に問う。
「一体これは・・？」
アナンダ様はしっと黙るように制する。耳の穴の中に入れる綿花の作業の手は止めない。左耳が終わり次は右の方にまわろうとした。右耳の中にも綿花を入れるつもりだ。
「・・やめて！」
とたんにアナンダ様の形相が鬼のような顔に変わり、毛伊佐は髪をぎゅっとつかまれた。
「痛い…痛っ！」
寝た姿勢のまま、目だけを上に向けると秘書コバヤシもすごい形相だ。
すぐ横ではがこん、ごそっという音がしている。ブルーアイの青年が毛伊佐の部屋の壁の箪笥を動かそうとしている。毛伊佐自慢のアンティーク家具がごそごそ動かされている。それは実はこの部屋では一番大事なものだった。
「いけない、それは・・・」
再び髪がぎゅっと握られた。声をだしたり身動きするとこうして警告をうけるのだ。毛伊佐はもう混乱して何が何だかわからなかった。

アナンダ様が、いやこの悪魔のような厚化粧の女が毛伊佐の耳に綿花をぎゅっと押し込みながら言った。
「どお？あった？」
ブルーアイの青年に問うているのだ。
「ありました、これですね」
毛伊佐はぶるっと震えた。見つかったのだ。自分の大事な秘密が。父の案新恵二も知らない秘密が・・。前の持ち主から譲り受けたこの建物の秘密が・・・。

毛伊佐の大事な箪笥が動かされている。それは猫脚だが全面に象嵌細工を施されて大変高価なものだ。値段がつかない1点ものだ。象嵌と言うのは黒檀や象牙べっ甲を使った手の込んだ細工ものだ。特にこれは18世紀のイギリス産でこれをザザビーのオークションで入手した。その値段と言い輸送費と言い入国にあたっての手間暇とお金と言い・・

だが全然後悔しなかった。チッペンデール様式の当時ものは本当に入手困難なものだから。

それが動かされて壁には毛伊佐の秘密であるもう1つの壁が出現している。けっこう大きなサイズだ。隠し金庫に見えるが金庫ではない。それを彼らは知っているのだ。彼らは毛伊佐の持っているお金には興味がないのだ。毛伊佐の持っている秘密を暴きにきたのだ・・。

「暗証番号は?」

ブルーアイが聞いた。アナンダ様いや厚化粧の女は「5551」よ、とささやく。

なぜ暗証番号を知っているのだろうか。

「旧式でよかった。今のデジタル形式だと歯がたたないからね」

女はつぶやいた。かちっと小さな音がして、扉が開いた。扉の奥は暗黒の闇だ。女は作業の手をとめて毛伊佐にささやいた。

「あんたはこのダストシュートを知っている。この中はずっと下まで通じている・・・国定公園の海の底の底、水底(みなそこ)まで・・・一度捨てると二度と浮かんでくることはない。これがこの建物の秘密だろう。

・・あんたはこれを利用して不都合なモノを処分していただろう。たとえば入居者のお金、奪った財産の証拠になりうるもの、あげくのはてに死体まで・・。

引き取り手のない入居者の死体・・お金に困った入居者の・・暴力をふるって怪我をさせた後始末まで・・・うっふふふふ・・・・」

図星だった。

毛伊佐はパニックになってまた起き上がろうとした。

お約束で髪がまた引っ張られた。ごん、と頭を大理石の机にぶつけられる。

髪が痛い。そして下半身が。だが手が動かない。

第２０話

手足が動かない。それは固定されたので当然だった。
毛伊佐は変わった服に着替えさせられていたのを今更ながらに気付いた。
拘束服だ・・・！
拘束服！

それはいわば精神科などで患者が暴れたり自分自身や他人、看護人に危害を加えたりするのを防ぐ目的で着せることがある。毛伊佐だって看護師だから見たことはある。だからすぐわかった。
この拘束服は両手が腹部に交差している。袖口はない。袖の出口と言うか手が出る場所は交差させられたまま腹部部分に縫い付けられている。だからどれだけ暴れようとも文字通り「手が出せない」状態になるのだ。それで暑かったのだ。いや、それだけではなかった。
拘束服の中にいつのまにか着替えさせられているが、自分は素裸でいや何かを巻きつけられているのがわかった。それでもっと暑いのだ。
ぱりぱりもしていないし、どちらかというとしんなりしている・・・。これは一体なんだろうか・・・。
両耳と鼻の穴に綿花をつめる作業が終わった後、今度はこの女は口の中を覗き込んだ。今度は口の中に綿花を詰める気だ・・。
それでは呼吸ができなくなるではないか、私を殺すつもりなのか？
女はストロー用の細いものを毛伊佐の器官に入れた。乱暴で思いやりのない突っ込み方だった。それで呼吸ができるようにしたのだ。そして大量の綿花を口に入れ始めた。
毛伊佐は暴れようにもどうにもならなかった。目で助けてくれと訴えるが全然無駄だった。毛伊佐の目から涙があふれ出た。なぜ自

分がこういう目にあわないといけないのか全然理解できない。
そして首からでているひもを目でたどる。パニックになった頭のままで目をたどる。点滴・・。どうして私に点滴を？点滴液は見慣れた輸液剤だ。薬剤名はソリタ。これは自分に点滴したって無害だが自分には無用だ。
拘束服、暑さ、綿花、点滴。
そして暴かれた部屋の秘密。水底まで通じるダストボックスの存在。
彼らは知っているのだ。自分の秘密を暴きにきたのだ。
・・もしかして、自分を生かすつもりはないのだ・・・。もしかしたら・・・。

ここまで考えて恐怖で助けを呼ぼうと口をあけて息を吸い込むとそこへさらに綿花を入れられた。喉の奥まで吸い込んでしまいむせた。
「あらあら、綿花でのどを詰まらせて窒息してしまうわよ。せっかく空気を吸えるように気遣ってやったのに」
・・！やはりアナンダ様はいやこの悪魔のような女はちゃんとした日本語をしゃべるではないか？なぜ！
むせてげほげほいっている毛伊佐に女は平気でそのまま綿花をつめこんだ。口の中一杯詰め込む。それからラップを取りだした。
ラップ？
では拘束服の中に巻かれているのはもしかしてラップ？あの台所で使うおなじみのラップ？

ビーという音でラップが適正な長さで破られた。女は毛伊佐の顔にまきつけた。口に突っ込んでいるストロー用の空気官はよけている。
「やめて」
そう言おうにも口いっぱいに綿花が詰まっていて声が出せない。

この女は自分を生かしておくつもりはないのか？恐怖に目をいっぱいに見開いて目で助けてくれと訴える。さきほどから涙が大量に出てそれは途切れることはない。

「案新毛伊佐、ちったあこれで今まで自分がしてきたことがわかるだろ？」

女は毛伊佐に綿花越しに言い聞かせるようにして話しかけた。

「自由に身動きのできない老人や痴呆のすすんでいる老人をいじめて贅沢にくらしてさ、あんた医療従事者たる自覚というものがないもんね。自分本位の経営でそれで世間様が通ると思っていたのかい？

それだったら甘いな、あんたを恨んでいる人たちがどれほどいるか知っているか？

またあんたが人知れずこのダストシュートの壁穴から放り込まれた身寄りのない老人たちの恨みと嘆きがわかるかい？」

毛伊佐は涙を流してうんうんとうなづいた。もう命さえ助けてもらえば、そして自分の全財産を差し出せばきっと命だけは助けてもらえると思ったのだ。

もうなんでもあげる、なんだってする。施設「あんじん」ももういらないから全部あげる、だから助けて、命だけは助けて・・・。

命乞いさえさせてもらえない状況でも毛伊佐は目でいっぱいに訴えた。だが無駄だった。

毛伊佐は無駄だろうとは思わなかった。きっとお金を見せれば、自分の後悔を見せればきっと許してもらえるだろう。毛伊佐は今まで何をしても許してもらえた。だから今回も許してもらえるだろう。

女は点滴のボトルの目盛を確認している。ソリタはごくごく普通の無色の輸液でしかない。一体何のために・・？静脈確保にしてはどうも変だ。

女は毛伊佐の様子を見てにっと笑った。

「もうそろそろ症状が出てくるころかなあ・・？」

毛伊佐の目に不審が宿った。症状ってなんのこと?だろうか・・?それはただの輸液ではないのか。
「そう、これはただのソリタじゃないのよ。あのね、そろそろ教えてあげるわ。ソリタの輸液は全部最初から捨ててあるものに入れ替えたのよね～。アンプルしかなかったので、入れ替えるのが手間がかかって大変だったわよ」
それから女は息をひそめて毛伊佐の耳にささやいた。綿花を通して毛伊佐の耳に届いた言葉・・。
「ソリタの替わりに入っている薬品名はね、プ×××××っていうのさ・・・」
毛伊佐の目が再度最大限まで大きくなった。涙が大きく盛り上がった。体動が激しくなる。コバヤシが毛伊佐の頭を何度も殴りつけた。しかし毛伊佐は動くのをやめなかった。
さっきからプ×××××が血管内に静注されているのならばもう自分は助からないのがわかった。それは血管溶解剤なのだ。脳梗塞や心筋梗塞の急性気の患者に梗塞部の血管を溶かすべくごく少量つかうべきものだ。アンプルに入っていてｍｇ単位で使用するものだ。ソリタではなくそれが入っているならば本当に大量だ。
自分は助からない・・・・。血管から血液が漏れ出て自分はもう助からない・・・。身体が暑いのはそのせいだったのだ。
なにやら生暖かいモノが身体中から流れ出たのがわかった。
ああ、ああ・・・！
看護師である毛伊佐はそれがなんなのかもわかった。

それは自分の血液だ・・。
全身の穴と言う穴から出てくる自分の血液だ。
まず粘膜から、次いで鼻血や膣口内の出血、じわじわ全身から出血。最後には全部の臓器から出血。早くから処置しないと全身の血が流れ出てしまうだろう。
なぜ自分の身体中にラップを巻いた上で拘束服を着せたのか毛伊

佐は理解したのだ。彼らは毛伊佐の血で部屋を汚すのを避けたのだ。綿花を身体の穴という穴につめておいてその上にラップをまんべんなく巻いておく。そして拘束服を着せる・・・。

女は毛伊佐の目を仔細に観察し手を目の下に添えてあっかんべーをさせた。

「うん、毛細血管が膨張してきているわ。眼球からも出血するものもうすぐね。まもなく目が見えなくなるから見たいものがあれば今見ておけば？ほらご自慢のシャンデリアが天井からぶらさがってるでしょ？」

女は毛伊佐の顔を見下ろして嘲笑った。

「うん、鼻につめた綿花も真っ赤に染まってきたな、鼻の粘膜は弱いからね」

拘束服の肩の一部分のファスナーを少しだけあけて毛伊佐の皮膚を確認した。

「うん、あちこち紫斑がでてきたね。内出血している。順調、順調。上出来だわ！」

毛伊佐の頭はもう思考ができない。ぶわーとした感情が出てきて、死への恐怖や女への恐怖そういうものを凌駕する「無感情」が毛伊佐の脳を支配しはじめたのだ。それはあきらめでも贖罪でもなんでもなかった。強いて言えば「逃避」だろう。毛伊佐はもう思考をやめて無感情に逃避した。

出血は全身から出ている。その恐怖の自覚症状から逃げれるなら、喜んで無感情に身をゆだねよう。

毛伊佐はうとうとしてきた。

「意識混濁」

女はつぶやいた。そしてピンセットをつまんで目の下の結膜からピンセットの片方を皮膚の下までずずっと入れてびりっと顔の皮を剥いだ。メスでできるだけ皮膚表面に近い皮膚をわざと切りさいた。

目の下から黄色い脂肪組織がみえる。黄色いモノもはがせばすぐ筋肉がでてくるだろうが、そこまではしない。綿花が不足してきているからだ。出血は全然かまわないがちゃんとお掃除して帰らないとね・・。

すでに出血は頂点にさしかかろうとして顔の皮から堤防の決壊のごとく血液が大量に流れ出た。秘書コバヤシが大きな綿花でさっと血液をぬぐった。

顔の皮をはがされて、毛伊佐は痛みで一度は意識が戻った。そしておびえたように女を見据えて綿花を口いっぱいに膨らませたまま何ごとかを叫び始めた。だが無駄だった。綿花は自分の血液のためにずっしりと重くなり声が出なかった。

毛伊佐が自分の血液で窒息するのは目にみえていたが、積子はわざとそのまま放っておく。その分苦しめることができるからだ。

これでもし水底から毛伊佐の死体がでても一見わからないだろう。顔の皮がないから。絶対海の表面にあがらないすてきな死体置き場で毛伊佐は安楽に暮せばいいのだ。永遠に。

案新毛伊佐。

彼女は気が狂いそうになるながらも気が狂えない。意識もなくさない。

それこそしにがみつみこと志神積子がやろうとしている毛伊佐へのプレゼントだ。今まで毛伊佐が老人達を虐待してきたことをそのままそっくり返してやっている。

毛伊佐はむせながら何ごとかを叫んでいる、が、だんだん弱ってきているのがわかった。

ブルーアイの青年、李が合図をした。

毛伊佐の父親、案新恵二がもどってきたのだ。多分事務員から大富豪アナンダ様が来客中であることを聞いてまっすぐにこの部屋にやってくるに違いない。

積子はうなづいてコバヤシこと虹子に目で指示して手際良く拘束服を脱がし始めた。手際良くくるりと拘束服を剥いでやるとラップに巻かれた毛伊佐の全身が現れた。
すでに身体中に詰め込んだ綿花は出血を吸ってぐっしょりしていた。血がしたたっているがラップをきっちり巻いているのでそんなに汚れないだろう。

よいしょっと気合いをあわせて2人で持ち上げたところを李が助けて、秘密のダストシュートから毛伊佐の身体を放り投げた。
毛伊佐の呼吸停止つまり「死亡確認」はしてはいないがあの出血では助からないだろう。そして死体はあがってこないだろう、何て素敵なゴミ箱かしら？積子は真っ暗なダストシュートに耳をすませた。
海のさざ波しかきこえてこなかった。
案新毛伊佐のあっけない最後だった。

積子がダストシュートから身をはなすと李が間髪をいれずにシュートの扉を閉じ、その表面に家具を元通りに置いて行った。虹子は一生懸命拘束服をたたんで金色のトートバッグに押し入れている。積子は残った綿花で毛伊佐の血を拭いている。ラップを巻いておいたのでそんなに出血はひどくなかったがそれでも多少の液漏れはあったのだ。
コンコン、ノックの音がした。虹子と李がさっと積子の顔を見たが積子のＯＫのサインでさっとあけた。毛伊佐の父親の案新恵二だろう。
きょうは恵二の親友が亡くなったとうその連絡をいれて午前中はここを離れてもらったのだ。
これからが総仕上げにかかる。

だがこの部屋をノックしたのは恵二ではなかったのだ。

アクシデント発生！

第２１話

それはさきほど秘密のダストシュートに放り出した案新毛伊佐の父である案新恵二ではなかった。この階にエレベーターをはさんで居住している平豪（ひらごう）婦人だったのだ。

平豪婦人！

積子は事前のデーターで居住中の老人たちの身元を一応把握していたので誰かがすぐにわかった。平豪財閥の元総帥婦人だ。総帥はすでに亡くなり今は息子たちが後を継いでいる。経済、医療、政治、宗教ほぼすべてに平豪一族が地位を築いて順調に業績を伸ばしている。確か年齢は１００歳近かったはずだ。そして宝石が好きで１０本の指に大きな石をはめているのもデータ通りだった。

だがこの状況においてさすがの積子も、この老婦人が毛伊佐の個人的なこの事務室に出入りできるほど元気だとはおもわなかった。

とんでもないアクシデントだった。李が平豪婦人の後ろにさっとまわって「どうしましょうか？」というふうに積子に目で確認をとった。積子の指示があればこの夫人だってあのダストシュートの投げ捨てるのも李はやるつもりだった。

が、積子は首を振った。彼女には決定的なシーンは見られてはいない。

アナンダ様の恰好で日本語ではっきりと言った。輝く金色のロングドレスを着て手はオペ用手袋を血染めにしたままで。堂々と。

「平豪さん、ですね。毛伊佐さんはさきほどこの事務所を出られました。私どももこの部屋を間もなく出ます」

平豪婦人はうなづいた。そしてしわだらけの顔をほころばせて積子に問う。

「ねえ、殺したの？」

なぜわかったのだろうか。積子はいぶかしんだ。だが返答はきち

んとした。どんな相手でも積子は人をだましたりごまかしたりはしない。ターゲットをのぞいては。これは積子なりの対人関係に関する信条だ。
「彼女はいろいろと恨まれていましたからね、」
と一言だけ答えた。この人はどうしようか、脅かしても多分だめだろう。積子は平豪婦人の一筋縄ではいかない行状を報告で知っているし、その毅然とした態度と言葉遣いで正直に答える。
「で、たった今、そこの備え付けの素敵なダストシュートに放り込んどきました」
平豪婦人はうなづいた。
「じゃあ今までの報いをうけたのね。でも私の世話をしてくれる人がいなくなって私は困るわ、どうしてくれるのかしら」
積子は丁重に答えた。
「大丈夫ですよ、平豪婦人。貴女様の場合正直に申しまして他人を動かせるだけのお金をお持ちでいらっしゃいますから」
「まあ、はっきりとおっしゃるのね、」
老婦人は笑った。そして首をすくめた。
「お名前をうかがってよろしいですか」
「志神積子と申します。精神科医です」
「そおー、どなたかに依頼されたのね」
「まあそうです。あの、平豪さん、どうされますか、警察にいいますか」
「警察？ほほほ、この年で警察にいったって、表彰してもらってもどうしようもないわ、おほほほ」
平豪婦人は笑った。この夫人はいろいろな人間を知っているのだ。そして杖をぐっと分厚いじゅうたんに力をこめて差し込み、首だけまわして自分の後ろにまわった李の方をじろっと見た。
積子は１００歳近い婦人の豪胆さに心の中で賛辞していた。平豪婦人はもういろいろなものを見聞きしているので多少のことでは驚かないのだろう。なんでも平気の平左というのは積子だって一緒だ

が、果たしてあの年で呆けずにでもいられるのだろうか。私もああいうおばあちゃんになりたいものだわ、と思った。
「じゃあ私は無用みたいなので部屋に戻ります。ねえ、そこのあなた、送ってくださる？」
李にあごをしゃくった。まるで使用人扱いだった。李ははじめてとまどったように、積子の顔を見た。積子は間髪を入れずに「おっしゃるとおりにしていらっしゃい」と答えた。
李は平豪婦人の手をとり出口に誘導する。奇妙なペアと入れ替わりに案新恵二が部屋に飛び込んできた。葬式用の喪服を着ている。急いで帰ってきたのだ。

積子と虹子がトートバッグに拘束服や手袋、ラップの芯を入れている。
「やれやれ遅かったわね、まあこんな田舎で大雪だと仕方ないわね」
積子は恵二に言い放つと恵二は立ち止った。恵二はどう反応していいかわからない。

恵二の長年の知り合いの知人の葬式はうそだった。誰かが恵二にうその電話をして恵二をかついだのだ。
毛伊佐に大事な客人、アナンダ様とやらが見学にくるからぜひ「あんじん」にいてくれと頼まれていたが古い友人でもあり恩人でもある人の葬儀を欠席するわけにはいかない。だからこの悪天候の中東京にいったのだ。
なのに、葬式はうそで自宅からは本人がぴんぴんして出て来た・・。恵二はだれがなんのためにわしにうそをついたのかと、いぶかしみながら「あんじん」に急いで戻ったのだ。
とすれば、この人たちが中東からの見物客だろう。1階にいた事務員が騒ぎながらわしに報告してくれたが確かに駐車場にはすごいリムジンがとまっていて中に運転手が待機していた。それに彼らの

来ている豪華な衣類といい、ソファに放り出されたすごい毛皮といい、大富豪には間違いはなかろう。
さきほどブルーアイの青年と平豪婦人が手をとりあって自分の部屋に帰って行ったのにすれ違ったが知り合いだったのだろうか。いやそれもあり得るだろう。なにしろ平豪財閥は海外にも認知度は高い。
中東からの客人と知り合いだったとしてもありえる話しだ。

だが・・、我が娘、案新毛伊佐はどこへいっているのだ・・？
1回の事務室へ書類でも取りに行っているのだろうか？姿は見なかったが知らずにすれ違ったのか。それに・・、この血の臭いは何だろうか。
血の臭い・・・。禍々しい血の臭い・・・・？？

案新毛伊佐の父、案新恵二の頭の中は疑問だらけだった。

第２２話

積子はトートバッグのチャックをきっちりとしめると虹子が事務室のドアをきちんと閉めた。

案新恵二はどういう反応をしていいのか立ちつくしているだけだ。この異形の客人達はこの部屋で一体何をしていたのだ。娘、毛伊佐ご自慢の大理石の机の上のこまごまとして小物が全部なくなって下に落ちている。がらんとした大理石の机に確かにこの客人達は何かをしていたのだ。

が、娘、私の娘の案新毛伊佐は「一体、どこにいるのだろうか」

やがて恵二は意を決したように話しかけた。まずは英語で話しかけた。

「あの、アナンダ様ですね。娘とはもうお話はおすみでしょうか」

返事はなかった。

虹子はトートバッグを積子から受け取り、肩にかけた。そしてソファに放り出されたままのロシアンセーブルを積子に着せる。帰り支度を迅速にしているところなのだ。セーブルをこのまま放りだすわけにはいかない。証拠はできるだけ持って帰られないといけない。廊下に出ると防犯カメラが私達を見つめている。できるだけ来た時と同じ服装で帰るのだ。できるだけ派手で目立つようにして素顔が印象に残らないように用心を重ねて帰り支度をしているのだ。

恵二は今度はドイツ語で、そしてフランス語、拙いイタリア語・・。手持無沙汰でおろおろしはじめた。様子が変なのがわかったのだ。

こんなときに我が娘、毛伊佐は一体どこにいるのだ・・・？

さあ出ようかというときに、やっと積子は振り返って案新恵二の目をまっすぐに見つめて、うなづいた。そして語った。もちろん日本語で。

「ええ、話しは全部すみましたよ。娘さんは今外にいます。もう帰ってくることはありません」
「え？外に？この大雪の中を外出したのですか？お客様を置いて？？帰ってこないとはまたどういう意味でしょうか・・・？」
「外出ではなくてそこの出口から出てもらったのです」
積子は大理石の机のそばの壁際のチッペンデールの家具を指さした。

げええっ・・・！！
声にならない悲鳴を恵二はあげて、家具のそばにかけよる。
「毛伊佐ッ！！」
恵二は家具を急いでのけようとしている。あんなできの悪い殺人癖のついた毛伊佐でも娘だとかわいいのね・・、積子はそう思った。
積子は恵二にやさしく声をかけた。
「案新さん、よろしいですか？私どもは貴方達親子がしていたことを警察に言うつもりはありません。いいですね？ただ毛伊佐さんはやりすぎたのです。
・・・落ち着いてよく聞いてくださいよ、いいですね？だから報いを受けました。あなたまでの償いは不要です。
だからわかりましたね、後の処理は今までしたきたとおり、捜索願をだすなりご自由に。書類や生命保険請求も慣れていらっしゃることでしょうし、どうぞ、ご自由に。
警察への報告のタイミングや雇っている事務員やヘルパー、入居者の説明もおまかせしますからね。
じゃあ、失礼しますね」
積子は恵二に軽く会釈すると虹子にドアを開けさせて部屋を出た。恵二はチッペンデールを乱暴に動かして秘密のダストシュートをあけようとしている。あとは彼が冷静に対処するか、錯乱して娘の後を追うかそれは彼の自由だ。
だが案新恵二のこれまでの経歴から毛伊佐同様、生きることと富

に執着しているのはわかっている。今は取り乱していても気分が落ち着けば、きっと今まで通り、「賢く、行動するだろう」と思っている。

エレベーター前でアナンダ様と秘書コバヤシ、そしてブルーアイの青年は合流した。3人だけでエレベーターに乗り事務所前のホールを堂々と通り、入居者やヘルパー、事務員、介護士たちに「しゃよならあーー」とていねいに挨拶して待機させておいたリンカーンに乗って彼らは帰っていった。

気の回る事務員はこの賓客にどうして案新親子が出てこないのかいぶかしんでいたが、秘書コバヤシが先に「こうしょーけつれつ、こうしょーけつれつ」と言ったのでああ、交渉が決裂つまりアナンダ様のお母様は入居されないんだと納得した。それで案新親子はむくれたのか出てこないんだ。失礼な話だが今までにもよくあった話なので事務員たちは驚かなかった。

そしてがっかりしつつ丁寧に「ご見学ありがとうございました」とお辞儀をしてみなで見送ったのだ。

こうしてしにがみつみこと、志神積子は鳥居超三井の依頼で案新毛伊佐を葬ったのである。

帰る道、虹子にブルーアイのコンタクトレンズをはずしてもらいながら、積子にポケットから何か光るものを出した。それは指輪だった。何カラットあるのだろうか、見事な無傷なピンクダイヤだ。

「平豪婦人が部屋まで送ってくれてありがとうってくださったのです」

「ふーん、でもそれだけではなかったのでは？」

李は顔を赤らめた。

「ええ、殺し屋の手伝いをしているのか、とはっきり聞かれました。それでぼく、そうですっていったんです」

虹子は笑った。

「それで何か依頼されたの？」
「いや、将来どうするつもりかと聞かれまして、医学部に入りたいので勉強中ですと答えたら学費の足しにしなさいって手にはめておられた指輪の１つをくださったのです。ぼくのポケットに手をいれて。あんなにあっさりとモノをいただいたのははじめてです」
「よかったじゃないの？」
「いただいていてよろしいのでしょうか。ダメでしたら折を見て返しにうかがおうと思います」
「どういう用事であっても現場には二度と戻らないこと。それはいただいて大事な時に使いなさい」
「わかりました」
虹子は李の指輪をじっと見ている。宝石類が好きなのだ。１目見て値段がつかないほど貴重で高価なダイヤだとわかったのだ。
積子は李に話しかけた。
「平豪婦人は他に何かおっしゃっていましたか」
「はい、私はもう年なのでそういうおもしろいことはできないわって」
「まあ、おほほほほ」
積子はそれを聞いて大笑いした。平豪婦人の魅力に積子も参ったのだ。
それでもあんなに魅力的で大金持ちでも彼女は施設「あんじん」に入れられていたのだ。それは彼女自身が決めたのかそれとも家族に入れられたのかまではわからない。李はしみじみを言った。
「最後に平豪婦人はおっしゃいました。私はお金持ちだけど、貧乏でいいから私と一緒に暮らしてくれる子供と孫とひ孫と暮らしたかった。そして住み慣れた家で死にたかった。だけどもうみんな忙しいからね。だれも年取った私にかかわろうとしないの。
殺し屋に言っておきなさい。老後の備えは必要だよって、お金があって入る施設には困らなくとも愛情貧乏ってあるからねって」
「・・・そう、そうかもね・・」

積子はそっとつぶやいた。

第２３話

リムジンは雪国から都内に入る。すでに日はおち、クリスマスムードを盛り上げるイルミネーションやフラッシュがあちこちで見れる。行き交う人々も浮かれているように思える。いつもの平和な東京の風景だ。

地下３階の積子の診療所の入っているビルの駐車場に到着すると積子と李が降車。セーブルはそのまま車中に置いておく。これは城田へのチップのつもりだった。

城田はこれから車のナンバーを付け替えたあと、返却する仕事が残っている。こっちの始末の方が大変だろう。

虹子はそのまま城田に送られるために継続して乗る。そしてごく普通のスーツに着替えるのだろう。それからどこぞの繁華街で下りて人ごみにまぎれてどこぞの駅を一周してそれから買物にでも行くのだろう。だって彼女はお買い物が趣味で積子は彼女にもものすごい額の時給をプレゼントしたのだから。

最後に診療所に着いた後、積子は李にはじめて下の名前を聞いた。

「李勇と書いてリ・ヨンと読みます」

「在日韓国人なのね？」

「いえぼくは孤児です。国籍もわかりません。育ててくださった人が在日の韓国人なんです」

「その人はあなたの戸籍をどうとか考えなかったのね」

「いきさつを話すと長くなりますが、そういう世間一般的な常識を守る人ではないです。ただその人には当然恩義があります・・・もう亡くなられましたがね」

「何をしていらしたかたなの」

「武道場経営者です」

「絵図さんとのかかわりは」

「実は絵図さんもそこの生徒だったんですよ、彼はぼくを赤ちゃんの時から知っています」
「ははあ、なるほど」
それから李は改めて積子に自分の携帯電話番号を教えた。
積子は李にミントティーを入れてあげた。
李がその味の紅茶を気に入ったのかはわからない。無表情ではあったが丁寧な態度でお茶を飲んだ。それから「ごちそうさまでした」と言った。それからついでといった感じでぼそっとつぶやいた。
「いつでも呼んでください。いつでも来ます」
積子はうなづいた。
李は積子に近づくとにこりともしないまま頬にキスした。積子は驚かなかった。李は最初からなぜか積子に好感をもっているのを知っていたからだ。ただ情欲とか恋愛感情ではない。積子がずいぶんと年長だからであろうか。でも肉親や親に対するそれでもない。これはなんだろうか？友情？いや、一番近いのは「親近感」だろう・・。精神科医の悲しい性で人の行動や心理を自分が思わなくとも勝手に心の中で自動的に分析してしまう。
「親近感」ねえ・・・。
恋愛対象にはこの場合通常ありえない。第一恋愛にはかかせない、人を思う愛情めいた視線の暖かさというものが欠けていた。
他人を殺める同志めいた感情であろうか・・・？こういう交流は積子もはじめてだったのでおもしろく思った。毛伊佐の流した大量の血を見てお互い無意識的に興奮しているのかもしれない。
李は今積子にキスをしたが積子に怒られないだろうとも思っているのを知っている。積子もまた今度の仕事の、そう・・この珍しい仕事のパートナーになりえる相手に巡り合えたのは希有なことだとも認識している。
第一この李は冷血漢で絵図から命令されて殺しもしているだろうという青年なのだ。

積子は微笑んで「そうか、リ・ヨンっていうのね・・」左の人差し指で李の首をすっと撫ぜた。それが李を大胆にさせた。
「そうです」李も積子の髪を撫ぜる。
「リ・ヨンはよく知らないけれど、リヨンといえばフランスの南東にある都市の名前よ」
「連想ですか、そこ、何があるんですか」
「オペラ座とおいしい料理屋さんがあるわ」
「行ったことあるんですね」
「ふふ・・・」
「ぼくはどうですか」
いきなり李の声がかすれた。積子は返事をしてやらず、顔を李の肩によせそのまま撫ぜた。

・・あとはもう言うだけ野暮だろう。

2時間ほど一緒に過ごしてから李は最終の新幹線で大阪へ帰った。積子は診療所でそのまま泊まった。次の仕事？それはいつでもある。動くのは積子次第。恨み事はいつでもどこにでもある。
精神科医としての仕事ももっと、いつでもどこにでもある。
今度はどこへ行こうか。
積子は素裸でソファでそのまま胡座をかいている。ソファの下にはくしゃくしゃになったゴールドのドレスが落ちている。ポットに入ったまま冷たくなっていたミントティーを李が使ったカップに入れて一気に飲み干した。
窓からはクリスマスのイルミネーションが見える。私は今ここ、李は新幹線、そして安新毛伊佐は冷たい海の底。自分が放り込んで殺した入居者たちと一緒に。
依頼者、鳥居超三井への報告は明日にしよう。薄暗くした診療所の中で積子は身体のほてりの余韻を楽しみながら小さくあくびをした。

「あんじん」の項、　完

第1話

冊自誠一（さつじせいいち）が東京の積子の診療所にやってきたのは、つい1週間ほど前だった。

彼とはもともと同じ大学で学部も同じ。また彼も医師免許を持っているし、薬剤師免許も持っている。彼は2浪したうえで医学部に入ったので積子よりは年上だが、研修した病院も同じとあって、同級生かつ同志という面もあった。なかったのは恋愛感情だけかもしれない。

冊自と最後に会ったのは研修中に冊自の父親が事故で亡くなり、その通夜だった。だから10数年ぶりの再会だったが、積子は冊自の憔悴ぶりと積子にすがりつくようなまなざしに驚く。

「志神、いきなり、すまん。しかし君にしか頼めないことがあるんだ。ぜひ引き受けてくれ・・・、頼む、助けてくれ」

「確かにいきなりな話しね・・・。えーと、冊（さつ）ちゃん、どうしたの・・・？」

「・・親父が亡くなったあと、兄貴と一緒に事業を継いだのは知っているだろ？兄貴は病院を継ぎ、俺は院外薬局の新設ブームにのって調剤薬局チェーンを創ったんだ。まず主力の本店は兄貴の病院の門前にある。

チェーンの経営は順調で支店拡充にも特に障害もなくやってこれた。おおむね黒字で安定経営だ。

なのに・・・大変になりそうな事態がおこりつつある。俺の薬局チェーンの存続どころか、兄貴の病院経営の・・、いや、医薬品業界の信用を根底から揺るがす事態だ・・。この話は決して大げさな話しじゃない！」

積子は診療所のスリッパをはき替えもせずすがりつくようにモノを言う冊自にあきれたが、「まあまあ・・とりあえず中に入って、ゆっくり話を聞きましょう」と言った。
それから話を聞いたが確かに事態はゆゆしきことで、早く解決しないと、これが世間にもれると大変なことになる出来事がおこりつつあった。
ターゲットが定まると事実調査をして用意周到に事に臨むのだが(前述したヒイロ・ヨカナンは1日で決着をつけた。しかしこれは訳ありでかつ特例だ。)これは早くケリとつけないと、医薬品業界自体の存続が危ぶまれることになりうる。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

今回のターゲット。
それは冊自誠一の経営する調剤薬局チェーンのメインとなる冊自薬局本店の雇われ薬局長。その名前は野々口営口（ののぐちえいこ）だ。
彼女を早急に「自殺させてほしい」という依頼だった。
まずは冊自の話しから野々口のした所業を聞いてみようか・・

第2話

冊自薬局本店は野々口営口(ののぐちえいこう)が雇われ薬局長イコール管理薬剤師としてしきっている。冊自誠一が薬局を創業した時から勤務しているベテランだ。

野々口は新卒で採用された。採用当時の野々口は、薬剤部を卒業したばかりのまだ初々しい薬剤師だった。（↑過去形）

それがなぜ、こういうことになったのか？

なぜ、社長の冊自は野々口を自殺させてやってくれと積子に頼む羽目になったのか・・？？

「野々口に男ができたのです。それはいいですが・・、いやよくなかった。

その男が野々口をだめにしてしまった。その男は野々口を金づるにしたのです。そして野々口も結局悪魔に身を売ったのです。野々口はその悪魔のような男の気を引くためになんでもする女になってしまいました。

そう、性格自体が変わってしまったのです。

彼女は元々頭の回転がよく、仕事の覚えも早かった。にこにこして患者の受けもよい。性格もおとなしい。

本店は一番最初に作った薬局で、人数も多い。薬剤師はパートも含め、7人いる。近隣にも大型病院施設や、医院が点在し、1日処方箋件数を300前後、応需しています。

最初の最初、の創設時に兄貴の病院の薬局から引き抜いてきた薬剤師数人が優秀かつ敏腕で院外薬局の創設と共通の調剤マニュアル、患者対応マニュアル全部作ってくれました。改良を重ね、今ではよその薬局も真似されるようになっています。

彼らは冊自薬局チェーンの各店舗の薬局長として活躍してもらっ

ています。いや、私は本当に人材には恵まれたとおもっています。優秀な薬剤師の確保は調剤薬局の成功につながりますからね。

だが野々口だってどこかの支店の薬局長として独り立ちしてもらうつもりではいました。だが彼女は拒否したのです。若い時からなぜか異動は絶対拒否でした。本店と家が近いから遠くに通勤したくはないというのがその理由でした。

勤務態度？それはごく普通です。目立たないですが薬剤師会主催の勉強会や製薬会社の主催の新薬紹介の説明会などはまめに通っていたと思います。そして本店勤務してすでに１０年。彼女は３４歳だが、まだ未婚のままです。

野々口がいるその本店。

薬局長に野々口の上司にあたる沢井という男がいたのですが、急死してしまったのです。若い時から糖尿病を患っていてインシュリンをうっていたのですがあるときなぜかインシュリンをうちすぎて店内で倒れすぐ兄貴の病院で治療したが昏睡（コーマ）状態が続き、亡くなりました。それが一昨年です。野々口は副薬局長の地位にいたが自動的に昇格させました。

再度強調するが野々口の勤務態度はごく普通でした。無断欠席等もないし、特に問題もおこさない。薬剤師会主催の勉強会や製薬会社の新薬説明会などはまめに通っていたと思います。

可もなく不可もない薬局長ですが１０年本店にいてくれたしまあ流れとしては妥当だったと思います。野々口が変わったのは、それと前後しています。

基本的に医師もそうだが薬剤師も実家が裕福な家の出身が多い。教育にお金がかかるからだろう。だから医師の家庭や薬局経営の子弟が多いのも当然だろう。

しかし野々口は苦労人だったという。母子家庭で奨学金を得て高校を出る。冊自薬局は卒後に就職することを条件に無利子で奨学金

を融資していることもあり、それがきっかけで野々口が入局した。
　野々口は素直でかわいらしく、年配の患者にもやさしくまわりの同僚にも受けがよかった。頭の回転も速い。この子は今は若い故、経験不足だし性格もおとなしすぎる。だが真面目というのは貴重な人材だ。１店舗まかせられる薬剤師になれるかもしれないな、と冊自も楽しみにしていたという。
　それが冊自薬局どころか医療業界の信頼を壊しかねない怪物になったのは一体何ゆえか・・・

　野々口営口のしたこと・・・ずばりそれは患者の殺人だった。それも薬剤師免許の利用しての。また本店薬局長の地位を利用しての・・・。
　まずは前の薬局長の沢井もインシュリンを利用しての低血糖症状を作為的におこした可能性もある。それを思うと恐ろしい、だが当時は何も思わなかったのだ。疑いもしなかった。彼女が殺人をしても平気な人間だとは全く思わなかったのだ。
　警察にも相談するわけにはいかない。冊自がここまで仕上げた薬局チェーンの信用を傷つけたくない。死人が出ている以上、事を穏便にすますわけにはいかない。
　とどのつまり、野々口には死んでもらうしかないのだ。しかも、自分の罪を告白したうえでつぐなってもらうしか・・。そう、自殺に持ち込んで罪をつぐなって死なせてもらいたい。
　野々口を雇い入れた社長としての自分の責任は取らねばならないだろう。その前に蹴りをつけねばならぬ。失敗は絶対許されない。
　志神、この仕事を秘密裏に依頼できるのは君しかいない。事は急ぐ。金ならいくらでも出す。ぜひ引き受けてもらいたい・・・！
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」

とりあえず積子はあきれた。
「ねえ、冊ちゃん、警察には言っておいたほうがいいよ。その野々口という女、法にのっとって裁かれた方がいいと思うよ。長い目で見てその方がいいと思うけどな。
　冊自薬局チェーンから逮捕者が出たという、風評被害は多少なりともあるだろうけど、営業停止処分などはこの場合受けないと思うしなあ」
「いや、だめだ。患者の口コミって本当に大事だ。命綱なんだ。だからこんな事態になってしまって、そりゃ人事権を握っていて野々口なんかを本店の管理薬剤師なんかにしたぼくが一番悪いかもしれないが、そこから一般世論で批判が高まって倒産に追い込まれたら一体どうなるんだ？
　野々口のような女一匹のせいで今まで培ってきた信用が一度で崩れてしまうんだぞ。ぼくは嫌だ。
　なあ積子、頼むよ、引き受けてくれよ」
「自殺ではなく、自首を進めるべきだと思う」
　積子はきっぱり言った。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」

　野々口のしでかした所業は証拠もないようで実は探そうと思えばあるのだ。だから積子は警察に言った方がいいというのだ。
　しかし冊自は困ると言う。
　堂々巡りの議論で時間を無駄にする気はなかったが積子は根負けした。だが引き受けるとはいわなかった。証拠を提示して彼女に警告を与えるならいいと言ったのだ。

　」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

まずは野々口のした所業をみてみよう。そして積子がどうやって野々口に対決したのか・・・。見てみようか・・・。

冊自の話はまだすんでない。

第3話

要は野々口をできるだけ早く罪を告白させて早急に自殺させてほしいという依頼だった。

人１人を自殺するように仕向けるのは、しかも本人にわからぬように自殺に追い込むのは時間がかかる。冊自はそれもできるだけ早く、というのだ。

「それだったら、事故に見せかけた方が話しが早いじゃないの。えらく遠回しの込み入った話しをしてさあ。めんどくさい仕事は嫌よ、さっさと警察へ行ってくださいな」

「そんなこと言わずに、頼む。・・・・もっと全部話すから」

「えー、まだ話しの途中なの？」

そう、まだ話しの途中だった。積子は彼女の身の上話を聞いて深層心理に資産家への憎悪があるな、と感じた。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」

野々口営口（ののぐちえいこ）。

彼女の成育歴には特記事項が３つある。

彼女は母子家庭の出身で苦労をしている。父親はもとからいず、母親は水商売をしていたという。母親の両親つまり野々口の祖父母にあたる人間が死去と同時に莫大な遺産のかわりに莫大な借金を残してしまったのだ。なぜ母親が自分に覚えのない借金を相続したのかはわからない。放棄していればそんな目にあわなかったはずだ。当然金銭的にも苦しい日々だったという。

水商売で夜は不在の母親。野々口は近くの公園で夜中でも１人でよく遊んでいたという。幸い公園といっても冊自の兄の経営する病

院に隣接していたので夜でも明るかったのだ。その時にもう1人年上の男の子がよく遊びに来ていた。彼も育ての親が不在がちで一人ぼっちだったのだ。

幼い野々口はその子が一緒に遊んでくれるとすごくうれしかった。お兄ちゃんとよくなついでいたようである。年は10歳位上だったようだが、向こうも小さな妹とばかりかわいがってくれていたようである。しかしそのお兄ちゃんはいつのまにかいなくなる。再び一人ぼっちで夜の公園で遊んでいる幼い野々口。あのお兄ちゃんともう一度会って一緒に遊びたいと思っているうちに大きくなる。

特記事項の1つ目がその男の子だ。長じて彼と野々口は出会い、2人共謀してこれと見定めた患者を殺して金を着服するに至る。

2つめの特記事項。幼い野々口とある初老の薬剤師との関連。その出会いが彼女に将来の職業を決める糸口になる。だが同時に殺人者へ至る切り口にもなった。

仲良くなったお兄ちゃんがいなくなったが野々口は公園に行くのをやめなかった。だが夜の公園へ行くのに雨風が強いとき、寒いときは当然行けない。その時は病院の横に小さな薬屋さんがあった。そこの軒下に行くと雨風がしのげる。ある夜そこで1人遊んでいるとすぐそこに通用口があって勤務している薬剤師が野々口に気付く。もうおばあちゃんといっていいような白髪の老人で幼い野々口がこんな時間で1人いるのにびっくりする。

家の事情はわからないながらもその薬剤師は野々口には親切にしてやったようで、売れ残りのお菓子や試供品のジュースを飲ませてやったりしていた。通用口から薬屋の中を見ているうちに野々口は薬品に興味を持つようになる。長じて薬学部を希望するようになったのはこの原体験が大きかろう。

原体験の話はもう1つある。これは冊自が野々口と雑談していた

ときに直接聞いた思い出話。野々口が遊んでいたときに公園でいきなり倒れたひとがいて野々口が近くの薬局に助けを求めたことがあった。その倒れた人は胸を苦しそうにかきむしっている。すぐにおなじみの薬剤師がかけより、介助したという。　もともと病院の通院の行き帰りに薬局に立ち寄っていた患者さんらしく、倒れた人が普段から何の薬を飲んでいたか把握していたのだろう。

「心臓病の薬がかばんの中にあるはず。一緒にさがしましょう！」

その老年薬剤師と幼い通報者の野々口は患者のかばんから薬を探す。

かばんからはいくつもの種類の医薬品が出てきた。その薬剤師は一目で薬をより分けて患者に飲ませたのです。その薬は今から思えば舌下錠でした。舌の下に押し込むようにして小さな錠剤を入れたのをよく覚えています。患者は意識を回復する。

歩き出そうとする患者を止め、すぐに病院に診察するように電話を入れたから行きましょうという薬剤師。病院はすぐ隣なのでその人は患者を介助しながら付き添ったのです。その一部始終をまだ小さかった野々口は見ていた。

「・・・私はその薬剤師さんがすごくかっこよく見えたです。あの人はたくさんの種類があった薬物を一目みただけでどのくすりが何に効くかわかったのです。今から思えばあれはただのニトログリセリンですが、もし救助したのがまったくの素人だったらわからなかったでしょう。隣の病院から助けがくるまで付き添うだけだったでしょう。私は薬剤師ってすごいと思った最初の体験なんです。

大きくなってから薬剤師を目指すようになったのはその人のおかげでもあります」

野々口が冊自薬局に就職した時に、冊自本人に教えてくれた話だった。その薬局はつぶれてその地所はそのまま札自薬局が買い上げていまの本店になっている。

そう、幼い野々口にとってその薬局と尊敬すべき薬剤師はいつの

まにかいなくなっていた。野々口の大学進学時にはおばあちゃん薬剤師は亡くなり後継者がなかったので冊自が購入したのだ。野々口のまだ在学中の話だ。冊自は言う。

「まだ薬局の建て替え中に、野々口は来たんだ。あの例のおばあちゃん薬剤師が帰ってきたのかと思ったみたいだったな。死んだらしいと伝えたら泣いていた。真面目そうな子でな。好感をもったよ。

薬科大学に在学しているというから、卒業したらここに就職するといいよって言ったんだ。

それがここに来た縁だな・・。本当に真面目な子でね。

親に負担をかけたくないからって授業が終わってから居酒屋と家庭教師のバイトを掛け持ちでしてね、苦学していたようだったから、こっちに就職することを前提に援助も申し出たんだ。彼女は喜んで受けたよ。これもあのおばあちゃん薬剤師のおかげだって・・・」

野々口は、そういう縁で冊自薬局に就職したのだ。

冊自は新人の野々口の真面目そうな態度と薬剤師になったそのエピソードを聞いて即決で雇用を決めた。

「この子なら真面目に務めるだろう・・私の選択はだが間違いだった。」

実際にそうだった。

最後の特記事項その3。

話が前後するが野々口は9歳のころに母親と死別する。その後は児童養護施設に18歳になるまで入所、生活をしている。大きな借金はほぼ返済し終えていたようで野々口本人には迷惑がかからなかったようだ。だが母親の苦労と借金取りのむごさは身に沁みこんでいたようで金持ちと銀行は大嫌いだと言っていた。

長じて学校の成績はよかったようで、高校卒業後は大学進学、それも薬学部を希望していた。国立でも学費はかかる。だが努力の甲斐あって奨学金を獲得。だが生活費は自分で賄わないといけない。

野々口は苦労していたようだ。だが冊自との出会いで多少は楽になったのだろう。

そうして無事卒業後、薬剤師免許取得晴れて冊自薬局本店勤務の薬剤師となったわけだ。

第4話

幼かった野々口と親しんだおばあちゃん薬剤師の亡き後、冊自が買い上げる。

その薬局の買い上げは実は隣の冊自病院の院外処方線の発行準備のためだった。院外薬局は文字通り病院の敷地外のところで処方箋を持って行って調剤してもらうところだ。

病院の敷地外、そして同じ経営者だといけないというのがポイントだ。冊自病院の院長は冊自の兄だったが弟は薬剤師だ。だから経営者は同じではない。経営母体も違う。あちらは医療法人になっている。

「ちょうど厚生労働省が院外処方箋発行を推進しはじめたころでね。冊自薬局は追い風になったよ。関連病院の門前にも手を出して次々とチェーンを出していった。

細々とした家族経営の小さな薬局にも立地がよいと買収して冊自薬局チェーンにしたりしてね。我ながらがんばってきたと思う。

野々口はおとなしくて真面目でね、ゆくゆくは1店舗まかせるつもりだった。そのためにいろいろな薬局の経験を積んでほしかったのだが、彼女は異動をこばんでね。なぜか不思議だったがすぐにわかった。

彼女は友達だったのに、いきなりいなくなった男の子ともう1度会いたかったのだ。例の公園は今でもある。今でも現、冊自薬局の隣にある。

だからいつかあの男の子も来るのではないだろうか。そして薬局にも来るのはないか、再会できるのではないか、とね。

ぼくはその話を聞いてそれは幼いころの追慕というにはあまりに粘着気質なんだろうかとちらりと思った。現実と未来を見据えていないんだ。母親とその男の子、それとやさしかったおばあちゃん

薬剤師。彼女の人生に影響を与えた人はこの3人だけなんだよ。母親は死別、おばあちゃん薬剤師も亡くなった。残るはその男の子だ。今どこで何をしているだろうかって。

そんなこと、いまどきの女の子が考えることだろうか。

まあ、いうなれば純愛だろうね。だが純愛にはならなかったのはご承知のとおり。

全く、とんでもないことだった・・・。

野々口があの男の子と再会したのは入局して3年ほどたってからかな・・。それは当時本店薬局長だった沢井君から聞いた話だ。

その男の子が処方箋を持ってきたらしい。私の兄が経営する本店の隣の病院の処方箋だ。受け取るなり野々口はその男の子、いや男性がだれかすぐにわかった。処方箋は個人情報の宝庫だ。同時に名前も年もそして病名も。

薬局に初めて来局する患者には住所も書いてもらう、だからなんでもわかった。

相手の男性は野々口が誰だか知らなかったらしい。だが野々口にはわかった。

沢井君は初診の患者でもあるし、自分が薬品を交付しようとしたら野々口がさえぎって渡させてほしいと言ったらしい。

野々口は自己紹介をすると男は驚く。その様子はすっかりと野々口のことなんか忘れていたようだったという。

男の名前は井伊元差益（いいもとさえき）年は野々口よりも5歳上だった。

そして大事なこと・彼は病弱だった。どこかで遠くの地方で療養のため入院していたらしい。顔色もすごく悪かったらしい。色白といえば聞こえはいいがはっきりいって蒼白でまるで死人のようでね。

幼いころに自分になついていた小さな少女が自分のことを覚えてくれていて、かつ薬剤師として立派に働いている。井伊元はびっくりしただろうが、心中ほくそえんだと思う。生活費と借金に非常に困っていたからだ。後で知ったことだが彼は前科4犯、懲役を繰り

返している。遠くの地方で入院していたとは真っ赤なウソ。刑務所にいたんだ。だがこれはあとでわかったこと。罪名はいずれも傷害と詐欺だ。野々口と再会したのはちょうど出所して昔住んでいた町に落ち着いたころだったんだ。

第5話

野々口と井伊元差益の再会。
野々口にとっては転落の人生のはじまりだ。

再会した井伊元。幼いころになついていた少女が薬剤師になっていた。しかも自分を覚えていてくれた。会いたいとも思っていてくれた。慕ってくれていた・・。

井伊元は野々口がいまだに自分を慕ってくれているのに感動しただろうか。処方箋と初来局の調査票で連絡先はすぐにわかる。多分野々口から連絡を取り二人で会うようになったのだろう。

二人とも幼いころは親の庇護も受けられず夜の公園で遊ぶしかなかった。そのさびしくもあり楽しくもあった記憶が二人を堅く結びつけたに違いない。

ほどなく二人は薬局の近くにアパートを借りて同棲するようになる。井伊元は野々口の助言に従い、沢井薬局長の口利きもあり、冊自病院系列の老人施設のヘルパーとして働くようになる。体調のこともあるが、まだ若いし何らかの資格をとるように、働くようにといったのは野々口の助言だろう。

病弱であっても働けるうちは自分の体力と相談しながら働くのは当然のことだ。

井伊元にとっては人生が変わったことに違いない。だがヘルパーの資格を取るのはたやすくとも病弱の身で介護施設で働くには激務には違いない。すぐに腰を痛めたとかで1か月も勤務が続かなかったとは聞いている。それから彼は本性を現した。

野々口を殴りつけて、本店薬局長の沢井にもひどい就職先を世話したとかで難癖をつけにきた。その時はまだ薬局の営業時間中で他にも薬が出来上がるのを待っている患者がいたというのに。

ひどいクレームだったらしい。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」」」」

「お前らのいうとおり、俺は生活保護申請を取り下げて働き始めたんだぞ。病気を持っているのに、疲れやすいのに働かせたんだ。それがどうだ！お前らのおかげで俺は腰を痛めて飲まなければいけない薬が余計に増えた。どうしてくれる！」

野々口は殴られて顔をはらしたまま黙って井伊元の罵倒にたえていたという。沢井も普通の会話が成立しない状況と彼の本性を現した性格に黙っているのが得策と耐えていたという。井伊元は自分の言いたいことを言い終えると去っていった。野々口は井伊元の感情爆発を黙って耐え、井伊元が去ると沢井薬局長に泣いて謝罪したという。

身体を痛めたのは事実であり気の毒な事態であることは否めないがそれを就職を世話した恩人に向かってお前のせいだと罵倒することとは通常の思考ではない。沢井は野々口にすぐに彼と別れるように言った。当然野々口も同棲もやめて井伊元と分かれるだろうと思っていた。が、野々口は別れなかった。

いやすでに別れられなかったのだろう。当時の野々口の言い分も聞いた。

「私が悪かったのです。彼には働いてほしかった。病気を言い訳にして家にごろごろしていたりギャンブルに時間を費やしてほしくなかったのです。でも彼には無理なようだったです」

殴られた女にしてはずいぶんと甘やかした言い分だ。彼女は別れなかった。それどころか井伊元が１カ月にも満たない医療施設の勤務でおいしい商売を見つけたのだ。それを井伊元と一緒になって薬剤師という身分を利用して利用者をだまし、殺人まで犯したのだ。

﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂」
﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂」

積子はあきれた。

「愛する彼が異常性格だったわけね。そしてその性格ゆえに見つけた犯罪に彼女は加担した、ということね？ばかばかしい。その時点で彼女を解雇すべきだったわね。ねえ、冊っちゃん？」

冊自はうなだれた。

「その通りだ。だがまじめ一方な彼女がそんなになるとは夢にも思わなかった」

「彼女にも倫理観がもともと欠落したところがあったのでしょう。それを探るのが目的ではないのでしょう？」

「そのとおりだ。それをさぐるという時期も解雇の時期もとうに失せている。問題はこの事態をいかに今後の経営の打撃を受けないようにいかに納めるかという。自体はそこまできているんだ」

﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂」
﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂﹂」

井伊元が見つけたお金の泉は無限にあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5829s/

しにがみつみこ

2011年11月29日14時47分発行